

自己点検・評価報告書

平成19年度財団法人短期大学基準協会
第三者評価（認証評価） 適格認定

2007（平成19）年

大阪音楽大学短期大学部

目 次

大阪音楽大学短期大学部の特色等	3
I 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標	
【建学の精神、教育理念について】	7
【教育目的・教育目標について】	8
【定期的な点検等について】	11
【特記事項について】	12
II 教育の内容	
【教育課程について】	13
【授業内容・教育方法について】	25
【教育改善への努力について】	25
【特記事項について】	26
III 教育の実施体制	
【教員組織について】	28
【教育環境について】	30
【図書館・学習資源センター等（以下「図書館等」という。）について】	36
【特記事項について】	39
IV 教育目標の達成度と教育の効果	
【単位認定について】	43
【授業に対する学生の満足度について】	52
【退学、休学、留年等の状況について】	53
【資格取得の取組みについて】	55
【学生による卒業後の評価、卒業生に対する評価について】	56
【特記事項について】	58
V 学生支援	
【入学に関する支援について】	59
【学習支援について】	61
【学生生活支援体制について】	62
【進路支援について】	67
【多様な学生に対する支援について】	71
【特記事項について】	73
VI 研究	
【教員の研究活動全般について】	74

【研究のための条件について】	75
【特記事項について】	77
VII 社会的活動	
【社会的活動（国際的活動は別項で記述）への取組みについて】	78
【学生の社会的活動について】	80
【国際交流・協力への取組みについて】	81
【特記事項について】	82
VIII 管理運営	
【法人組織の管理運営体制について】	83
【教授会等の運営体制について】	89
【事務組織について】	92
【人事管理について】	97
【特記事項について】	98
IX 財 務	
【財務運営について】	99
【財務体質の健全性と教育研究経費について】	101
【施設設備の管理について】	102
X 改革・改善	
【自己点検・評価について】	104
【自己点検・評価の教職員の関与と活用について】	105
【相互評価や外部評価について】	105
【第三者評価（認証評価）について】	106
【特記事項について】	106
《将来計画の策定（自由記述）》の記述について	107

大阪音楽大学短期大学部の特色等

(1)短期大学を設置する学校法人(以下「法人」という。)の沿革(概要)及び短期大学の沿革(概要)。

○ 学校法人大阪音楽大学の沿革

1915(大正4)年	10月5日	大阪音楽学校設立認可
1915(大正4)年	10月15日	大阪音楽学校開校 (校長 永井幸次)(大阪市南区)
1933(昭和8)年	12月18日	財団法人大阪音楽学校設立認可(理事長 永井幸次)
1948(昭和23)年	4月1日	財団法人大阪音楽高等学校設立認可(理事長 永井幸次) 大阪音楽高等学校開校(校長 永井幸次)
1951(昭和26)年	3月5日	学校法人大阪音楽短期大学に組織変更認可(理事長 水川清一)
	4月1日	大阪音楽短期大学開学(学長 永井幸次)
1954(昭和29)年	2月15日	大阪音楽短期大学増設認可 音楽科第2部
	4月1日	大阪音楽短期大学音楽科第2部開学
	10月15日	現在地に移転
1957(昭和32)年	3月22日	大阪音楽短期大学専攻科設置認可
1958(昭和33)年	1月10日	学校法人大阪音楽大学設立認可(理事長 水川清一) 大阪音楽大学設置認可 音楽学部
	3月31日	大阪音楽短期大学音楽科第1部並びに専攻科廃止
	4月1日	大阪音楽大学開学(学長 永井幸次) 大阪音楽高等学校を大阪音楽大学付属音楽高等学校と改称
1959(昭和34)年	11月11日	大阪音楽短期大学音楽科第2部を大阪音楽大学短期大学部と改称
1965(昭和40)年	1月25日	大阪音楽大学短期大学部音楽科第1部設置認可
	4月1日	大阪音楽大学短期大学部音楽科第1部開学
1966(昭和41)年	4月1日	大阪音楽大学短期大学部音楽科第1部に音楽専攻開設(入学定員変更)
	12月26日	大阪音楽大学音楽専攻科設置認可
1967(昭和42)年	1月11日	大阪音楽大学付属音楽幼稚園設置認可
	1月18日	大阪音楽大学短期大学部専攻科設置認可
	4月1日	大阪音楽大学音楽専攻科開設 大阪音楽大学短期大学部専攻科開設 大阪音楽大学付属音楽幼稚園開設
1968(昭和43)年	3月30日	大阪音楽大学大学院設置認可
	4月1日	大阪音楽大学大学院開設
1978(昭和53)年	12月25日	大阪音楽大学音楽学部入学定員変更(150名→225名) 大阪音楽大学短期大学部音楽科第1部入学定員変更(200名→300名)
1981(昭和56)年	3月31日	大阪音楽大学付属音楽高等学校廃止
1992(平成4)年	1月27日	大阪音楽大学短期大学部音楽科第2部廃止
	4月1日	大阪音楽大学短期大学部音楽科第1部を大阪音楽大学短期大学部音楽科と改称
2000(平成12)年	2月15日	大阪音楽大学短期大学部専攻科が学位授与機構認定
2004(平成16)年	4月1日	大阪音楽大学短期大学部音楽科にジャズ・ポピュラー専攻開設(音楽専攻募集停止)
2006(平成18)年	4月1日	大阪音楽大学音楽学部第Ⅲ年次編入定員化 (1年次入学定員225名→210名、第Ⅲ年次入学定員30名設定)

○ 大阪音楽大学短期大学部の沿革

本学は、1915(大正4)年10月15日に大阪音楽学校として創設され、1951(昭和26)年に学校法人大阪音楽短期大学へ組織変更認可を受け、同年4月1日に大阪音楽短期大学を開学、1954(昭和29)年に大阪音楽短期大学第2部を増設、1958(昭和33)年には学校法人大阪音楽大学の設立認可を受け、大阪音楽短期大学第1部並びに専攻科を廃止、1959(昭和34)年には、大阪音楽短期大学第2部を大阪音楽大学短期大学部と改称した。その後、1965(昭和40)年に大阪音楽短期大学部音楽科第1部設置認可を受け、同年4月1日に開

設、1966（昭和41）年には、それまでの作曲・声楽・器楽各専攻に音楽専攻を新たに加え4専攻とした。また、1967（昭和42）年には大阪音楽大学短期大学部専攻科を設置（同専攻科は2000（平成12）年に学位授与機構認定）、その後、1978（昭和53）年には入学定員を200名から300名に変更するとともに、2004（平成16）年、音楽専攻の募集を停止し、ジャズ・ポピュラー専攻を開設した。

(2)短期大学の所在地、位置(市・区・町・村の全体図)、周囲の状況(産業、人口等)等。

大阪府豊中市庄内幸町1丁目1番8号

Tel. 06-6334-2131（代表）

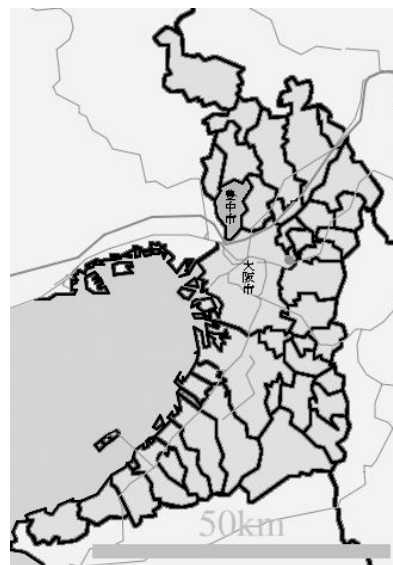
Fax. 06-6333-0286

URL <http://www.daion.ac.jp/>

豊中市（とよなかし）は、大阪府北部の北摂地域に位置する。面積 36.60km² 総人口 387,334 人（2006（平成18）年8月31日現在）。

大阪都心から15km圏内にあり、大阪都市圏の近郊都市、ベッドタウンとして、1955（昭和30）年代から千里ニュータウンの開発が急速に進んだため、下水道などの都市基盤設備（インフラストラクチャー）の整備率は高い。交通面でも、阪急電鉄、北大阪急行電鉄と阪急バスによる公共交通網、中国自動車道、名神高速道路、阪神高速池田線、新御堂筋をはじめとする幹線道路網、それに市北西部の大阪国際空港（伊丹市）の存在など、至便の地である。

概ね、阪急宝塚線の旧豊中エリア、地下鉄御堂筋線の延長である北大阪急行電鉄の千里地区に分けられる。高中級住宅地の北部、旧市街地の中部、商工業地の南部に分かれる。北東部の一角を日本初のニュータウン、千里ニュータウンが占める。



本学は大阪の都心から20分という至便のアクセスを誇る第1キャンパスと第2キャンパス及びザ・カレッジ・オペラハウスなど附属施設群からなる。

阪急庄内駅から徒歩7分、新幹線新大阪駅から車で15分、大阪国際空港（伊丹市）から車で15分、名神高速道路豊中インターチェンジ・阪神高速道路豊中南インターチェンジから車で2分。



周辺は商業地区と住宅地区の接点に当たる地域であり、都市型大学と言える。

(3)法人理事長、学長の氏名、連絡先及びその略歴、ALOの氏名、連絡先及びその略歴。なお、連絡先としては、TEL、FAX、E-Mail等を記載して下さい。

理事長 西岡 信雄

学長 中村 孝義

A L O 駒井 肇

注記：役職名・氏名のみ掲載しています。

(4)平成13年度から19年度までの学科・専攻ごとの入学定員、収容定員、在籍者数、定員充足率を次ページの表を例に作成して下さい。廃止、募集停止等の学科を含む該当する期間内に設置されたすべての学科について作成して下さい。なお、在籍者数は毎年度5月1日時点とします。

2001～2007（平成13～19）年度の設置学科、入学定員等

（在籍者数については各年度5月1日現在）

			2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度
音楽科	作曲専攻	入学定員	10	10	10	10	10	10	10
		収容定員	20	20	20	20	20	20	20
		在籍者数	13	17	17	17	13	9	9
		充足率(%)	65.0	85.0	85.0	85.0	65.0	45.0	45.0
	声楽専攻	入学定員	50	50	50	50	50	50	50
		収容定員	100	100	100	100	100	100	100
		在籍者数	142	126	95	66	55	57	54
		充足率(%)	142.0	126.0	95.0	66.0	55.0	57.0	54.0
	器楽専攻	入学定員	90	90	90	150	150	150	150
		収容定員	180	180	180	240	300	300	300
		在籍者数	409	381	365	343	292	246	243
		充足率(%)	227.2	211.7	202.8	142.9	97.3	82.0	81.0
	音楽専攻	入学定員	150	150	150	募集停止	-	-	-
		収容定員	300	300	300	150	-	-	-
		在籍者数	352	346	308	167	21	5	1
		充足率(%)	117.3	115.3	102.7	111.3			
	ジャズ・ポピュラー専攻	入学定員	-	-	-	新設 90	90	90	90
		収容定員				90	180	180	180
		在籍者数				115	227	237	229
		充足率(%)				127.8	126.1	131.7	127.2
	合計	入学定員	300	300	300	300	300	300	300
		収容定員	600	600	600	600	600	600	600
		在籍者数	916	870	785	708	608	554	536
		充足率(%)	152.7	145.0	130.8	118.0	101.3	92.3	89.3
専攻科	作曲専攻	入学定員	2	2	2	2	2	2	2
		収容定員	2	2	2	2	2	2	2
		在籍者数	0	0	1	3	1	1	1
		充足率(%)	0.0	0.0	50.0	150.0	50.0	50.0	50.0
	声楽専攻	入学定員	5	5	5	5	5	5	5
		収容定員	5	5	5	5	5	5	5
		在籍者数	12	8	13	5	7	8	5
		充足率(%)	240.0	160.0	260.0	100	140.0	160.0	100
	器楽専攻	入学定員	8	8	8	8	8	8	8
		収容定員	8	8	8	8	8	8	8
		在籍者数	16	21	19	23	7	16	6
		充足率(%)	200.0	262.5	237.5	287.5	87.5	200.0	75.0
	合計	入学定員	15	15	15	15	15	15	15
		収容定員	15	15	15	15	15	15	15
		在籍者数	28	29	33	31	15	25	12
		充足率(%)	186.7	193.3	220.0	206.7	100	166.7	80.0

(5)平成16年度～18年度に入学した学生の出身地別人数及び割合(10程度の区分)を下表を例に毎年度5月1日時点で作成して下さい。なお、短期大学の実態に沿って地域を区分して下さい。

出身地別学生数

2004～2006（平成16～18）年度

	2004 年度				2005 年度				2006 年度			
	入学者数(人)		割合(%)		入学者数(人)		割合(%)		入学者数(人)		割合(%)	
	音楽科	専攻科	音楽科	専攻科	音楽科	専攻科	音楽科	専攻科	音楽科	専攻科	音楽科	専攻科
東北・北海道	6	0	1.9	0.0	1	0	0.3	0.0	2	0	0.8	0.0
関東・甲信越	1	0	0.3	0.0	4	1	1.4	6.7	2	0	0.8	0.0
東海・北陸	9	0	2.9	0.0	10	0	3.5	0.0	13	3	5.0	12.0
滋賀県	7	2	2.2	6.5	4	1	1.4	6.7	5	0	1.9	0.0
京都府	35	4	11.2	12.9	30	0	10.5	0.0	27	4	10.3	16.0
大阪府	116	8	37.2	25.8	123	5	43.0	33.3	113	6	43.1	24.0
兵庫県	84	13	26.9	41.9	78	6	27.3	40.0	62	9	23.7	36.0
奈良県	19	2	6.1	6.5	13	1	4.5	6.7	14	2	5.3	8.0
和歌山県	8	1	2.6	3.2	2	1	0.7	6.7	7	0	2.7	0.0
中国	12	0	3.8	0.0	9	0	3.1	0.0	7	0	2.7	0.0
四国	6	0	1.9	0.0	9	0	3.1	0.0	9	0	3.4	0.0
九州	8	1	2.6	3.2	3	0	1.0	0.0	1	0	0.4	0.0
海外	1	0	0.3	0.0	0	0	0	0.0	0	1	0	4.0
計	312	31			286	15			262	25		

(6)法人が設置する他の教育機関の所在地、入学定員、収容定員とそれぞれの在籍者数を下表を例に平成19年5月1日時点で作成して下さい。

法人が設置する他の教育機関の現状

2007（平成19）年5月1日現在

教育機関名	所在地	入学定員	収容人員	在籍者数
大阪音楽大学	本学と同一所在地	1年次 210 3年次 30	900	1034
大阪音楽大学音楽専攻科	本学と同一所在地	10	10	30
大阪音楽大学大学院音楽研究科	本学と同一所在地	10	20	26
大阪音楽大学付属音楽幼稚園	豊中市豊南町東 1-5-1	105	315	272

(7)その他

評価員が誤解しないように事前に知ってもらいたい事項や事情があれば、記述して下さい。

本学は併設する大阪音楽大学及び大阪音楽大学大学院と同一敷地内に立地しており、各種の付属施設（各教室、練習室、図書館、音楽博物館、ザ・カレッジ・オペラハウス、ミレニアムホール等）を共用している。

なお、ほとんどすべての教室、教員の研究室・レッスン室、学生の練習室などは、防音仕様で空調が完備している。また、講義用教室のすべてにピアノと五線黒板及びオーディオ・ワゴンを設置し、音楽系の授業はどのような規模のクラスにも対応できるようになっている。

I 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

【建学の精神・教育理念について】

(1) 建学の精神・教育理念を記述し、その意味するところ及び建学の精神・教育理念が生まれた事情や背景をできるだけ簡潔に記述して下さい。

・ 建学の精神

「世界音楽並ニ音楽ニ関連セル諸般ノ芸術ハ之ノ学校ニヨッテ統一サレ新音楽新歌劇ノ発生地タランコトヲ祈願スルモノナリ」

上記、本学の「建学の精神」は、1915(大正 4)年、大阪音楽大学短期大学部・大阪音楽大学の前身である大阪音楽学校の開学にあたって、創立者永井幸次によって述べられた高い理想と揺るぎない決意の言葉である。爾来、そこに学ぶ学生、巣立った卒業生、また教育・運営に携わった教職員のあいだにこの理想と決意が脈々と継承され、本学は、音楽の専門教育機関として着実に発展の道を辿り、1951(昭和 26)年に学校法人大阪音楽短期大学となった。

自ら「新しい音楽の発生地になる」ことを目指して、初代学長永井幸次は、イタリア・フランス・ドイツ・ロシア等の当時視野にあった西洋音楽全体を教育範囲に取り込み、さらには日本の伝統音楽も含めて、西洋音楽と日本音楽とを比較対照する独自の音楽研究を試み、新しい音楽の創造へ向かおうとした。さらに、歴史的・地理的な限定を超えて、芸術を総合する場を、新しい音楽を創造する場としての恒久的拠点を、この大阪音楽学校、後の大阪音楽大学短期大学部・大阪音楽大学に求めたのである。

新しい音楽の統一とその中心地になることは、たとえどれほど困難な道であっても、日々の音楽教育の現場から絶えず生み出されてゆくべきものであった。日常の音楽教育の現場に、この建学の精神が忘れ去られることなくあり続けるならば、本学は常に「新しい音楽の発生地」となり得るのである。

・ 教育理念

いうまでもなく永井幸次の「新しい音楽の発生地たらん」という建学の精神は、以後歴代の学長によって受け継がれ、学生に対して絶えず語られてきた。しかし、時代の変化に対応すべく、教育理念は変化してきた。

第二代学長となった水川清一は、増加する短期大学生に対して、人格形成の必要性を重視する教育を目指した。「新しい音楽の発生地」となるために、まず「音楽芸術を社会に広く媒介する新たな担い手としての学生」の教育に重点を置いた。そのために、1966(昭和 41)年、「音楽専攻」という独創的な専攻を新設し、音楽芸術の媒介者として「調和の取れた豊かな音楽教養」を身に付ける人格形成教育を進めた。その翌年、2年間の専門領域の学修を終えた卒業生を受け入れるべく1年制の専攻科を開設した。その後、1976(昭和 51)年には「基礎の確立」と「個の充実」を教育理念として掲げ、一人ひとりの学生が自ら「発生地」となり得る教育を目指した。第三代学長となった田中喜一は、「社会的(自己)認識と責任」を強調し、「豊かな人間性の陶冶」と「音楽芸術の修練・研究・創造」を教育理念として示した。第四代学長の永井譲もまた「自分の音楽の土台を自分で築くこと」を通じた学生の創造的自立を強調した。第五代学長の西岡信雄は、「新しい音楽の発生地たらん」

ことの現代的な意味を問い直し、「新世紀を担う音楽文化のよき送り手が育つ拠点」としての再構築を目指し、「音楽専攻」の募集を停止し、作曲専攻・声楽専攻・器楽専攻に加え、音楽大学として日本で初めてジャズ・ポピュラー専攻を開設した。それは、建学の精神に立ち戻り、同時代的な音楽の発信基地となるために、同時代的な音楽の送り手を創り出そうとする試みであった。2000（平成 12）年、専攻科の教育体制を実技主体の実学志向に改編し、学位授与機構の認定を受けたこともその試みの一つである。そして、2006（平成 18）年、第六代学長となった中村孝義は、「豊かな人間力と音楽力、創造性に満ちた発想力」を持った学生の育成を教育理念として掲げ、現代における「新しい音楽の発生地となる」ために、幅広く社会で活躍できる「音楽産業人」の育成も視野に入れた教育の再構築を目指している。

こうした教育理念の変化は、時代の変化に対応しながらも、「新しい音楽の発生地たらん」という建学の精神に常に立ち戻りつつ、本学が常に社会において自立するクリエイティブなアーティストの育成を目指してきた歴史に他ならない。それは、学生の創造的な音楽性の開発と人間性の涵養を目指す教育の試みである。音楽性と人間性の統一とその中心としての自己、それを持った一人ひとりの人間が自立したアーティストとして、「新しい音楽の発生地たらん」と努力することこそ、本学がその建学の精神から受け継いできた教育理念の核となるものである。

(2) 現在は建学の精神・教育理念をどのような形や方法で学生や教職員に知らせているかを記述して下さい。

○ 建学の理念・教育理念の教職員への周知

毎年度第一回教授会での学長の挨拶は、この建学の精神を確認することから始まる。そして、90 周年を迎えた 2005（平成 17）年度の教授会において、永井幸次の建学の精神は、その言葉とともに再確認され、2006（平成 18）年にプレートとして、学内の永井幸次像に近接して設置した。また本学の歴史を文書化し出版された「大阪音楽大学 70 年史 楽のまなびや」（1988（昭和 63）年）、「大阪音楽大学 80 年史 楽のまなびや」（1996（平成 8）年）によっても詳細に記述され、教職員全員に配布され意識化されてきた。

○ 建学の精神・教育理念の学生への周知

建学の精神は、入学式・卒業式の学長式辞、理事長祝辞で必ず語られてきた。また、上述の「建学の精神」のプレートは、多くの学生が通行する目に付きやすい場所（本学正門に隣接する広場）に設置されている。文書としては、毎年発行する「大学案内」及び学校法人大阪音楽大学の公式ホームページ（以下「法人公式ホームページ」と言う。）に書かれ、学生の目に届くようになっている。また、本学の沿革は、「学生便覧」（毎年 4 月発行）に記載されている。

【教育目的、教育目標について】

(1) 多くの短期大学が複数の学科・専攻（専攻科を含む。以下「学科等」という。）を設置しています。その場合、それぞれの学科等では建学の精神や教育理念から導き出された、より具体的な教育目的や教育目標を掲げているものと思います。（例えば、学科・専攻の設置認可の際に「設置の趣旨」等で示されたもの等）。ここではそれぞれの学科等が設定している具体的な教育目的や教育目標を記述して下さい。

本学は音楽文化を創造できる次代の音楽人材の養成（音楽文化の送り手養成）を目指して、

従来以上に広い視点で音楽教育を行うことを目的としている。以下に本学の教育理念に基づいた各専攻・コースの教育目標を示す。

<音楽科>

○ 作曲専攻

音に対して「自由な発想」を持つことの重要性を認識させ、その自由な発想力を原点として、音による自己表現を試みさせることで、音による「創造の場」の自己実現を目指す。

○ 声楽専攻

「音楽的な声」による自己表現の重要性を認識する。「歌う技術」「内面的な表現力」「歴史的知識」を身に付ける。イタリア歌曲・ドイツ歌曲・歌劇等の時代様式、時代背景などの歴史的知識を深める。

○ 器楽専攻

実技レッスンを中心に、演奏能力を高める。時代背景などの歴史的知識を深めることにより音楽を多面的に捉え、個性的な演奏を可能にする音楽性を身に付ける。演奏だけでなく、音楽指導者としての資質を向上させる。

器楽専攻（ピアノ）は演奏の基礎の見直しから、新しい音作りの可能性を追求する。また、個人レッスンのほかにグループ授業も取り入れ、協調性・仲間意識などを養う。

器楽専攻（管・弦・打）は、オーケストラ・吹奏楽・各種アンサンブルの機会を通じて、集団行動における協調性・行動力・実行力・リーダーシップ能力などの社会性を身に付ける。

器楽専攻（邦楽）は、伝統の持つ精神性の深みを重視しつつ、古典から新曲まで、また、洋楽との融合を学ぶことにより、邦楽の伝統のみならず西洋音楽の知識も備え、新しい音楽を創造する能力を持った将来の邦楽界を担う人材を育成する。

○ ジャズ・ポピュラー専攻

本専攻内の各コースにおいて共通することはそれぞれの専門分野における演奏家を目指すことは勿論、音楽をバックアップする業務に関わることも可能とする素地を養うことを念頭に置き、社会が必要とする人材の育成と、より質の高い音楽力育成を目指して特色のあるカリキュラムを編成している。

・ ジャズ・ポピュラー専攻（ジャズ・コース）

ジャズ奏法の習得を目指す。マンツーマンのレッスンを中心に、ジャズ奏法・演奏解釈・アドリブ演奏などを習得させる。

・ ジャズ・ポピュラー専攻（ポピュラー・コース）

ポピュラー音楽の特徴である“口承伝承形式”による音楽の理解に重点を置く。ポピュラー音楽のテクスチャーを理解し、ポピュラー音楽に関する学問的内容と職業的内容を学習し、専門的な音楽知識や技術の修得及び学生個々の個性や感性を活かした自由な音楽的表現力や音楽創造力を持つ演奏家と音楽産業や音楽ビジネスについての実践的知

識を習得した総合的プロデュース能力を持つ人材の育成を目標としている。ポピュラー・コースには「ヴォーカル」と「インストゥルメント」が含まれ、総合的なポピュラー音楽の教育を通じて、個性や感性を生かした質の高い演奏家の育成を目指す。

- ・ ジャズ・ポピュラー専攻（ミュージカル・コース）

ミュージカルの歌・ダンス・演技の修得を専門授業の中心とし、ミュージカルについて、一般的知識を得るとともに、ミュージカルを創り演じるための基礎技術を学んでいる。ミュージカルは、多くの人々の共同作業で成り立っており、歌・ダンス・演技の技術修得と並んで、協調性や忍耐力などを身に付けた演奏家及び指導者育成を目指す。

- ・ ジャズ・ポピュラー専攻（電子オルガン・コース）

編曲法、作曲法、アンサンブル、即興演奏などの演習を通して、電子オルガンの特性を生かした表現を追求する。コースを横断しジャズ・コースとのセッションやポピュラー・ボーカルの伴奏を試みる中から新しい可能性を発見することなどを通して、音楽への広い視野と幅広い能力を身に付けた演奏家及び指導者の育成を目指している。

<専攻科>

専攻科には作曲専攻・声楽専攻・器楽専攻の3専攻がある。それぞれ短大卒業後1カ年の課程であり、専門実技の研鑽・追求の目標が達成出来るように、必修の実技に加え選択の実技科目を設定し、さらに学生自身の学習計画に応え専門外分野の履修も可能なカリキュラムを編成している。

○ 作曲専攻

作曲実技の研鑽を柱とし、作品分析を通じて楽曲の構成原理や音楽活動におけるコンピューターの利用法、デスクトップ・ミュージック（DTM）に対応した編曲法などを選択して学習することで、基礎の伸長と応用力の伸長を目標とする。

○ 声楽専攻

- ・ 声楽

音楽科で得た声楽技術を基礎とし、個々の進度状況と適性に応じ、個人レッスンをはじめとする専門の学修を通じて、より柔軟で音楽性豊かな歌唱表現を追求することを目標とする。

- ・ ミュージカル

「ミュージカル実技」を核として、実際の舞台活動に通じる高レベルの授業を展開すると共に、より多くの知識、理解力、感性を身に付けるための人間教育を主眼とする。

- ・ ポピュラー・ヴォーカル

卒業後ポピュラー音楽産業に従事することを前提に、歌唱力の向上と歌唱法発展、フレージング、フェイク、ヘッド・アレンジ、ポピュラー音楽用語、ポピュラー音楽史など、ポピュラー音楽に関する知識の修得を目標とする。

○ 器楽専攻

- ・ ピアノ・クラシック

専門実技の研鑽に主体を置き、演奏技術の向上、表現力の向上を目指す。また、アンサンブルにも取り組むことにより、幅広くピアノ演奏を研究することを目標とする。

- ・ ポピュラー・インストゥルメント

ポピュラー・インストゥルメントの専門実技練達に重きを置き、あらゆる音楽シーンや幅広い奏法に対応できることを目標とする。個々の学生の方向性に応じたジャンルをより専門的に追及し、レパートリーの拡充を図る。

- ・ 電子オルガン

音楽科で学んだ理論と実践をさらに深く追求した内容のレッスンを行い、優れた編曲や完成度の高い演奏テクニックの修得を目標とする。将来、指導者を希望するものに対しては必要な項目の指導、実習も行う。

- ・ 管・弦・打楽器

音楽科で修得した専門実技のさらなる研鑽を目指す。個々の進度に応じた個人レッスンで演奏技術の向上、表現力の向上を図り、音楽家としての資質を高める指導を行う。

- ・ ジャズ

ジャズ音楽の研究や演奏技術の向上を目指し、同時に将来音楽産業等に従事できるよう、高い知識、能力を身に付けることを目標とする。

- ・ 邦楽

古典曲、新曲を通じて必要な知識と演奏技術、箏歌のあり方など、個性を生かしつつ専門的な指導を行う。

(2)それぞれの学科等の教育目的や教育目標を、現在はどういう方法で学生や教職員に周知しているかを記述して下さい。

学生に対しては、学生便覧はもとより、入学直後の新入生ガイダンス、第1 Semester 終了時などにおいて教育目的・教育目標の説明を行っている。また、教職員に対しては、教授会や年度初めの非常勤教員集会における学長あいさつ、広報誌「Muse」(年間9回発行、発行部数各3万4千部)、「教職員学内報 大音あれこれ」、「入試要項」、「学生便覧」、「教員便覧」などを通して周知を図っている。

【定期的な点検等について】

(1)建学の精神や教育理念の解釈の見直し、教育目的や教育目標の点検が、定期的に行われている場合はその概要を記述して下さい。また点検を行う組織、手続き等についても記述して下さい。

従来は自己点検を行う組織において、建学の精神や教育理念の解釈を検討し、短期大学部運営会議(以下、「運営会議」という)において教育目的や教育目標の見直しを行ってきた。これを基に教授会において建学の精神の解釈統一を図ってきた。教育目的や教育目標の見直しについては運営会議を中心に行っており、2007(平成19)年度にはこの理念を基本に置いた本学の改革案を作成する。

(2)建学の精神や教育理念の解釈の見直し、教育目的や教育目標の点検及びそれらを学生や教職員に周知する施策等の実施について、理事会または短期大学教授会がどのように関与しているかを記述して下さい。

教授会では教育目的・教育目標の妥当性・整合性・実効性等についての議論・検討が常に行われており、また運営会議によって本学全体の見直し・検討の議論が行われ、自己点検・評価組織からの提案や示唆も含めて、現在、教員は継続的な問題意識の自覚と共有の

場にいるのが現状である。

【特記事項について】

(1)この《Ⅰ 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標》の領域で示した評価項目や評価の観点の他に、建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標について努力していることがあれば記述して下さい。また短期大学で独自の使い方や別の語句を使っている場合はその旨記述して下さい。

- ① 建学の精神の実現に向けて、カリキュラムのみではなく、学生の演奏会、オペラハウス公演、学外公演、企業や社会との連携、などに積極的に取り組んでいる。
- ② 学校法人内に設置している付属音楽幼稚園、音楽博物館及び幼児から社会人までの音楽指導を行う付属音楽院などの機関の活動を通じて高等教育機関における教育と社会的活動の連携を広く図っている。

(2)特別の事由や事情があり、評価項目や評価の観点が求めることが実現(達成)できないときはその事由や事情を記述して下さい。

特になし。

Ⅱ 教育の内容

【教育課程について】

(1) 学科等の現在の教育課程を、下の表を例に作成して下さい。なお学科等に複数の履修コースを設定し、学生に別の教育課程表として提示している場合はコースごとに記載して下さい。平成 19 年度に学科改組等を行った場合は、平成 18 年度の教育課程表を別途作成し、巻末に綴じて下さい。

教育課程

2007（平成 19）年 5 月 1 日現在

< 音楽科 >

科目の 種別	授業科目名		授業形態			単位数			教員配置			2006年度		備 考
			講義	演習	実習	必修	選択	自由	専任	兼任	兼任	受講者数	クラス数	
一般教育・外国語・保健体育	日本語表現Ⅰ		○			2			○		○	279	9	
	文学 A		○				2				○	68	2	
	文学 B		○				2				○	71	2	
	哲学 A		○				2		○			74	2	
	哲学 B		○				2		○			82	2	
	美学・芸術学 A		○				2				○	53	2	
	美学・芸術学 B		○				2				○	49	2	
	日本国憲法 A		○				2		○			83	1	
	日本国憲法 B		○				2		○			61	1	
	西洋史 A		○				2				○	43	1	
	西洋史 B		○				2				○	68	3	
	心理学 A		○				2				○	125	2	
	心理学 B		○				2				○	143	2	
	音響学 A		○				2				○	29	1	
	音響学 B		○				2				○	26	1	
	日本語表現Ⅱ A		○				2				○	34	1	
	日本語表現Ⅱ B		○				2				○	17	1	
	現代のキーワード（現代芸術）		○				2					—	—	
	現代のキーワード（現代史）		○				2					—	—	
	現代のキーワード（現代科学技術）		○				2					—	—	
	現代のキーワード（現代社会経済）		○				2					—	—	
	音声生理学Ⅰ		○				2					—	—	
	音声生理学Ⅱ		○				2					—	—	
	英語（Ⅰ a・Ⅰ b）	Ⅰ a		○		1			○		○	172	6	いずれか1ヶ国語
		Ⅰ b		○		1			○		○	176	6	
	ドイツ語（Ⅰ a・Ⅰ b）	Ⅰ a		○		1					○	40	2	
		Ⅰ b		○		1					○	40	2	
	フランス語（Ⅰ a・Ⅰ b）	Ⅰ a		○		1					○	28	1	
		Ⅰ b		○		1					○	30	1	
	イタリア語（Ⅰ a・Ⅰ b）	Ⅰ a		○		1					○	66	3	
		Ⅰ b		○		1					○	74	3	
	英語（Ⅱ a・Ⅱ b）	Ⅱ a		○			1				○	74	4	
		Ⅱ b		○			1				○	73	4	
	ドイツ語（Ⅱ a・Ⅱ b）	Ⅱ a		○			1				○	21	1	
		Ⅱ b		○			1				○	24	1	
	フランス語（Ⅱ a・Ⅱ b）	Ⅱ a		○			1				○	8	1	
		Ⅱ b		○			1				○	8	1	
	イタリア語（Ⅱ a・Ⅱ b）	Ⅱ a		○			1				○	38	2	
		Ⅱ b		○			1				○	33	2	
	英語（Ⅲ a・Ⅲ b）	Ⅲ a		○			1		○			21	1	
		Ⅲ b		○			1		○			21	1	
	英語（Ⅳ a・Ⅳ b）	Ⅳ a		○			1				○	27	1	
		Ⅳ b		○			1				○	28	1	
	ドイツ語（Ⅲ a・Ⅲ b）	Ⅲ a		○			1				○	12	1	
		Ⅲ b		○			1				○	12	1	
	ドイツ語（Ⅳ a・Ⅳ b）	Ⅳ a		○			1				○	5	1	
		Ⅳ b		○			1				○	5	1	

専門教育	作曲専攻	フランス語 (Ⅲa・Ⅲb)	Ⅲ a		○		1			○	4	1	
			Ⅲ b		○		1			○	4	1	
		フランス語 (Ⅳa・Ⅳb)	Ⅳ a		○		1			○	4	1	
			Ⅳ b		○		1			○	4	1	
		イタリア語 (Ⅲa・Ⅲb)	Ⅲ a		○		1			○	17	1	
			Ⅲ b		○		1			○	16	1	
		イタリア語 (Ⅳa・Ⅳb)	Ⅳ a		○		1			○	5	1	
			Ⅳ b		○		1			○	5	1	
		体育A		○		○	1		○	○	254	8	
		体育B		○		○	1		○	○	243	8	
		生涯体育A		○		○	1				—	—	
		生涯体育B		○		○	1				—	—	
専門教育	声楽専攻	作曲Ⅰ a			○	3			○	○	5		個人レッスン
		作曲Ⅰ b			○	3			○	○	5		個人レッスン
		作曲Ⅱ a			○	3				○	5		個人レッスン
		作曲Ⅱ b			○	3				○	3		個人レッスン
		作曲理論Ⅰ a			○	3			○	○	5		個人レッスン 2006年度〔（作曲基礎講座）作曲理論Ⅰ a〕
		作曲理論Ⅰ b			○	3			○	○	5		個人レッスン 2006年度〔（作曲基礎講座）作曲理論Ⅰ b〕
		作曲理論Ⅱ a			○	3			○	○	5		個人レッスン 2006年度〔（作曲基礎講座）作曲理論Ⅱ a〕
		作曲理論Ⅱ b			○	3			○	○	3		個人レッスン 2006年度〔（作曲基礎講座）作曲理論Ⅱ b〕
		楽曲分析Ⅰ a		○	○	1			○		5	1	2006年度 〔作曲基礎講座（楽曲分析）Ⅰ a〕
		楽曲分析Ⅰ b		○	○	1			○		5	1	2006年度 〔作曲基礎講座（楽曲分析）Ⅰ b〕
		楽曲分析Ⅱ a		○	○	1			○		4	1	2006年度 〔作曲基礎講座（楽曲分析）Ⅱ a〕
		楽曲分析Ⅱ b		○	○	1			○		4	1	2006年度 〔作曲基礎講座（楽曲分析）Ⅱ b〕
		管弦楽法Ⅰ・基礎			○	1			○		4	1	
		管弦楽法Ⅱ・応用			○	1			○		4	1	
		卒業作品				2			○		4	1	
		作曲専門ソルフェージュⅠ			○	1				○	3	1	
		作曲専門ソルフェージュⅡ			○	1				○	3	1	
		デスクトップ・ミュージック演習Ⅲ			○	1			○		3	1	
		デスクトップ・ミュージック演習Ⅳ			○	1			○		1	1	
		声楽Ⅰ a				○	3			○	○	29	個人レッスン
		声楽Ⅰ b				○	3			○	○	29	個人レッスン
		声楽Ⅱ a				○	3			○	○	26	個人レッスン
		声楽Ⅱ b				○	3			○	○	24	個人レッスン
		声楽基礎講座Ⅰ a		○		2			○		29	1	
		声楽基礎講座Ⅰ b		○		2			○		33	1	
		声楽基礎講座Ⅱ a		○	○	1			○		25	1	
		声楽基礎講座Ⅱ b		○	○	1			○		25	1	
		卒業演奏				2			○		24	1	
		日本名曲講座			○	1			○		22	1	
		世界名曲講座			○	1			○		22	1	
		ヴォーカル・アンサンブルA			○	1			○		18	1	
		ヴォーカル・アンサンブルB			○	1			○		13	1	
		歌曲発語演習Ⅰ			○	1				○	17	1	
		歌曲発語演習Ⅱ			○	1				○	16	1	
		ピアノⅠ a				○	3			○	○	64	個人レッスン
		ピアノⅠ b				○	3			○	○	65	個人レッスン
		ピアノⅡ a				○	3			○	○	70	個人レッスン

ピアノⅡb			○	3		○	○	69		個人レッスン
ピアノ基礎講座Ⅰa	○			2		○	○	64	3	
ピアノ基礎講座Ⅰb	○			2		○	○	65	3	
ピアノ基礎講座Ⅱa	○	○		1		○	○	70	3	
ピアノ基礎講座Ⅱb	○	○		1		○	○	70	3	
卒業演奏				2		○		69	1	
ピアノ教授法A	○				2	○	○	58	2	
ピアノ教授法B	○				2	○	○	58	2	
ピアノ・アンサンブルA		○			1	○	○	22	3	2006年度[ピアノ・アンサンブルⅠ]
ピアノ・アンサンブルB		○			1	○	○	29	3	2006年度[ピアノ・アンサンブルⅡ]
ピアノ演奏法A		○			1	○		31	1	
ピアノ演奏法B		○			1	○		30	1	
管楽器Ⅰa			○	3		○	○	36		個人レッスン
管楽器Ⅰb			○	3		○	○	36		個人レッスン
管楽器Ⅱa			○	3		○	○	37		個人レッスン
管楽器Ⅱb			○	3		○	○	36		個人レッスン
弦楽器Ⅰa			○	3			○	5		個人レッスン
弦楽器Ⅰb			○	3			○	5		個人レッスン
弦楽器Ⅱa			○	3			○	3		個人レッスン
弦楽器Ⅱb			○	3			○	3		個人レッスン
打楽器Ⅰa			○	3			○	8		個人レッスン
打楽器Ⅰb			○	3			○	8		個人レッスン
打楽器Ⅱa			○	3			○	6		個人レッスン
打楽器Ⅱb			○	3			○	6		個人レッスン
室内楽Ⅰ		○		1			○	2	1	
室内楽Ⅱ		○		1			○	2	1	
室内楽Ⅲ		○		1			○	2	1	
室内楽Ⅳ		○		1			○	2	1	
合奏AⅠa		○		1		○		49	12	
合奏AⅠb		○		1		○	○	49	12	
合奏AⅡa		○		1		○	○	49	12	
合奏AⅡb		○		1		○	○	49	12	
オーケストラⅠa		○		1			○	2	1	
オーケストラⅠb		○		1			○	2	1	
オーケストラⅡa		○		1			○	7	1	
オーケストラⅡb		○		1			○	7	1	
吹奏楽Ⅰa		○		1			○	43	1	
吹奏楽Ⅰb		○		1			○	43	1	
吹奏楽Ⅱa		○		1			○	43	1	
吹奏楽Ⅱb		○		1			○	43	1	
卒業演奏				2		○		46	1	
合奏AⅢa		○			1	○	○	45	11	
合奏AⅢb		○			1	○	○	44	11	
合奏AⅣa		○			1	○	○	45	11	
合奏AⅣb		○			1	○	○	45	11	
オーケストラⅢa		○			1		○	1	1	
オーケストラⅢb		○			1		○	1	1	
オーケストラⅣa		○			1		○	16	1	
オーケストラⅣb		○			1		○	15	1	
吹奏楽Ⅲa		○			1		○	40	1	
吹奏楽Ⅲb		○			1		○	38	1	
吹奏楽Ⅳa		○			1		○	40	1	
吹奏楽Ⅳb		○			1		○	38	1	
管弦打編曲法Ⅰ	○				2	○		15	1	
管弦打編曲法Ⅱ	○				2	○		15	1	
邦楽楽器ⅠA			○	3			○	1		個人レッスン
邦楽楽器ⅡA			○	3			○	1		個人レッスン
邦楽楽器ⅢA			○	3				1		個人レッスン
邦楽楽器ⅣA			○	3				1		個人レッスン

	邦楽楽器ⅠB			○	2				○	—	—	個人レッスン
	邦楽楽器ⅡB			○	2				○	—	—	個人レッスン
	邦楽楽器ⅢB			○	2					—	—	個人レッスン
	邦楽楽器ⅣB			○	2					—	—	個人レッスン
	邦楽合奏Ⅰa		○		1				○	1	1	
	邦楽合奏Ⅰb		○		1				○	1	1	
	邦楽合奏Ⅱa		○		1				○	1	1	
	邦楽合奏Ⅱb		○		1				○	1	1	
	邦楽合奏Ⅲa		○		1					—	—	
	邦楽合奏Ⅲb		○		1					—	—	
	邦楽合奏Ⅳa		○		1					—	—	
	邦楽合奏Ⅳb		○		1					—	—	
	箏曲概論	○			2					1	1	
	卒業演奏				2				○	—	—	
	学外研修Ⅰ			○		1				—	—	
	学外研修Ⅱ			○		1				—	—	
専門教育 ジャズ・ポピュラー専攻	ジャズ・レッスンⅠa			○	3		○		○	21	—	個人レッスン
	ジャズ・アンサンブルⅠa		○		2				○	42	2	2006年度〔器楽テーマ研究（ジャズ）Ⅰa〕
	コラボレート・スタディⅠa		○		1		○		○	21	1	
	ジャズ・レッスンⅠb			○	3		○		○	22	—	個人レッスン
	ジャズ・アンサンブルⅠb		○		2				○	44	2	2006年度〔器楽テーマ研究（ジャズ）Ⅰb〕
	コラボレート・スタディⅠb		○		1		○		○	22	1	
	ジャズ・レッスンⅡa			○	3		○		○	22	—	個人レッスン
	ジャズ・アンサンブルⅡa		○		2				○	44	2	2006年度〔器楽テーマ研究（ジャズ）Ⅱa〕
	コラボレート・スタディⅡa		○		1		○		○	22	1	
	ジャズ・レッスンⅡb			○	3		○		○	22	—	個人レッスン
	ジャズ・アンサンブルⅡb		○		2				○	44	2	2006年度〔器楽テーマ研究（ジャズ）Ⅱb〕
	コラボレート・スタディⅡb		○		1		○		○	22	1	
	ヴォーカル・レッスンⅠa			○	3		○		○	46	—	個人レッスン
	ヴォーカル・セミナーⅠa	○			2		○			46	1	2006年度〔声楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅰa〕
	コラボレート・スタディⅠa		○		1		○			46	1	
	ヴォーカル・レッスンⅠb			○	3		○		○	47	—	個人レッスン
	ヴォーカル・セミナーⅠb	○			2		○			47	1	2006年度〔声楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅰb〕
	コラボレート・スタディⅠb		○		1		○			47	1	
	ヴォーカル・レッスンⅡa			○	3		○		○	32	—	個人レッスン
	ヴォーカル・セミナーⅡa	○			2		○			32	1	2006年度〔声楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅱa〕
	コラボレート・スタディⅡa		○		1		○			32	1	
	ヴォーカル・レッスンⅡb			○	3		○		○	32	—	個人レッスン
	ヴォーカル・セミナーⅡb	○			2		○			32	1	2006年度〔声楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅱb〕
	コラボレート・スタディⅡb		○		1		○			32	1	
	インストゥルメント・レッスンⅠa			○	3				○	20	—	個人レッスン
	インストゥルメント・セミナーⅠa	○			2		○			20	1	2006年度〔器楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅰa〕
	コラボレート・スタディⅠa		○		1		○			20	1	
	インストゥルメント・レッスンⅠb			○	3				○	21	—	個人レッスン
	インストゥルメント・セミナーⅠb	○			2		○			21	1	2006年度〔器楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅰb〕
	コラボレート・スタディⅠb		○		1		○			21	1	
	インストゥルメント・レッスンⅡa			○	3				○	27	—	個人レッスン
	インストゥルメント・セミナーⅡa	○			2		○			27	1	2006年度〔器楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅱa〕
	コラボレート・スタディⅡa		○		1		○			27	1	
	インストゥルメント・レッスンⅡb			○	3				○	27	—	個人レッスン
	インストゥルメント・セミナーⅡb	○			2		○			27	1	2006年度〔器楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅱb〕
	コラボレート・スタディⅡb		○		1		○			27	1	
	電子オルガン・レッスンⅠa			○	3		○		○	12	—	個人レッスン
	編曲法（クラシック）Ⅰa		○		1				○	6	1	2006年度〔器楽テーマ研究（電子オルガン）Ⅰa〕
	編曲法（ジャズ・ポピュラー）Ⅰa		○		1		○			6	1	
	コラボレート・スタディⅠa		○		1		○			12	1	
	電子オルガン・レッスンⅠb			○	3		○		○	12	—	個人レッスン
	編曲法（クラシック）Ⅰb		○		1				○	6	1	2006年度〔器楽テーマ研究（電子オルガン）Ⅰb〕
	編曲法（ジャズ・ポピュラー）Ⅰb		○		1		○			6	1	
	コラボレート・スタディⅠb		○		1		○			12	1	

電子オルガン・レッスンⅡ a		○	3		○	○	17		個人レッスン
編曲法(クラシック)Ⅱ a		○	1			○	11	1	2006年度[器楽テーマ研究(電子オルガン)Ⅱ a]
編曲法(ジャズ・ポピュラー)Ⅱ a		○	1		○		6	1	
コラボレート・スタディⅡ a		○	1		○		17	1	
電子オルガン・レッスンⅡ b		○	3		○	○	17		
編曲法(クラシック)Ⅱ b		○	1			○	11	1	2006年度[器楽テーマ研究(電子オルガン)Ⅱ b]
編曲法(ジャズ・ポピュラー)Ⅱ b		○	1		○		6	1	
コラボレート・スタディⅡ b		○	1		○		17	1	
ミュージカル・レッスンⅠ a		○	3			○	10		
ミュージカル技法Ⅰ a		○	1			○	10	1	2006年度[ミュージカルテーマ研究Ⅰ a]
ミュージカル表現法Ⅰ a		○	1			○	10	1	
ミュージカル・レッスンⅠ b		○	3			○	10		
ミュージカル技法Ⅰ b		○	1			○	10	1	
ミュージカル表現法Ⅰ b		○	1			○	10	1	2006年度[ミュージカルテーマ研究Ⅰ b]
ミュージカル・レッスンⅡ a		○	3			○	12		
ミュージカル技法Ⅱ a		○	1			○	12	1	
ミュージカル表現法Ⅱ a		○	1			○	12	1	
ミュージカル・レッスンⅡ b		○	3			○	13		2006年度[ミュージカルテーマ研究Ⅱ a]
ミュージカル技法Ⅱ b		○	1			○	13	1	
ミュージカル表現法Ⅱ b		○	1			○	13	1	
モダンダンス A		○		1		○	10	1	
モダンダンス B		○		1		○	10	1	2006年度[モダンダンスⅡ a]
モダンダンス C		○		1		○	12	1	
モダンダンス D		○		1		○	12	1	
バレエ AⅠ		○		1		○	10	1	
バレエ AⅡ		○		1		○	10	1	2006年度[バレエⅡ a]
バレエ B		○		1		○	12	1	
バレエ C		○		1		○	12	1	
ジャズダンス AⅠ		○		1		○	10	1	
ジャズダンス AⅡ		○		1		○	10	1	2006年度[ジャズダンスⅡ a]
ジャズダンス BⅠ		○		1		○	12	1	
ジャズダンス BⅡ		○		1		○	12	1	
ミュージカル唱法Ⅰ		○		1		○	10	1	
ミュージカル唱法Ⅱ		○		1		○	10	1	2006年度[ミュージカル唱法Ⅱ a]
レパートリー唱法Ⅰ		○		1		○	12	1	
レパートリー唱法Ⅱ		○		1		○	12	1	
ポピュラー音楽演習Ⅰ		○		1	○	○	59	2	
ポピュラー音楽演習Ⅱ		○		1	○	○	58	2	2006年度[ポピュラー音楽演習Ⅱ a]
ポピュラー・ヴォーカル・アンサンブルⅠ		○		1		○	46	2	
ポピュラー・ヴォーカル・アンサンブルⅡ		○		1		○	47	2	
電子オルガンアンサンブル演習(クラシック) A		○		1		○	9	1	
電子オルガンアンサンブル演習(クラシック) B		○		1		○	8	1	2006年度[電子オルガンアンサンブルⅡ a]
電子オルガンアンサンブル演習(クラシック) C		○		1		○	14	1	
電子オルガンアンサンブル演習(クラシック) D		○		1		○	14	1	
電子オルガンアンサンブル演習(ポピュラー) A		○		1		○	10	1	
電子オルガンアンサンブル演習(ポピュラー) B		○		1		○	11	1	2006年度[電子オルガンアンサンブルⅡ b]
電子オルガンアンサンブル演習(ポピュラー) C		○		1		○	15	2	
電子オルガンアンサンブル演習(ポピュラー) D		○		1		○	15	2	
ジャズ奏法		○		1	○		15	1	
ジャズ歌唱法		○		1		○	9	1	2006年度[ジャズ歌唱法Ⅱ a]
ベーシック・キーボードⅠ		○		1		○	25	3	
ベーシック・キーボードⅡ		○		1		○	27	3	
キーボード演習Ⅰ		○		1		○	47	3	
キーボード演習Ⅱ		○		1		○	46	3	2006年度[キーボード演習Ⅱ a]
バンド・パフォーマンスⅠ		○		1	○	○	78	6	
バンド・パフォーマンスⅡ		○		1	○	○	77	6	
M I D I システム・テクノロジーⅠ		○		1		○	90	6	
M I D I システム・テクノロジーⅡ		○		1		○	87	6	2006年度[M I D I システム・テクノロジーⅡ a]

	M I D I システム・テクノロジーⅢ		○		1		○	42	2	2006年度[M I D I システム・テクノロジー B I]
	M I D I システム・テクノロジーⅣ		○		1		○	39	2	2006年度[M I D I システム・テクノロジー B II]
	電子音響機器演習Ⅰ		○		1		○	77	2	
	電子音響機器演習Ⅱ		○		1		○	75	2	
	音楽指導法（電子オルガン）Ⅰ		○		1		○	10	1	
	音楽指導法（電子オルガン）Ⅱ		○		1		○	10	1	
専門教育 共通科目	ソルフェージュⅠ		○		1	○	○	126	6	2006年度音楽基礎
	ソルフェージュⅡ		○		1	○	○	191	8	
	ソルフェージュⅢ		○		1	○	○	232	9	
	ソルフェージュⅣ		○		1	○	○	144	7	
	ソルフェージュⅤ		○		1	○	○	71	4	
	ソルフェージュⅥ		○		1	○	○	57	3	
	音楽理論Ⅰ		○		1		○	190	8	2006年度音楽基礎
	音楽理論Ⅱ		○		1		○	265	11	
	音楽理論Ⅲ		○		1		○	181	8	
	音楽理論Ⅳ		○		1		○	129	7	
	音楽理論Ⅴ		○		1		○	62	4	
	音楽理論Ⅵ		○		1		○	29	4	
	音楽史（世界と日本の音楽を考える）	○		2			○	295	5	
	音楽史（中世・ルネサンス）	○		2			○	41	1	
	音楽史（バロック・古典派）	○		2			○	114	3	
	音楽史（ロマン派）	○		2			○	102	3	
	音楽史（20世紀）	○		2				20	1	
	音楽史（日本伝統音楽）	○		2			○	46	1	
	音楽史（諸民族）	○		2			○	34	1	
	音楽史（ジャズ）	○		2			○	31	1	
	音楽史（ポピュラー）	○		2			○	45	1	
	副科鍵盤楽器Ⅰ（ピアノ）		○		1	○	○	113		個人レッスン
	副科鍵盤楽器Ⅰ（電子オルガン）		○		1		○	8		個人レッスン
	副科鍵盤楽器Ⅱ（ピアノ）		○		1	○	○	118		個人レッスン
	副科鍵盤楽器Ⅱ（電子オルガン）		○		1		○	6		個人レッスン
	副科鍵盤楽器Ⅲ（ピアノ）		○		1	○	○	84		個人レッスン
	副科鍵盤楽器Ⅲ（電子オルガン）		○		1		○	5		個人レッスン
	副科鍵盤楽器Ⅳ（ピアノ）		○		1	○	○	59		個人レッスン
	副科鍵盤楽器Ⅳ（電子オルガン）		○		1		○	4		個人レッスン
	副科鍵盤楽器演習Ⅰ		○		1	○	○	73	18	
	副科鍵盤楽器演習Ⅱ		○		1	○	○	48	10	
	副科鍵盤楽器演習Ⅲ		○		1	○	○	37	16	
	副科鍵盤楽器演習Ⅳ		○		1	○	○	24	11	
	作曲法Ⅰ		○		1	○	○	239	10	
	作曲法Ⅱ		○		1	○	○	234	9	
	作曲法Ⅲ		○		1	○	○	58	4	
	作曲法Ⅳ		○		1	○	○	57	4	
	デスクトップ・ミュージック演習Ⅰ		○		1		○	30	3	
	デスクトップ・ミュージック演習Ⅱ		○		1		○	23	3	
	視奏 A		○		1	○		34	2	
	視奏 B		○		1	○		27	2	
	指揮法Ⅰ	○		2		○	○	155	5	
	指揮法Ⅱ		○		1		○	29	2	
	指揮法Ⅲ		○		1		○	27	2	
	副科声楽Ⅰ		○		1	○	○	107	13	
	副科声楽Ⅱ A		○		1	○	○	45	7	
	副科声楽Ⅱ B		○		1	○	○	46		個人レッスン
	合唱Ⅰ a		○		1	○	○	196	4	
	合唱Ⅰ b		○		1	○	○	195	4	
	合唱Ⅱ a		○		1	○	○	61	3	
	合唱Ⅱ b		○		1	○	○	62	3	
	電子オルガンⅠ		○		1		○	26	4	

電子オルガンⅡ		○		1		○	26	4	
電子オルガンⅢ		○		1		○	3	1	
電子オルガンⅣ		○		1		○	4	1	
ピアノ構造論Ⅰ	○			2		○	104	3	
ピアノ構造論Ⅱ	○			2		○	97	3	
音楽療法Ⅰ	○			2		○	177	3	
音楽療法Ⅱ	○			2		○	137	3	
童謡・唱歌講座A		○		1	○		68	3	
童謡・唱歌講座B		○		1	○		64	3	
副科邦楽合奏（箏）Ⅰ		○		1		○	53	14	2006年度[邦楽合奏AⅠ・BⅠ]
副科邦楽合奏（箏）Ⅱ		○		1		○	49	13	2006年度[邦楽合奏AⅡ・BⅡ]
副科邦楽合奏（三絃）Ⅰ		○		1		○	15	5	2006年度[邦楽合奏AⅠ・BⅠ]
副科邦楽合奏（三絃）Ⅱ		○		1		○	12	5	2006年度[邦楽合奏AⅡ・BⅡ]
副科邦楽合奏（尺八）Ⅰ		○		1		○	3	1	2006年度[邦楽合奏AⅠ・BⅠ]
副科邦楽合奏（尺八）Ⅱ		○		1		○	3	1	2006年度[邦楽合奏AⅡ・BⅡ]
副科邦楽合奏（胡弓）Ⅰ		○		1		○	27	7	2006年度[邦楽合奏AⅠ・BⅠ]
副科邦楽合奏（胡弓）Ⅱ		○		1		○	25	8	2006年度[邦楽合奏AⅡ・BⅡ]
合奏BⅠ		○		1		○	115	8	
合奏BⅡ		○		1		○	110	8	
合奏CⅠ		○		1			—	—	
合奏CⅡ		○		1			—	—	
合奏DⅠ		○		1	○	○	38	5	
合奏DⅡ		○		1	○	○	38	5	
合奏EⅠ		○		1			4	1	
合奏EⅡ		○		1			3	1	
合奏FⅠ		○		1	○	○	11	1	
合奏FⅡ		○		1	○	○	10	1	
視奏CⅠ		○		1		○	8	1	
視奏CⅡ		○		1		○	4	1	
コンピューター演習		○		2		○	148	6	
リズムソルフエージュⅠ		○		1		○	26	2	
リズムソルフエージュⅡ		○		1		○	18	2	
音楽探検		○		1		○	58	2	
音楽療法Ⅲ	○			2		○	27	1	
音楽療法Ⅳ	○			2		○	24	1	
ミュージック・ビジネス・マネジメントⅠ	○			2	○		80	1	
ミュージック・ビジネス・マネジメントⅡ	○			2	○		73	1	
副科ジャズ演習Ⅰ		○		1		○	19	2	2006年度[副科ジャズ・ポピュラー演習Ⅰ]
副科ポピュラー音楽演習Ⅰ		○		1	○		12	1	
副科ジャズ演習Ⅱ		○		1	○		10	2	2006年度[副科ジャズ・ポピュラー演習Ⅱ]
副科ポピュラー音楽演習Ⅱ		○		1	○		6	1	
インストラクター概論Ⅰ		○		1	○		49	1	
インストラクター概論Ⅱ		○		1	○		—	—	
伴奏特別実習			○	2	○		—	—	
舞台論特別実習			○	2	○		—	—	
演奏論特別実習			○	2	○		—	—	
創作活動特別実習			○	2	○		—	—	
インターンシップ特別実習			○	2	○		2	1	
社会活動特別実習			○	2	○		—	—	
ダンスA	○		○	1		○	39	2	
ダンスB	○		○	1		○	36	2	
副科ポピュラー・ヴォーカルⅠ		○		1		○	—	—	
副科ポピュラー・ヴォーカルⅡ		○		1		○	—	—	
ジャズ講座Ⅰ	○			2	○		45	1	2006年度[ジャズ・ポピュラー音楽講座Ⅰ]
ポピュラー音楽講座Ⅰ	○			2	○		9	1	

教職科目	ジャズ講座Ⅱ	○			2	○		47	1	2006年度[ジャズ・ポピュラー音楽講座Ⅱ]
	ポピュラー音楽講座Ⅱ	○			2	○		11	1	
	教職入門セミナーⅠ	○			1	○	○	93	1	
	教職入門セミナーⅡ	○			1	○	○	93	1	
	教育学概論	○			2	○		99	3	
	教育心理学	○			2	○	○	88	3	
	青年心理学	○			2		○	19	1	
	音楽科指導法	○			2	○		94	3	
	音楽科教材研究A（合唱指導法）	○			2	○		11	1	
	音楽科教材研究A（ギター指導法）	○			2			2	1	
	音楽科教材研究A（リコーダー指導法）	○			2		○	9	1	
	音楽科教材研究A（邦楽指導法）	○			2		○	5	1	
	音楽科教材研究A（創作指導法）	○			2		○	10	1	
	音楽科教材研究B（合唱指導法）	○			2	○		6	1	
	音楽科教材研究B（ギター指導法）	○			2			—	—	
	音楽科教材研究B（リコーダー指導法）	○			2		○	3	1	
	音楽科教材研究B（邦楽指導法）	○			2			2	1	
	音楽科教材研究B（創作指導法）	○			2			2	1	
	特別活動の研究	○			1	○	○	59	3	
	道德教育論	○			2		○	61	3	
	教育方法論	○			2	○		89	3	
	生徒指導論Ⅰ（教育相談を含む。）	○			2		○	93	3	
	生徒指導論Ⅱ（進路指導を含む。）	○			2	○		63	3	
	総合演習		○		2	○	○	62	1	
	教育実習の研究	○			1		○	59	3	
	教育実習			○	4	○		58	1	
	教育学特論	○			2	○		7	1	
	同和教育論	○			2	○		3	1	

<専攻科>

科目の種別	授業科目名	授業形態			単 位			教員配置		2006年度		備考
		講義	演習	実習	必修	選択	自由	専任	非常勤	受講者数	クラス数	
専門教育 共通科目	修了研究			○	4			○	○	24	1	
	コンサート・プロデュース		○		1			○		24	1	
	ポピュラー音楽概論	○				2		○		9	1	
	鍵盤楽器特修			○		3		○	○	8	8	
	音楽史特論Ⅰ	○				4		○	○	21	3	
	音楽史特論Ⅱ	○				4		○	○	12	2	
	コンピューター音楽演習 -（初級）		○			2		○		9	1	
	-（中級）		○			2		○		(9)		
	吹奏楽指導法		○			2		○		10	1	
	AV機器概論	○				2		○		13	2	前期1クラス・後期1クラス
	音楽社会活動実習			○		2		○		7	1	
	音楽療法（応用）	○				2		○		7	1	
	音楽療法（実践）		○			1		○		6	1	
	外国語SⅠ（英会話）		○			2			○	15	1	
	外国語SⅡ		○			2			○	10	4	
	英語Ⅱ		○			2			○	3	2	
	イタリア語Ⅱ		○			2		○		1	1	
	ドイツ語Ⅱ		○			2				0	0	
専門 専攻科目	作曲			○	6			○		1	1	
	作曲理論S			○		4		○		1	1	
	作品分析		○			2			○	1	1	
	対位法作品研究		○			2		○		1	1	
	デスクトップ・ミュージック編曲法		○			2		○		1	1	
	<声楽>											
	声楽A（歌唱）			○	6			○	○	4	4	

専門科目 声楽専攻	声楽 B (発声)		○	4	○	○	4	4	
	ドイツリート演習	○		2	○		3	1	
	日本歌曲演習	○		2	○		3	1	
	声楽資料研究	○		2		○	4	1	
	舞台制作実習 S		○	2		○	4	1	
	声楽アンサンブル	○		2		○	4	1	
	ダンス演習 SII (バレエ)	○		2		○	2	1	
	<ミュージカル>								
	声楽 A (ヴォーカル)		○	6					
	声楽 B (アクティング)		○	4					
	演出演習	○		2					
	ダンス演習	○		2					
	舞台制作実習 S		○	2					
	ヴォーカルアンサンブル	○		2					
	ダンス演習 SII	○		2					
	<ポピュラー・ヴォーカル>								
	声楽 A (ヴォーカルレッスン)		○	6		○	3	3	
	声楽 B (ヴォイストレーニング)		○	4		○	3	3	
	ポピュラー音楽研究 S	○		2	○		5	1	
	ダンス演習 SI	○		2		○	2	1	
専門科目 器楽専攻	舞台制作実習 S		○	2		○	3	1	
	ヴォーカル・アンサンブル	○		2		○	3	1	
	ダンス演習 SII	○		2		○	2	1	
	<ピアノ・クラシック>								
	器楽 A		○	6		○	9	9	
	ピアノ・アンサンブル -								
	- A(連弾)	○		4	○		9	1	
	- B(二台)	○		4	○		8	1	
	ピアノ初歩教材研究	○		2	○		8	1	
	ピアノ作品構造研究	○		2		○	8	1	
	<ポピュラー・インストルメント>								
	器楽 A		○	6					
	器楽 B		○	4					
	器楽アンサンブル	○		2					
	ポピュラー音楽研究 S	○		2					
	ポピュラー音楽概論	○		2					
	<電子オルガン>								
	器楽 A		○	6		○	1	1	
	器楽アンサンブル S	○		2		○	1	1	
	ポピュラー音楽研究 S	○		2	○		(5)	(1)	
	電子オルガンアンサンブル	○		2	○	○	1	1	
	器楽編曲法 S	○		2	○		1	1	
	器楽指導実習		○	2	○		1	1	
	<管楽器・打楽器>								
	器楽 A(応用)		○	6		○	3	3	
	器楽 B(基礎)		○	6		○	3	3	
	吹奏楽 S	○		2		○	3	1	
	合奏 (A)S	○		2	○		3	1	
	オーケストラ	○		2		○	2	1	
	管打楽器リベア実習						3	1	—2007 年度より廃止—
	<弦楽器>								
	器楽 A(応用)		○	6		○	1	1	
	器楽 B(基礎)		○	4		○	1	1	
	オーケストラ	○		2		○	(2)	(1)	
	室内楽研究	○		2		○	1	1	
	弦楽作品構造研究	○		2		○	1	1	
	<ジャズ>								
	器楽 A(応用)		○	6		○	2	2	
	器楽 B(基礎)		○	4		○	2	2	
	ポピュラー音楽概論	○		2	○		9	(1)	

管打楽器リベア実習								2	1	—2007年度より廃止—
ジャズアンサンブル		○			2		○	2	1	
<邦楽>										
器楽A(箏)			○	6						
器楽B(三絃)			○	4						
邦楽合奏SA		○			2					2006年度 箏歌
邦楽合奏SB		○			2					2006年度 箏合奏

教員配置のない科目は、2006年度の履修生不在を示す。()：他専攻との合同授業で履修生合計を示す。

(2) 教養教育の取組み、専門教育の内容、授業形態のバランス、必修・選択のバランス、専任教員の配置等について特に強調したいことがあれば記述して下さい。

○ 教養教育の取組み

教養科目として一般教育科目、外国語科目、保健体育科目を設ける。一般教育科目に関しては、人文・社会・自然科学系科目の他に、全学生に対して「日本語表現」を必修とすることにより、日本語リテラシー能力の向上をはかる。外国語は英語、イタリア語、ドイツ語、フランス語のいずれかを必修とし、2カ国語以上を履修することも可能である。保健体育においては身体表現の基礎を培うためにダンスを積極的に取り入れている。

○ 専門教育の内容

専攻の教育に留まらず、音楽に関する様々な領域について網羅すべく、選択科目を数多く配置し、学生の進路や志向に柔軟に対応できるようにしている。もちろん実技の修練が教育内容の根底にあることはいつの時代にも共通する。実技の修練過程における自己分析や問題解決能力の開発は、よき社会人の育成に役立つものである。そのことも含めて、本学では学内・外における実践的な演奏活動の場を多く設けることによって、よき音楽文化の送り手の養成を行い、社会で活躍できる人材育成における多大な教育効果を上げている。

○ 授業形態のバランス

本学の教育の特性として、講義科目に比べて演習科目が極端に多くなっているが、これは、音楽系短期大学としての本学の目標達成にとって必要不可欠であると考えている。また本学は専門分野における個人レッスンを中心とした授業を展開しているが、これらを補助する目的を持つ「基礎講座」や、合奏やオペラの公演、バンド活動等の演習科目が通常授業のカリキュラムの中に組み込まれており、これらを比較的少人数のクラスに分割することにより、専門分野に関する歴史や知識を学び、学習に広がりや深さを培うとともに、同一クラスの共同作業を経験できるよう配慮している。

○ 必修・選択のバランス

開講科目総数からみると必修に比して選択の科目数が極めて多いが、入学してくる学生の多様化、卒業後の進路志向の多様化に対応するために結果的にこのようなバランスになったが、学生の履修の適正化のために、カリキュラムの抜本的な見直しを2007(平成19)年度に実施する。

(3) 当該教育課程を履修することによって取得が可能な免許・資格を示して下さい。また教育課程に関係なく免許・資格等を取得する機会を設けている場合は、その免許・資格名とどのような履修方法であるかを記述して下さい。

<音楽科>

卒業者は、「短期大学士（音楽）」の学位が授与される。取得可能な免許状は中学校教諭二種免許状（音楽）である。教職免許については、教育実習履修のための適性試験を1年次の4月に行っている。この試験を通じ教員となるために教職免許状の取得を希望する学生の意識向上に努めている。

本学では、さらに各種音楽教室（ヤマハ、カワイ、ローランドなど）の講師資格取得の準備講座、パソコン資格取得準備講座、秘書検定2級等を実施し、資格取得を目指す学生を支援している。

<専攻科>

専攻科は、大学評価・学位授与機構の認定専攻科であり、専攻科開設全科目は芸術学士（芸術）の取得に必要となる科目に算入される。

(4) 選択科目を学生が適切に判断して選択できるように、学生便覧やガイダンス等でどのように指導しているか、また学生が希望する選択科目を履修しやすいように、時間割上どのような工夫を施しているか等について記述して下さい。

学生が履修する全科目について、全専攻に共通する履修上の規則及び専攻等の科目群ごとの履修方法を記載した「履修規程」を作成している。新年度の日程に合わせて、「学生便覧」、「Campus Guide」、時間割を配布している。学生・教職員は全科目の「講義概要」（シラバス）を法人公式ホームページから検索可能である。全学生及び専攻別向けのガイダンスを3月末から4月初めに実施している。2007（平成19）年度からは、事務局の学務スタッフだけではなく、専任教員が加わって新入生をグループに分け、きめ細かな助言・指導を行うオリエンテーションを実施している。

時間割については、2007（平成19）年度に根本的な見直しに入り、改組を計画している2009（平成21）年度を目途に、学生にとってより効率的かつ効果的な時間割を策定すべく検討を重ねている。

(5) 卒業要件単位数及びその他の卒業要件（必修単位の修得、学生納付金の納付等）を示して下さい。また学生にはどのような方法で卒業要件を周知させているかを記述して下さい。

○ 卒業要件の単位数

本学に2年以上在学し、下表に示された科目を含む62単位以上を修得することを要件としている。また、授業料等納付金は本学が指定した期日までに納入しなければならない。

<音楽科>

専攻別の卒業要件単位数（学則第28条・30条・別表第Ⅱ記載） 2007（平成19）年度

科目種別			作曲専攻	声楽専攻	器楽専攻			
					ピアノ	管弦打	箏	
一般教育科目	日本語表現Ⅰ		2単位					
	日本語表現Ⅰ以外		2単位以上					
外国語科目			2単位以上					
保健体育科目			1単位以上					
専門科目教育科	各専攻別		34単位	26単位	24単位	14単位	34単位	
	合奏等選択必修		－	－	－	4単位以上	－	
	音楽基礎科目	ソルフェージュ	2単位以上					4単位以上
		音楽理論	－	2単位以上				
		音楽史 （世界と日本の音楽を考える）	2単位					

	音 楽 史	2 単位以上			
各 専 攻 共 通 専 門 教 育 目 科		6 単位以上	4 単位以上	6 単位以上	12 単位以上

科目種別			ジャズ・ポピュラー専攻				
			ジャズ・コース	ポピュラー・コース		ミュージカル・コース	電子オルガン・コース
				ヴォーカル	インストルメント		
一般教育科目	日本語表現Ⅰ		2単位				
	日本語表現Ⅰ以外		2単位以上				
外国語科目			2単位以上				
保健体育科目			1単位以上				
専門教育科目	各専攻別		28単位	32単位	30単位	20単位	22単位
	音楽基礎科目	ソルフェージュ	2単位以上				
		音楽理論	2単位以上				
		音楽史 (世界と日本の音楽を考える)	2単位				
		音楽史					
	各専攻共通専門教育科目		12単位以上	8単位以上	10単位以上	16単位以上	14単位以上

<専攻科>

1 年以上在学し、必修科目である修了研究、及びコンサート・プロデュース、専攻別必修科目として「作曲」（作曲専攻）、「声楽 A」（声楽専攻）、「器楽 A」（器楽専攻）からなる 3 科目の中から 11 単位と、選択必修科目（6～9 科目）から 8 単位、選択科目（12～15 科目）から 7 単位の合計 26 単位以上が修了要件単位である。選択必修科目から 8 単位以上取得した場合は、選択科目の修了要件単位に含まれる。

○ 学生への周知

「学生便覧」、「Campus Guide」において詳しく案内している。

各学生の単位修得状況をコンピューター上で把握しており、学務事務部門教務担当でセメスター毎にチェックし、学生への受講案内を行っている。

納付金については、振込用紙を保護者に郵送し、大幅に遅れている場合は、学務事務部門学生生活担当が学生に事情を聞き、相談の上対応している。

(6)教育課程の見直し、改善について、学科等の現状を記述して下さい。なおこの項はできれば学科等の責任者(学科長、学科主任等。以下、「学科長等」という。)が記述して下さい。

本学では、これまで音楽科のもとに作曲専攻、器楽専攻、声楽専攻、ジャズ・ポピュラー専攻の 4 つの専攻及び専攻科を設置し、各専攻の教育目標に基づき学生の創造的な音楽性の開発と人間性の涵養という目的を達成すべく努力を重ねてきた。しかし現在の社会状況及び学生の志向の変化も著しく、その変化も視野にいれながら、専攻、コースの見直しと抜本的なカリキュラムの再構築のため、2004(平成 16)年度に教育改革プロジェクトが発足し、2005(平成 17)年度にはワーキンググループが発足した。2006(平成 18)年度の運営会議において、現専攻下にある各コースをすべて独立したコースとし、各コースの独自性をより尊重すると同時に、学生の専門横断的勉学の可能性を高めることを目指した改組の方向性が決定し、2009(平成 21)年度改組を目途に具体的検討を重ねている。

【授業内容・教育方法について】

(1) シラバスあるいは講義要項を作成する際に配慮していること等を記述して下さい。シラバスあるいは講義要項が作成されていない場合はその事由等を記述して下さい。

「講義概要」(シラバス)は、学習目標と学習内容を明示し、履修登録時の科目選択及び各授業科目の準備学習を行う際に活用されるものであり、「講義概要」に掲載して学生への周知を図っている。2007(平成 19)年度からはそれまでのCD-ROM配布に代えて、パスワード入力による法人公式ホームページ上での検索に閲覧方法を変更した。「講義概要」(シラバス)には科目名、担当教員名に加え、講義テーマ、講義のねらい、各回授業の概要、成績評価の方法、教科書(テキスト)、副テキスト、参考書、備考の各項目が記載されている。学生は学内のコンピューター端末や自己のパソコンなどからアクセスすることができる。

(2) 学生の履修態度、学業への意欲等について、学科長等はどのように把握し受け止めているか記述して下さい。

学生の履修意欲は高く、ほとんどの学生が、2年間、4セメスターの授業時間を有効に活用している。2006(平成 18)年度に実施した学生による授業アンケートの結果を見ても学生の満足度は全体を通じて5段階の平均値が優に4.0を超えており、満足度はかなり高いものと考えている。私語その他の受講態度に関する問題は各専門分野において従来から研究を行い改善を図っている。学業への意欲の高さは、さらに授業時間外の練習室利用、自主的な演奏会の企画や実施などに表れている。2007(平成 19)年度に初めて実施した学長特別講座においても、学長自ら大学で学ぶ姿勢などについて直接学生に語りかけるなど、今後も学生の履修態度及び学習意欲のさらなる向上に向けて努力したい。

【教育改善への努力について】

(1) 学生による授業評価を行っている場合はその概要を記述して下さい。行っていない場合にはその事由等を記述して下さい。

1998年(平成 10)年1月に初の授業アンケートが実施された。2004(平成 16)年1月には、学生による、副科実技科目を除いた講義・演習・実技全科目の授業評価アンケートが実施された。続いて、2004年(平成 16)年6月～7月には教員による授業評価アンケートが実施され、その集計結果は同年9月に報告書として学内に公表した。この授業評価アンケートは、2005(平成 17)年度には後期開講の全科目を対象として行い、2006(平成 18)年度も同様に実施した。

今後の課題は、後期科目のみ実施してきた学生による授業評価アンケートを、前期科目を含めて実施することである。

(2) 短期大学全体の授業改善(FD活動及びSD活動等)への組織的な取り組み状況について記述して下さい。また学長は授業改善の現状について、どのように受け止めているかを記述して下さい。

授業改善のための組織変革への取り組みとしては、2004(平成 16)年度から各種の委員会を整理し、各専攻・科目教育主任と教学執行部とからなる運営会議に統合した。このことにより、各専攻の持つ独自性や特徴が全学的にもより深く認識されるとともに、本学が目指す教育方針が、より明確な形で各専攻のカリキュラム編成や学生の履修指導に反映されることとなった。

2005(平成 17)年度には、FD(Faculty Development)研究のためのプロジェクト「F

D研究会」を設置した。なお、これに関連して「成年初心者教育研究プロジェクト」、「成績評価システム・プロジェクト」もほぼ同時期に立ち上げた。これら 3 つのプロジェクトは相互に連携を保ちつつ、いずれは F D・S D 委員会のような組織の分科会的な性格を持つ組織として、本学における教育のための重要な機能を担うこととなるであろうことを期待している。また、授業評価アンケートの定期的実施が 2004（平成 16）年度から確立されており、今後は蓄積されたその評価結果を検討し、F D 活動や授業改善により良く反映されることを期待している。

2007（平成 19）年度前期中に、F D 準備委員会を組織して具体的検討に入り、2008（平成 20）年度には、F D 推進委員会による本格的活動に入る予定である。F D 活動の規程については、F D 準備委員会において現在検討中である。

S D (Staff Development) 活動についても、適宜、職員研修を実施するなど、学生支援力向上に努めてきたが、今後は、より組織的に活動を行うために、委員会の設置などを進めていく予定である。

(3) 担当授業について教員間の意思の疎通や協力体制、または兼任教員との意思の疎通について、学科長等は現状をどのように受け止めているかを記述して下さい。

本学では、専攻毎に密度の濃いコミュニケーションを図ることにより、兼任教員も含めて担当授業についての意思疎通を果たしてきた。さらに昨今の学生や社会の動向を受け、専門を異にする教員間の意思疎通や協力をより高め、よりスムーズな教学運営を行うために、学長、副学長、教育部長の主導のもとに、各専攻・科目教育主任からなる運営会議を組織し、教育運営にかかるすべての論議が、専攻横断的に全体的視野から、ここで行われ、その上で教授会に上程され、審議、最終決定されている。その一方で、各専門分野内での意思疎通のために、専門研究者集団内での協議も頻繁に行われており、教員間の意志の疎通や協力体制は十分に図られていると考えている。

【特記事項について】

(1) この《Ⅱ教育の内容》の領域で示した評価項目や評価の観点の他に、例えば、他の教育機関との単位互換制度、習熟度別授業、情報・メディア教育、国際理解教育、海外研修制度、インターンシップ、女子教育の伝統継承と発展への取り組み等、学科等において努力していることがあれば記述して下さい。

○ 単位互換制度

同一法人内に併設する大阪音楽大学との間に、大学設置基準 第 28 条第 1 項及び短期大学設置基準第 14 条第 1 項の精神に則り、「大阪音楽大学学則」第 53 条及び「大阪音楽大学短期大学部学則」第 50 条に基づき、単位互換に関する基本事項について「単位互換に関する協定及び覚書」を締結し、相互に単位互換を実施している。

この制度により大阪音楽大学で履修する学生は「特別聴講生」と称し、登録料及び履修料は無料である。修得した科目、単位、成績評価を本学の当該科目群の単位、成績として認定している。この制度で修得できる単位数は本学の学則により他短期大学または、大学で修得できる総単位数(15 単位)以内としている。

2006(平成 18)年度に本学学生で大阪音楽大学の単位を取得した者は 2 名、3 科目である。また大阪音楽大学の学生で本学の単位を取得した者は 5 名、1 科目である。

○ 習熟度別授業

入学時の基礎的な能力に差異があるため、「ソルフェージュ」及び「音楽理論」においては学生による自己申告制によってⅠ～Ⅵまでのクラスから開始段階を選択できる習熟度別授業を行っている。

○ 情報・メディア教育

専用の教室における音楽系ソフトを使用した「デスクトップ・ミュージック演習」や、「MIDIシステム・テクノロジー」をはじめ、「日本語表現」や「コンピューター演習」などの科目を通じてコンピューターの基本操作の習得を図っている。これらは専門教育科目に分類されているが、コンピューター・テクノロジーを身近に体験できる意味で、教養的側面を備えていると言える。

○ 国際理解教育

海外教育機関との交流演奏会やシンポジウム、招聘講師による特別講義、公開レッスンなどの受講や聴講を単位の一部として認める制度があり、国際的な音楽文化を理解し吸収する一助としている。

○ 海外研修制度

夏期休業期間中に海外や国内における音楽研修・セミナーの受講を希望する学生を対象として所定の選考を経て経費を援助する「短期学外研修制度」を設置してきた。2008（平成20）年度からは、研修期間を半年あるいは1年に拡大し、「海外留学制度」としてさらに充実させて再出発する予定である。

○ インターンシップ

インターンシップについては特に音楽系短期大学の特色を生かし、音楽関係を中心に、演奏会や教室の運営、楽譜・楽器・CDの販売や楽器のリペアなどの業種について関係企業等の協力の下に実施している。またこれは特別実習科目として単位化(2単位)している。

○ 特別実習科目

大学内外における創作・音楽研究・演奏・伴奏・制作関係等の音楽活動が有効な学習であることを積極的に評価し、単位認定を行う。活動内容によって、創作活動特別実習、演奏論特別実習、伴奏特別実習、インターンシップ特別実習、舞台論特別実習、社会活動特別実習の6つの分野に分け、実習記録とレポートにより成績評価を行う。

(2) 特別の事由や事情があり、この《Ⅱ教育の内容》の評価項目や評価の観点を求めることが実現(達成)できないときはその事由や事情を記述して下さい。

特になし。

Ⅲ 教育の実施体制

【教員組織について】

(1)現在の専任教員数を下表を例にして作成して下さい。

専任教員表

2007（平成19）年5月1日現在

専攻名	専任教員数					設置基準で定める 教員数		(ハ)	助手	(ニ)	備考
	教授	准教授	講師	助教	計	(イ)	(ロ)				
作曲専攻	3	2	0		5	5	-	-		0	
声楽専攻	4	0	1		5	5	-	-		0	
器楽専攻	6	3	0		9	8	-	-		0	
ジャズ・ポピュラー 専攻	7	1	1		9	7	-	-		0	
小計	20	6	2		28	25	-	-		0	
共通科目	2	2	0		4	-	-	-			
(ロ)	-	-	-	-	-	-	5	-	0	0	
合計	22	8	2	0	32	25	5	-	0	0	
(ハ) 教職*	1	2	0	0	3	-	-	2	0	0	

(イ) 短大設置基準第22条別表1のイに定める学科の種類に応じて定める専任教員数（3割以上は教授）

(ロ) 短大設置基準第22条別表1のロに定める短期大学全体の入学定員に応じて定める専任教員数（3割以上は教授）

(ハ) 教員免許課程認定審査基準による「教職に関する科目」必要教員数（1名以上は教授）

(ニ) 助手以外の者で短期大学全体もしくは学科等の教育研究活動に直接従事する教職員（事務職員を除く）をいう（例えば助手、副手、補助職員、技術職員など）。

* 教職に関する科目（教職の「教科に関する科目」担当（教員数3名以上、兼任可、1名以上は教授）を除く。）

(2)短期大学の教員にふさわしい資格と資質の有無については、訪問調査の際に、教員の個人調書(①履歴書、②研究業績書、③担当授業科目名、④その他)を提示していただきます。したがって個人調書をこの報告書に添付する必要はありません。

注記：①、②、③は訪問調査時に提出しました。

(3)教員の採用、昇任が適切に行われている状況を記述して下さい。その際、選考基準等を示した規程等があれば訪問調査の際にご準備をお願いいたします。

専任教員の採用、昇任については「大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部人事委員会規程」、「大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部専任教員採用選考基準」、及び「大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部専任教員昇格基準」に基づき適正に行われている。

採用については以下のプロセスを経て行われる。

第一次審査：書類選考

専門選考委員会＋人事委員会委員

*専門選考委員会：採用または昇任に該当する者の専門分野に係わる教員によって組織される委員会。



第二次審査：専門分野の能力

専門選考委員会＋人事委員会委員

審査経過並びにその結果を人事委員会に報告。



第三次審査：面接・モデル授業等
副学長を含む過半数の人事委員＋専門選考委員会
候補者を人事委員会に具申。

↓
人事委員会において、教授会に推薦する採用候補者を決定。

↓
教授会において承認し、理事長が任命する。

専任教員の昇任については、昇格基準として、経験年数、業績の具体的数値基準の達成を必要条件とし、これに社会活動、学内運営活動を加えて総合評価したうえで決定している。

(4)教員の年齢構成について下表を例に現状を記載して下さい。

専任教員の年齢構成表

年齢は 2007（平成 19）年 4 月 1 日現在

	年齢ごとの専任教員数（助教以上）							助手等の 平均年齢	備考
	70 以上	69～60	59～50	49～40	39～30	29 以下	平均 年齢		
合計人数 (35 人)	0 人	18 人	7 人	7 人	3 人	0 人	56.2 歳	—	
割 合	0.0%	51.4%	20.0%	20.0%	8.6%	0.0%			

上表のように専任教員の平均年齢は 56.2 歳である。学生数の変動や短期大学部改革などを睨みながら、年齢バランスを考えた適切な教員配置となるべく、中・長期的な教員採用計画を進めている。

(5)専任教員は、(a)授業、(b)研究、(c)学生指導、(d)その他教育研究上の業務に対して意欲的に取り組んでいるか。また上記4つの分野の業務取り組み状況にはどのような傾向があるかを短期大学の責任者（以下「学長等」という。）が記述して下さい。その際、過去3ヶ年（平成 16 年度～18 年度）程度の教員の担当コマ数（担当コマ基準、平均担当コマ数等を含む）、教員の研究業績、教員が参画する学生指導の業務、教員が参画するその他の教育研究上の業務概要を示して下さい。

専任教員は教育、研究、学内運営、社会連携等の業務に総じて真剣に取り組んでいると考えている。各教員は研究業績を毎年、所定の様式に記入し提出している。なお、音楽短期大学という性格上、実技担当教員が多く、学生と 1 対 1 で向き合う場合が中心であるため、“授業”、“研究”、“学生指導”はかなりの部分で重なっている。

専任教員の基準担当コマ（1 コマ 90 分）数は、演習を含む講義系は 6 コマ、実技レッスンは 7 コマである。2007（平成 19）年度の専任教員平均担当コマ数は、併設大学分を除き、4.55 コマである。なお、専任教員の過去 3 ヶ年の平均担当コマ数を次表に示す。

注記：当該表は略します。

教員が参画する学生指導の主な業務には、新入生オリエンテーション、教育実習校訪問指導、インターンシップ特別実習指導、各種演奏会実施の指導、学生生活指導等があり、大学の教育・管理運営業務としては教授会（教授、准教授、専任講師）、運営会議及び各種委員会、実技試験・学科試験における試験監督・審査・採点、入試業務等がある。

(6) 助手、副手、補助職員、技術職員等を十分に、あるいは可能な限り配置しているか。また助手等が教育研究活動等において適切に機能しているかを学長等が現状を記述して下さい。

2007（平成 19）年度においては、教員の要求を可能な限り受け入れる形で、授業補助担当者として本学独自の「演奏員」86 名、「技術員」5 名を配置している。

2006（平成 18）年度までは、本学では学校教育法に定められる助手とは別に、教育助手（非常勤）をおいてきた。これは音楽短期大学としての独自性を基に制度として設置したもので、主として合奏等の授業において演奏補助及び授業準備の補助などの業務を行うとともに、入学試験や在学生の試験等において補助員としての業務を行うことを目的として配置されたものであった。また教育助手の中で伴奏助手（非常勤）は合唱、指揮法等の教職必修科目において伴奏業務にあたってきた。それらは主に本学をはじめ、本法人内に併設されている短大専攻科や音楽学部、学部専攻科、大学院のピアノや音楽学（旧楽理）、作曲等の出身者から、選考を経て採用してきた。また技術を担当する授業補助者としては、デスクトップ・ミュージックの補助としてコンピューターの専門家などを配置してきた。その他、オーケストラ、吹奏楽といった合奏系授業の演奏補助的な業務では、学生にとって技術的負担が大きいと考えられる特殊な楽器等の演奏、あるいは、授業において使用する教材等の準備の補助などを教育助手の主業務としてきた。

しかしながら、大規模な合奏等では折に触れて分奏を行うなど、学生相互による自学自習的な要素も多くあり、こうした場面では、これまでの教育助手的なものよりも、身近に指導助言を行えるティーチング・アシスタント的なものがより効果的ではないかと考えている。一方伴奏助手としての業務は、伴奏の技能を必要とすることから、将来的には、一層の高い技術を持ち教育の一端を担うほどの人材が必要になると考えている。2006（平成 18）年度には教育助手・技術員などが授業内容とどのように関わっているかなどを抜本的に見直し、学生により質の高い教育を提供するため、教育助手制度をいったん廃止し、演奏員を中心とする新体制を発足させた。ただ将来的には、学校教育法に定められた助手などの、より一層の手厚い配置も含めて、教育補助や若手の研究活動の充実を図りたいと考えている。

【教育環境について】

(1) 校舎・校地一覧表を下の表を例に作成して下さい。

以下に校地面積を記す。

校舎・校地一覧表

2007（平成 19）年 5 月 1 日現在

	収容 定員	校舎面積				
		基準面積	現有面積			差異
			専用	共用	計	
	人	m ²	m ²	m ²	m ²	m ²
大阪音楽大学 短期大学部	600	4,950.00	20.89	46,326.65	46,347.54	41,397.54
併設 大阪音楽大学	900	8,015.75	404.54	(46,326.65)	(46,731.19)	(38,715.44)
その他共用						
計			425.43	46,326.65	46,752.08	

	校地面積				
	基準面積	現有面積			
		専用	共用	計	
	m ²	m ²	m ²	m ²	m ²
大阪音楽大学 短期大学部	6,000.00	0	67,828.00	67,828.00	61,828.00
併設 大阪音楽大学	9,000.00	0	(67,828.00)	(67,828.00)	(58,828.00)
その他共用					
計		0	67,828.00	67,828.00	

※基準面積とは設置基準で定める面積とする。

以下に教育研究活動が主に行われている、第1キャンパス、第2キャンパスにおける施設概要を示す。

① 第1キャンパス

(庄内校地)

- ・ A号館：学務センター、エクステンション・センター、事務局、教室、レッスン室
- ・ B号館：教室、レッスン室
- ・ C号館：図書館、教室、レッスン室
- ・ D号館：試聴室、視聴覚室、教室、レッスン室
- ・ E号館：練習室、クラブ用部室
- ・ F号館：演習室、教室、レッスン室、研究室、練習室
- ・ G号館：学生自治会室、練習室
- ・ H号館：教員研究室
- ・ J号館：学生サロン「ぱうぜ」
- ・ N号館：入試広報デスク

(西町校地)

- ・ L号館：ザ・カレッジ・オペラハウス
- ・ M号館：チケット OCM・広報室

(野田校地)

- ・ O号館：演習室、教室、レッスン室、研究室、練習室
- ・ P号館：音楽ホール型大教室「ミレニアムホール」、大学院研究室、レッスン室（兼練習室）

② 第2キャンパス

(名神口校地)

- ・ K号館：音楽博物館、録音スタジオ、ジャズ・ポピュラースタジオ、体育館（若人広場）、演習室、パイプオルガン室、教室、レッスン室、練習室、食堂、サロン

(2)校舎について、まず設置基準第31条の規定による短期大学全体の基準面積(基準面積を算出する計算式を含む)を示して下さい。また校舎を法人が設置する他の学校等と共用している場合は、他の学校の校舎の基準面積も記載して下さい。さらに校舎の配置図、用途(室名)を示した各階の図面を準備しておいて下さい。なお主要校舎については訪問調査の際にご案内いただきます。

大阪音楽大学短期大学部 校舎の基準面積

4,950.00 m² 設置基準第31条別表2のイ 音楽関係 600人まで

併設する大阪音楽大学 校舎の基準面積

8,015.75 m² 設置基準第37条の二 別表第三

(収容定員 900-800) × 2,975 ÷ 400 + 7,272

本学が保有する校舎の面積は設置基準を満たしている。

(3)教育研究に使用する情報機器を設置するパソコン室、マルチメディア室、学内LAN、LL教室及び学生自習室の整備状況(機種、台数等を含む)について記述して下さい。またその使用状況(使用頻度等)についても記述して下さい。

○ 教育研究に係る情報機器の整備

下表に情報機器等の設置・整備・使用状況一覧と学内LANの整備状況をそれぞれ示す。

K号館の1階(K118)にDTM(デスクトップ・ミュージック)演習室が設置され、「デスクトップ・ミュージック演習」、「コンピューター音楽演習」などの授業に活用されている。

授業では、学生が1人1台使用でき、自動編曲システムやシーケンスソフトなど、音楽制作に必要な基礎知識が学べるようになっている。同館5階(K504)にはWindowsコンピューター20台を設置したMIDIテクノロジー演習室を設け、ジャズ・ポピュラー専攻学生の授業に活用している。なお、同館1階にはWindowsコンピューター14台、Macintosh 1台を置いたDTMブースを設置し、学生が自由に使用出来るようになっている。さらに、1階第2サロンにはLAN接続されたコンピューターが12台設置され、学生は自由に利用できる。

学生サロン「ばうぜ」の2階にWindowsコンピューターが17台設置され、インターネットの閲覧、本学図書館の蔵書検索が可能となっている。

F号館には、Windowsコンピューターが37台と21台を設置するコンピューター室2室があり、幅広い授業で利用されている。

O号館学生サロンにも、LAN接続されたコンピューターを6台設置している。

豊南寮集会室にも、LAN接続されたコンピューターを4台設置している。

このように、ここ数年の情報機器の充実度はかなり進んでいると考えているが、学生のITリテラシーの習熟度を高めることが課題である。

情報機器等 設置・整備・使用状況一覧

2006(平成18)年度

分類	使用目的	教室名	設置機材の概要	使用回数 (週当たり)
パソコン 設置	コンピューター演習室	F212	Win 37台 プロジェクタ/スクリーン	17(3)/22
	コンピューター演習室	F213	Win 21台 プロジェクタ/スクリーン	1/22
	DTM 演習室	K118	Mac 24台+教員用1台 プロジェクタ/スクリーン MIDI音源 MIDI鍵盤 MIDIピアノ	15(6)/22
	MIDIテクノロジー	K504	Win 20台+教員用1台 プロジェクタ/スクリーン	8(8)/22

	演習室		MIDI 音源 MIDI 鍵盤	
キーボード・システム	M L 教室	F313	電子ピアノ 21 台 (模範演奏表示用モニター付き) 制御用 P C 1 台	16(14)/22
	M L 教室	K120	キーボード・シンセサイザー 25 台 大型モニター2 台	21(8)/22
パソコン設置	学生 自習用	ばうぜ	Win 17 台 (ネット接続可)	常時使用
	学生 自習用	O 号館 1 階	Win 6 台 (ネット接続可)	
	学生 自習用	K 号館 1 階 (自習室)	Win 14 台 Mac 1 台 (ネット接続可) MIDI 音源 MIDI 鍵盤	
	学生 自習用	K 号館 1 階 (第 2 サロン)	Win 12 台 (ネット接続可)	
	学生 自習用	豊南寮 1 階	Win 4 台 (ネット接続可)	

使用回数は併設大学との合計数。() 内は本学のみを使用数

学内 L A N の状況

2007 (平成 19) 年 4 月 1 日現在

サーバ (8 台)	L A N 回線		パソコン	用途
Web WebDB メール ウイルスチェック プロキシ ドメイン 教育研究 D B 学務システム 学生用電子掲示板システム	A 号館	学務事務部門	41 台	事務用
		エクステンション事務部門	5 台	学生用 (就職活動他)
		教員集会室	2 台	教員用
		会議室		
	C 号館	図書館	4 台	学生用 (資料検索用)
	D 号館	視聴覚室	4 台	学生用 (資料検索用)
	H 号館	教員研究室		
	ばうぜ	1 階	4 台	学生用 (自習用)
		2 階	13 台	学生用 (自習用)
	K 号館	音楽博物館	10 台	教職員用
		K502	1 台	教職員用
		K503		
		K504	20 台	授業用
		K215	1 台	教員用
		K118	25 台	授業用
		録音室	4 台	事務用 (2 台) 録音関係 (2 台)
		第 2 サロン	12 台	学生用 (自習用)
		コンピューターブース	15 台	学生用 (自習用)
	O 号館	管弦打研究室	2 台	教員用
		学生控室	6 台	学生用 (自習用)
	豊南寮	食堂	2 台	学生用 (自習用)
		和室	2 台	

○ 教職員に対する情報機器の整備

各事務系統には学内 L A N の端末として概ね一人の事務職員に 1 台のパーソナルコンピュータを設置している。それぞれに設定されたアクセス権によって業務上必要な領域にアクセスできるように、同一部門内ではそれらのファイルが共有できる状態を確保している。教員については教員集会室に L A N 接続の共用コンピューターが設置され、約半数の教員の研究室・レッスン室に L A N 回線が敷設され、利用されている。しかし教員の連絡等には主として紙媒体による文書や内線電話による連絡に頼っている部分があり、学内 L

A Nの利用を推し進めたい。近い将来、全専任教員の学内L A N利用を可能にする予定である。

(4)授業用の機器・備品の整備状況及び整備システム(管理の状況、整備計画等を含む)について、その概要を記述して下さい。なお機器・備品の整備状況については訪問調査の際に校舎等をご案内いただく際にご説明いただきます。

○ 概 要

本学では通常の講義や演習においても積極的に視聴覚に訴える授業内容を取り入れているため、これらの授業で使用される教室(50教室)ほぼすべてにA V機器(C D・L P・L Dプレーヤー、V T R、大型モニター)及びグランドピアノを設置している。

演習室としては主に合奏等大規模な人数による演習科目で使用する部屋として、中・大教室をD号館に1室、F号館に1室、O号館に3室、中規模のアンサンブル用演習室としてF号館に1室、K号館に3室、O号館に3室設置している。このうちO号館の合奏用演習室には懸架式のマイクロフォンを備えた録音設備を常設し、簡易な録音等が可能な状態となっている。また、演奏系専攻の性格上、演奏会形式の授業や、自主演奏会などの要望に合わせて、ホール様式の設定が可能な教室をいくつか設置している。

○ 独自の施設を備える教室

器楽専攻ピアノを除くすべての学生が選択可能な専門科目として開講している副科鍵盤楽器演習ではM L (Music Laboratory) システムを備えた特別教室を使用する。

F号館大教室(F434)にはスポットライトや調光卓を備えた簡易な照明設備や音響設備があり演劇や演奏会に対応している。

K号館2階にはジャズ・アンサンブルの演習室(ドラムセット、ピアノ、キーボードを備える)2室、同館1階には練習室8室を設置しており、その内、6室にはキーボード、アンプ、スピーカー、C D・M Dデッキ、2室にはドラムセットとC D・M Dラジカセを常備している。

K号館2階のK202教室は主にミュージカル・コースの授業に用いられるが、照明・音響設備を具えリハーサル室として舞台作りの学習に大いに役立っている。

P号館内にある音楽ホール型大教室「ミレニアムホール」は音響・照明システムを備え、舞台機構の学習も行えるようになっていて、学生の自主演奏会での使用を主たる目的として作られたものである。同ホールについては別項において詳細を示す。

C号館旧体育館はミュージカル・コース及び大学院のオペラ専用の教室として使用している。これらの教室は通常授業での使用のほか、学生による自主練習、研究活動の場所としても事前申し込みにより自由に使用できるようになっている。

また、舞踊系科目の「ダンス」が2006(平成18)年度から正規授業として開講されたのに伴って、F号館2階にダンス及び演技演習用の教室(壁面全面鏡、衝撃吸収性フローリング床)を設置した。

○ ライブハウスの設置

ジャズ・ポピュラー専攻(特にジャズコース)においては、音楽ホールの舞台よりライブハウスでの演奏が本来の形態であるため、そのような雰囲気を持った空間の開設が望ま

れていた。2006（平成 18）年夏に K 号館食堂にライブハウスとして使用可能な空間を設け、使用に供している。当施設は 2006（平成 18）年度中に計 5 回使用された（卒業生のライブ・コンサート 1 回を含む）。

○ 練習室

学生の自学自習及び演奏活動を支援するために、第 1 キャンパス、第 2 キャンパスを合わせて 172 室の練習室を確保している。その内訳を下表に示す。練習室には全室ピアノを設置しており、さらに専攻に応じ、パイプオルガン、電子オルガン、シンセサイザー、チェンバロ等が設置されている。また、管弦打楽器専用の学習・練習棟として O 号館を設置した。アンサンブル等学生が合同で練習する機会が多いためすべての練習室は小規模の室内楽練習に対応する空間を確保し、多種多様にわたる演奏形態にも対応している。各室は防音設備と個室単位で調整可能な空調設備を備える。また大型の楽器移動に合わせて楽器の運搬用に大型エレベータを設置している。この他、学生が個人として購入するのが容易でない特殊な楽器など本学で所有する管弦打楽器はこの O 号館内に保管され、専用の窓口を用意して、日常的な使用に柔軟に対応しつつ一括管理している。

各施設における練習室数			2007（平成 19）年 5 月 1 日現在			
	1 階	2 階	3 階	4 階	5 階	小 計
E 号館	—	—	8	—	—	8
F 号館	4	—	5	28	9 (2)	46 (2)
G 号館	—	5	5	—	—	10
K 号館	22	—	5	—	1	28
O 号館	2	8	20	—	—	30
P 号館	—	25	25	—	—	50
合 計	—					172 (2)

・（ ）は専攻科専用の練習室、他は併設大学と共用。

○ 機器・備品のメンテナンス

学内にはグランドピアノや電子オルガン、チェンバロ等の鍵盤楽器が約 800 台、クラリネットやヴァイオリン、ティンパニ等の管・弦・打楽器が約 500 点、箏・三絃等の邦楽器やリコーダー、古楽器等の合奏・アンサンブル用の楽器が約 850 点用意されている。

ピアノの調律は数ヶ月に一度の割合で定期的に行っている。合奏等で使用する大型管楽器や弦楽器、ハープや打楽器などはそれら楽器を専門とする学生には無料で貸し出している。専門以外の学生にも別に楽器を用意し、これらの楽器は打楽器を除き有料で年間を通じて学生個人に貸し出している。またピアノを除く貸出用楽器はその特殊性・専門性を考慮し、故障や点検など必要に応じて専門店等に依頼し保全に努めている。

各教室の機器整備は管理事務部門管財担当職員がこれに当たり、教員や学生からの要望を反映して年度毎の計画を立てて行っている。整備・点検・更新の全てについて常に最上の状態を維持するように努力している。

(5)校地、校舎の安全性、障害者への対応、運動場、体育館、学生の休息場所等について記述して下さい。訪問調査の際にご案内いただき、ご説明願います。

本学の校舎では、防火管理体制を整備し、豊中市南消防署に消防計画を届出ている。ま

た、「大阪音楽大学自衛消防隊規程」を策定している。消防設備に関しては、防火扉や火災警報装置をはじめ、各校舎の4階以上の高層階にある教室には非常用シューターを設置し、これらは毎年度に定期検査を行っている。エレベータが設置されている校舎はK、O、F号館であるが、教室間の移動のための利用は少ない。また、校舎入り口に傘入れの袋と専用のごみ箱が設置されている。

学生用のロッカー（鍵付き）は、複数の授業を持つ学生にとって、教材等の保管に役立っている。耐震性については各校舎について順次補修工事を行っている。学生の休息場所は専用の学生サロン「ぱうぜ」があり、その他校舎の随所にフリースペースを設けている。

視覚障害学生が教室を移動する際の安全確保をはかるため点字誘導ブロックの設置を行っている。2007（平成19）年度には点字誘導ブロックの延長を予定している。なお、身体障害者のためには洗面所をバリアフリー化している。

体育実技のために体育館（K号館4階）と、野田校地にテニスコートを備えている。

【図書館・学習資源センター等（以下「図書館等」という。）について】
 (1) 図書館等の概要について、全体の配置図、座席数、年間図書館予算、購入図書等選定システム、図書等廃棄システム、司書数、情報化の進捗状況等を含めて記述して下さい。なお図書館等には訪問調査の際にご案内いただきます。

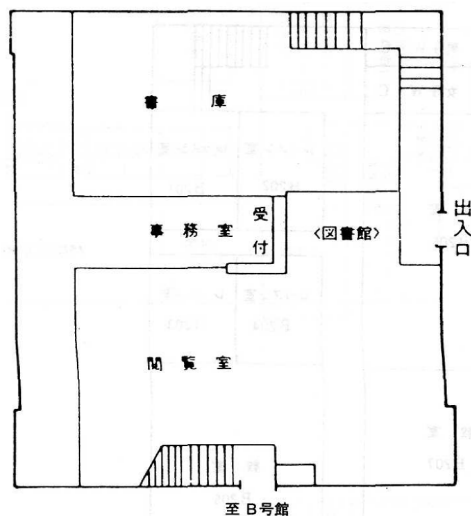
○ 図書館の概要

併設大学と共用している付属図書館は、和書、洋書を含めて、特に音楽書、楽譜、AV資料など音楽関係収蔵量は、西日本最大級の規模を持っている。C号館の1階、D号館の1階には書庫、閲覧室、視聴覚室などを配し、C号館では図書・楽譜・雑誌を取り扱い、総合カウンターを備えている。またD号館は視聴覚資料室としての機能を持っている。

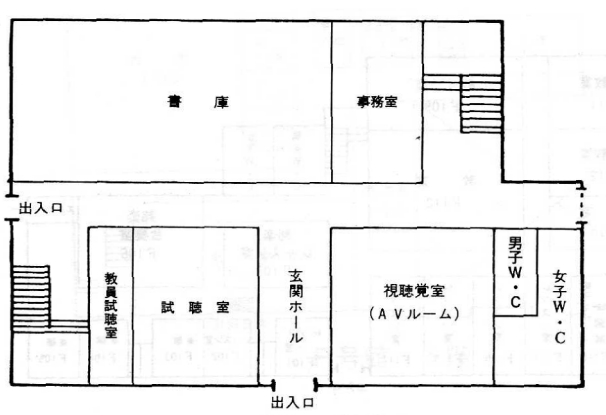
○ 全体の配置図

閲覧室・書庫の配置図

C号館 1階



D号館 1階



○ 座席数

付属図書館の座席数を以下に示す。

図書館施設設備の概要

2007（平成 19）年 5 月現在

種別	席数	設置館	面積（㎡）	備考
座席数	閲覧室	113	C 号館	198.00
	教員閲覧室	3	C 号館	3.70
	書庫内教員席	4	C 号館	-
	視聴室	33	D 号館	LP/CD/カセットテープ
	視聴覚室	28	D 号館	DVD/LD/Video
	教員視聴室	6	D 号館	全メディア
	第 2 閲覧室	6	D 号館	
書庫		C 号館	133.20	
		D 号館	102.24	
		E 号館	53.50	
		K 号館	158.00	

○ 図書館予算

2006（平成 18）年度の図書館予算を下記に示す。

図書館予算（併設大学との総額）

2006（平成 18）年度

種 類	予算項目	金額（円）
図書館資料費	予算額合計	13,150,000
	支払額合計	10,879,578
図書館事務費	予算額合計	13,725,000
	支払額合計	14,923,714

○ 図書等選定・廃棄システム

購入図書選定は、購入資料をカウンターに備えてある希望カードに所定事項を記入、提出された後に、図書の重複等をチェックのうえで、選書基準に基づき館長が最終選択を決定している。この他に図書館蔵書構成のための選書を行う。

図書等の廃棄システムについては、館の資料構成の方針に基づき、①研究教育上その価値が失われ、又は有害であると認められる資料、②本学内の会計単位を異にする他部課への移管が認められた資料、③組替（数量更正）を必要とする資料、④本学外への寄贈が確定した資料、⑤亡失が確定した資料、⑥欠損・汚損のため復元不可能になった資料、⑦その他、利用・管理が不適当と認められた資料、等の基準に照らし館長の許可により廃棄処理を行う。

○ 司書数

図書館司書は 2 名配置（2007（平成 19）年 5 月 1 日現在）され、専門知識に基づき業務を行っている。

○ 情報化の進捗状況等

2002（平成 14）年に開始した「教育研究データベース構築プロジェクト」は 2006（平成

18) 年度に完了し、図書館及び音楽博物館のほとんどの資料がデータベースに登録され、LAN上で検索可能となった。

○ 開館日及び開館時間など

図書館の利用時間は月曜日～金曜日は9:20～18:00（授業期間外は16:50）、土曜日は9:20～13:30であり、卒業生・外来者の利用（複写・閲覧のみ）も可能となっている（利用希望の場合は事前に連絡が必要）。休館日は日曜、祝日・振替休日、年末年始（12月29日～1月6日）、本学の創立記念日（10月15日）、推薦・一般入学試験期間、蔵書点検整備期間となっており、臨時の閉館については、その都度事前に掲示している。また、学生が所持している「Campus Guide」にも図書館開館期間が記述されている。

(2) 図書館に備えられている蔵書数(和書、洋書、学術雑誌数、AV 資料数等)を、下表を例に作成して下さい。

付属図書館の利用範囲は図書・楽譜・新聞・雑誌（バックナンバーを含む）の館内閲覧、図書・楽譜の館外貸出し、図書館資料の文献複写（著作権法に基づく）、LP・CD・カセットテープの試聴（試聴室D号館1F）、DVD・LD・ビデオの視聴（視聴覚室D号館1F）となっている。以下に図書館蔵書数を示す。

図書館蔵書数一覧（併設大学と共用）

2007（平成19）年5月1日現在

	和書		洋書		学術 雑誌	楽譜*	視聴覚資料		
	一般書	音楽書	一般書	音楽書			音響	映像	その他
冊（種）	33,516	32,782	19,292	45,209	175(種)	42,403	42,078	5,672	1,120
	66,298		64,501				48,870		

* 和書・洋書の音楽書中に楽譜（42,403冊）が含まれている。

(3) 図書館等には学生が利用できる授業に関連する参考図書、その他学生用の一般図書等は整備されているか。また学生の図書館等の利用は活発かを、図書館等の責任者(図書館長等)が現状をどのように捉えているかを記述して下さい。

○ 授業に関連する参考図書等

授業に関わる文献については閲覧室の書棚を利用し、できるだけ開架方式をとっている。閲覧室の座席の利用度は定期試験など特定の時期には満室になるほど高いが、普段はほぼ希望者は利用できる状態である。視聴覚室の利用度は常に待ち時間を要するほど利用度が高い。

○ 学生の利用状況

広範囲の楽譜を所蔵する本図書館は楽譜や視聴覚資料の利用を中心にして活発である。

下表に図書館の利用状況として、2004～2006（平成16～18）年度の入館者数の一覧を示す。

図書館の入館者数（併設大学との合計数）

2004～2006（平成 16～18）年度

年度	施設区分	教職員	学生	その他	合計
2004 年度	C 号館	4,115	37,435	1,716	43,266
	D 号館・試聴室・視聴覚室	6,080	32,652	1,049	39,781
2005 年度	C 号館	4,578	38,070	1,908	44,556
	D 号館・試聴室・視聴覚室	7,207	32,778	1,138	41,123
2006 年度	C 号館	4,560	38,043	1,899	44,502
	D 号館・試聴室・視聴覚室	7,883	31,920	1,269	41,072

○ 図書館利用者への配慮・サービス支援体制

毎年、新入生対象のガイダンスも実施し、利用者教育にも力を入れている。楽譜の利用が多いためレファレンス・サービスにも力を注いでおり、館員に尋ねやすい環境作りを常に考えている。

利用については入学時に配布するバーコード付きの学生証で手続きができる。卒業生に対しては、窓口で卒業年度や専攻氏名を口頭で申告すれば、卒業生データベースと照合・確認の上、館内貸出が可能である。現段階では、卒業生の利用は館内利用に限定している。

(4) 図書館等からの学内外への情報発信、他の図書館等との連携等、現在の図書館活動について、図書館長等がどのように受け止めているかを記述して下さい。

○ 学内外への情報発信

2006（平成 18）年度から「ライブラリー・ニュース」を年間 2 回のペースで発行し、館外への情報発信に努めている。

○ 他の図書館との連携

本図書館は、私立大学図書館協会と音楽図書館協議会（MLAJ）に加盟しているため、本学教職員・在学生は、加盟館での閲覧、所蔵調査及び相互貸借ができる。また O P A C 検索システムによる資料の検索が可能である。

インターネットのおかげで国内外の大学あるいは企業や放送局など他の機関との接点もより大きくなっている。本学図書館は豊富な楽譜・楽書を有しており、今後も他の機関と協力しながら特色ある図書館として、教育・研究における活用と共に社会貢献・地域貢献の役割を一層果たしていきたいと考えている。

【特記事項について】

(1) この《Ⅲ教育の実施体制》の領域で示した評価項目や評価の観点の他に、例えば外国人教員の採用、授業の公開、学習評価活動等、努力していることがあれば記述して下さい。

○ 音楽博物館

本学は開学以来の研究成果や資料の蓄積と、これらの研究に伴い蒐集された歴史的な楽器や楽譜等の管理・保全を目的に、併設大学と共同で「大阪音楽大学音楽博物館」を運営している。この音楽博物館は第 2 キャンパスの K 号館内にあり、2002（平成 14）年度より、旧付属楽器博物館と旧音楽研究所（音楽文化研究室・民族音楽研究室）が合併し、総合的な音楽資料の音楽博物館となった。当館では、後述する 3 分野の研究と関係資料の収集を行っている。下表に所蔵資料の一覧を示す。資料のデータベース化も 2005（平成 17）年度

に着手し、2006（平成 18）年に完了した。また、法人公式ホームページ上に公開する準備に着手している。

音楽博物館所蔵資料数（併設大学と共用） 2007（平成 19）年 4 月 1 日現在

楽器	2,320 点
書籍	12,088 点
視聴覚資料	6,700 点
関連研究領域の論文等	6,700 点
関西の民俗音楽に関する一次資料	約 14,000 点
関西の洋学史（明治～現在）に関する一次資料	約 270,000 点
大阪音楽大学の歴史に関する資料*	33,322 点

* 資料をデータベース化するときに洋楽史資料と重複するものは整理統合したため減少した。

楽器展示室には、サントリー弦楽器コレクションを常時展示している。これは 1999（平成 11）年にサントリー株式会社より寄贈を受けた弦楽器、及びその付属品から成るコレクション（弦楽器 42 点、弓 22 点、その他 12 点の計 76 点）であり、ストラディヴァリのピッコロ・ヴァイオリンやガスパロ・ダ・サロ製作によるヴィオラ・ダ・ガンバ等の逸品を含んでいる。また、2004（平成 16）年 4 月には、本学の創立者永井幸次の記念コーナーを設置した。このコーナーは、関西における洋楽教育の先駆者として生きてきた永井幸次の年譜、教材用に作曲した合唱曲等を収めた楽譜、愛用のオルガン等を展示している。楽器展示室の他にレファレンス・ルームを新設し、所蔵資料と、各種レファレンスに対応している。またミュージアム・コンサート、セミナー、ワークショップを開催している。音楽博物館は、月曜日～土曜日 10:00～16:00（祝祭日、本学の休日を除く）に開館している。同音楽博物館は学外にも一般開放され、様々なレクチャーなどを行い広報に努めている。

下表に音楽博物館の入館者数を示す。この表が示すように入館者数は年々増加の傾向にある。

音楽博物館入館者数（併設大学と共用） 2004～2006（平成 16～18）年度

年度	学生	教職員	授業参加	一般	グループ見学	催事参加	合計
2004 年度	292	152	279	292	395	887	2,297
2005 年度	254	75	122	378	454	799	2,082
2006 年度	234	121	375	382	501	951	2,564

音楽博物館における研究内容は以下の 3 分野である。

- ① 世界の楽器と音楽に関する研究＝世界各地の楽器と音楽に関する資料から、それぞれの民族の音楽文化について研究する。
- ② 関西の洋楽史に関する研究＝日本人が異文化である西洋音楽を受容してきた経緯について、特に、本学が立地する関西での状況を研究する。
- ③ 関西の民俗音楽に関する研究＝大阪の「天神祭」に始まり、順次、瀬戸内海沿岸地域の同祭に関連する芸能などの調査・研究を行う。

○ 外国人教員の採用

外国語科目、声楽専攻科目に外国人兼任教員を採用している。

○ 公開授業

毎年内外の著名音楽家等を招き、特別講義として公開授業（レッスン・講演）を行っている。下記に過去3年間の特別講義を示す。

公開レッスン・講義（併設大学と共同実施）

2004～2006（平成16～18）年度

日 程		講 師	対象 専攻等	内 容	公開状況
2004年度	5月10・11日	パスカル・モラゲス（本学客員教授）	管弦打	現代の奏法と解釈	専攻生のみ
	5月11日	モラゲス木管五重奏団	管弦打	木管五重奏の分析と実践	学内のみ
	5月22日～26日	ドナルド・ハンズバーガー（ウインドアンサンブル指揮者）	管弦打	吹奏楽について	学内学外
	4月9日～16日	ユージン・インジック（ピアニスト）	ピアノ	公開レッスン	学内のみ
	5月24日	ユージン・ルソー（サクソフーン奏者）	管弦打	クラシック・サクソフーン演奏法	学内のみ
	6月9日	辛島文雄・井上陽介・奥平真吾（ジャズトリオ）	ジャズコース	ジャズ演奏法	学内学外
	6月18日・25日・7月5日	中島警子（本学名誉教授）	邦楽	箏合奏について組歌と邦楽曲分析について箏独奏曲について	学内のみ
	7月7日	野田暉行（東京芸術大学副学長）	作曲	自作品の軌跡と音楽の未来への展望	学内学外
	10月12日	斉藤 浩（スロバキア国立バンスカビストリツァ芸術アカデミー）	音楽学	東西をつなぐ音 ツィンバロンとそのふるさとハンガリーについて	学内学外
	10月26日	ウルフ・ローデンホイザー（ミュンヘン国立音楽大学教授）	管弦打	ブラームスの2曲のソナタ	学内のみ
	10月28日	振津郁江（武庫川女子大学講師）	作曲	音楽と映像とパフォーマンスの融合を求めて	学内学外
	11月13日	ライナー・セガース（ハンスアイスラー音楽大学教授）	管弦打	オーケストラにおけるティンパニの役割について	学内学外
	12月10日・1月4日	今道友信（東京大学名誉教授）	全学	藤川正夫の詩を読む	学内学外
	12月13日・14日	ガブリエッラ・トゥッチ（声楽家）	声楽	公開レッスン	学内学外
	2月19日	土岐英史・江藤良人（ジャズ奏者 サックス・ドラム）	ジャズコース	ジャズ演奏法～ジャム・セッションの手法～	学内学外
3月10日	ノーマン・シェトラー（伴奏ピアニスト）	声楽	公開レッスン	学内のみ	

日 程		講 師	対象 専攻等	内 容	公開状況
2005年度	4月11日	阪上和夫（併設大学教員）	声楽	作曲家トスティの歌曲とその生涯	学内学外
	5月20日	千 宗守（武者小路千家 家元）	全学	茶の湯の真髄ー畳半の緊張ー	学内学外
	5月21日	マルティース弦楽四重奏団	ピアノ	大学院ピアノ研究室学生と弦楽四重奏団の共演	学内学外
	5月21日	ミシェル・アリニョン（パリ音楽院教授）	管弦打	クラリネット特別講義	学内のみ
	5月26日	李炫昌（韓国啓明大学校講師）	音楽学	韓国伝統音楽講演と演奏	学内学外
	6月1日	野平一郎（作曲家・ピアニスト）	作曲	私の最近の作品について	学内学外
	6月27日	ビニー・チョ・アレグリーニ（カリアリ歌劇場オーケストラ首席奏者）	管弦打	トランペットの奏法と独奏曲について	学内のみ
	6月27日	アレッシオ・アレグリーニ（サンタチェチリアオーケストラ首席奏者）	管弦打	ホルンの奏法と独奏曲について	学内のみ
	9月30日	山本里佳（日本体操協会）古川悦子（ピアニスト・アレンジャー）	全学	「音と表現」リズムと動きを通して（実習）	学内のみ
	10月4日	トーマス・ローデ（ハンブルク歌劇場管弦楽団第一オーボエ奏者）	管弦打	オーボエ作品の解釈と演奏上のテクニックについて	学内のみ
	10月11日	ノーマン・シェトラー（伴奏ピアニスト）	声楽	ドイツ歌曲の解釈と演奏法	学内のみ
	10月17・18日	ケマル・ゲキチ（フロリダ州立大学教授・ピアニスト）	ピアノ	公開レッスン	学内のみ
	11月10日	椋野謙介クインテット	ジャズコース	ジャズ演奏法	学内学外
12月6日	ジョバンニ・ウンベルト・バッテル（ピアニスト）	ピアノ	ピアノリサイタル	学内のみ	

12月9日	今道友信（東京大学名誉教授）	全学	音楽の構造-美の在りかとその力-	学内学外
2月8日	ヨズア・バルチェ（武蔵野音大講師）	声楽	ドイツ語声楽曲の発音能力向上	専攻生のみ
2月10日	大植英次（大阪フィル音楽監督）	管弦打	オーケストラとその曲づくり	学内のみ
2月18日	土岐英史（本学教員）・大坂昌彦（ジャズ・ドラマー）	ジャズコース	ジャズ演奏法（ジャム・セッションの手法）	学内学外
3月20日	ロジェ・ブートリー（作曲家・指揮者）	管弦打	吹奏楽のアンサンブル法及び吹奏楽作品の技法について	学内学外

日 程		講 師	対象 専攻等	内 容	公開状況
2006年度	6月13・14日	バスカル・モラゲス（本学客員教授）	管弦打	「奏法と表現」クラリネット実技、室内楽のレッスン	専攻生のみ
	6月17日	ミシェル・アリニョン（パリ音楽院教授）	管弦打	クラリネット公開レッスンとミニコンサート	学内学外
	6月26日	須川展也（東京藝術大学講師）	管弦打	サクソフォーン演奏法、公開レッスン	学内のみ
	7月4日	一柳 慧（作曲家・ピアニスト）	作曲	私にとっての音楽の今日性	学内学外
	7月21～26日	ヨズア・バルチェ（武蔵野音大講師）	声楽	ドイツ語声楽曲の発音能力向上	学内学外
	9月22日	フランク・ロイド（エッセン・フォルクヴァンク大学教授）	管弦打	ホルンの独奏曲の演奏と解釈	学内のみ
	11月4～6日	アルヌルフ・フォン・アルニム（エッセン・フォルクヴァンク大学教授）	ピアノ	ピアノの演奏法、解釈、公開レッスン、演奏会	学内学外
	11月16日	梯 郁太郎（ローランド芸術文化振興財団理事長）ヘクター・オリベラ（オルガニスト）	電子オルガンコース	オルガンの魅力を語るーその歴史とこれからー	学内学外
	12月22日	パトリック・ジグマノフスキー（フランス・サンクルー市音楽院学長、リヨン国立高等音楽院、パリ・エコール・ノルマル音楽院教授）	ピアノ	作品の解釈の奥行きを深める ピアニズムの追求、公開レッスン	学内学外
	1月17日	鈴木英明（併設大学教授）	作曲	伝統と革新のはざまでー自作品を通してー	学内学外
	1月19日	田嶋直士（本学教員）	邦楽	尺八演奏及び指導の実践体験からえられる多方面の展開	学内学外
	1月29日～2月2日	ヨズア・バルチェ（武蔵野音大講師）	声楽	ドイツ語声楽曲の発音能力向上	学内学外
	2月19日	辻井清幸（併設大学教授）	管弦打	今後の関西の吹奏楽について	専攻生のみ
	3月19～23日	栗山昌良（演出家）	声楽	オペラの基本となる所作、立ち居振る舞いを身に付ける	学内学外

(2) 特別の事由や事情があり、この《Ⅲ教育の実施体制》の評価項目や評価の観点を求めることが実現（達成）できないときはその事由や事情を記述して下さい。

Ⅳ 教育目標の達成度と教育の効果

【単位認定について】

(1) 次の「単位認定の状況表」を例に、単位認定の方法と評価の実態を記載して下さい。なお、この表は平成 18 年度卒業生が入学時より卒業までに履修した科目について作成して下さい。

音楽科・専攻科卒業生の単位認定の状況表

2006（平成 18）年度卒業生

<音楽科>

科目 の種 別	授業科目名	授業 形態	履修 人員	主な単位の 認定方法			単位取得状況 (%)			最終の評価 (%)				
				試	レ	平	本試	再試	%	秀	優	良	可	不可
一般教育・外国語・保健体育	文学 A	講義	84	○		○	66.7		66.7	25.0	13.1	16.7	11.9	33.3
	文学 B	講義	81	○		○	48.1	2.5	50.6	14.8	11.1	11.1	13.6	49.4
	哲学 A	講義	83	○		○	73.5		73.5	9.6	9.6	22.9	31.3	26.5
	哲学 B	講義	78		○	○	57.7	2.6	60.3	6.4	6.4	14.1	33.3	39.7
	美学・芸術学 A	講義	59		○	○	42.4		42.4	6.8	5.1	13.6	16.9	57.6
	美学・芸術学 B	講義	49	○		○	53.1		53.1	4.1	14.3	8.2	26.5	46.9
	日本国憲法 A	講義	93	○	○	○	91.4		91.4	33.3	33.3	19.4	5.4	8.6
	日本国憲法 B	講義	71	○	○	○	91.5		91.5	35.2	22.5	21.1	12.7	8.5
	西洋史 A	講義	43	○		○	83.7		83.7	16.3	20.9	25.6	20.9	16.3
	西洋史 B	講義	54	○		○	77.8	1.9	79.6	5.6	20.4	22.2	31.5	20.4
	心理学 A	講義	142	○			92.3	0.7	93.0	36.6	31.0	19.7	5.6	7.0
	心理学 B	講義	144	○			79.9	3.5	83.3	26.4	22.9	21.5	12.5	16.7
	音響学 A	講義	32	○		○	53.1		53.1	15.6	6.3	12.5	18.8	46.9
	音響学 B	講義	24	○		○	50.0		50.0	12.5	8.3	12.5	16.7	50.0
	日本語表現 I	講義	331	○		○	73.1	0.6	73.7	5.1	17.2	21.5	29.9	26.3
	日本語表現 II A	講義	29	○		○	62.1	6.9	69.0	17.2	20.7	17.2	13.8	31.0
	日本語表現 II B	講義	23	○		○	65.2		65.2	8.7	17.4	26.1	13.0	34.8
	現代のキーワード（現代芸術）	講義	12	○		○	58.3		58.3	8.3	8.3	33.3	8.3	41.7
	現代のキーワード（現代史）	講義	8	○		○	50.0		50.0	12.5	37.5			50.0
	現代のキーワード（現代社会経済）	講義	1	○		○			0					100
	音声生理学 I	講義	1	○			100		100		100			
	英語（Ⅰ a・Ⅰ b）	Ⅰ a	172	○		○	89.0	1.2	90.1	22.1	20.3	21.5	26.2	9.9
		Ⅰ b	172	○		○	88.4	1.7	90.1	20.3	7.0	26.7	36.0	9.9
	英語（Ⅱ a・Ⅱ b）	Ⅱ a	87	○		○	87.4		87.4	23.0	23.0	26.4	14.9	12.6
		Ⅱ b	88	○		○	81.8		81.8	12.5	33.0	12.5	23.9	18.2
	ドイツ語（Ⅰ a・Ⅰ b）	Ⅰ a	41	○		○	78.0		78.0	9.8	14.6	12.2	41.5	22.0
		Ⅰ b	40	○		○	77.5		77.5	15.0	15.0	17.5	30.0	22.5
	ドイツ語（Ⅱ a・Ⅱ b）	Ⅱ a	24	○		○	91.7		91.7	12.5	16.7	20.8	41.7	8.3
		Ⅱ b	27	○		○	59.3		59.3	3.7	18.5	22.2	14.8	40.7
	フランス語（Ⅰ a・Ⅰ b）	Ⅰ a	17	○		○	58.8	11.8	70.6	29.4	5.9	5.9	29.4	29.4
		Ⅰ b	18	○		○	61.1	5.6	66.7	16.7	5.6	11.1	33.3	33.3
	フランス語（Ⅱ a・Ⅱ b）	Ⅱ a	7	○		○	100		100	42.9	14.3	28.6	14.3	
		Ⅱ b	6	○		○	100		100	66.7		33.3		
	イタリア語（Ⅰ a・Ⅰ b）	Ⅰ a	61	○	○	○	83.6	3.3	86.9	16.4	19.7	24.6	26.2	13.1
		Ⅰ b	70	○	○	○	65.7	10.0	75.7	15.7	10.0	24.3	25.7	24.3
	イタリア語（Ⅱ a・Ⅱ b）	Ⅱ a	37	○		○	83.8		83.8	40.5	18.9	13.5	10.8	16.2
		Ⅱ b	36	○	○	○	80.6		80.6	30.6	25.0	11.1	13.9	19.4
	英語（Ⅲ a・Ⅲ b）	Ⅲ a	22	○		○	90.9		90.9	59.1	13.6	13.6	4.5	9.1
		Ⅲ b	21	○		○	95.2		95.2	28.6	33.3	23.8	9.5	4.8
	英語（Ⅳ a・Ⅳ b）	Ⅳ a	28	○		○	82.1		82.1	17.9	25.0	25.0	14.3	17.9
		Ⅳ b	27	○		○	63.0		63.0	11.1	18.5	29.6	3.7	37.0
	ドイツ語（Ⅲ a・Ⅲ b）	Ⅲ a	11	○		○	100		100	18.2	45.5	9.1	27.3	

		Ⅲ b	演習	11	○	○	100		100	9.1	36.4	36.4	18.2		
	ドイツ語（Ⅳ a・Ⅳ b）	Ⅳ a	演習	5	○	○	80.0		80.0	40.0	20.0		20.0	20.0	
		Ⅳ b	演習	5	○	○	60.0		60.0	20.0	40.0			40.0	
	フランス語（Ⅲ a・Ⅲ b）	Ⅲ a	演習	4	○	○	75.0		75.0	50.0	25.0			25.0	
		Ⅲ b	演習	4	○	○	75.0		75.0		25.0		50.0	25.0	
	フランス語（Ⅳ a・Ⅳ b）	Ⅳ a	演習	4	○	○	75.0		75.0		50.0	25.0		25.0	
		Ⅳ b	演習	4	○	○	75.0		75.0		50.0		25.0	25.0	
	イタリア語（Ⅲ a・Ⅲ b）	Ⅲ a	演習	16	○	○	87.5		87.5	18.8	31.3	31.3	6.3	12.5	
		Ⅲ b	演習	15	○	○	86.7		86.7	13.3	20.0	53.3		13.3	
	イタリア語（Ⅳ a・Ⅳ b）	Ⅳ a	演習	5	○	○	100		100	40.0	60.0				
		Ⅳ b	演習	5	○	○	80.0		80.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	
		体育 A	講義・実技	240		○	○	95.8		95.8	31.3	21.7	25.8	17.1	4.2
		体育 B	講義・実技	224		○	○	77.2		77.2	25.4	14.7	15.2	21.9	22.8
	専門教育 作曲専攻	作曲Ⅰ a	実技	3	○	○	100		100	33.3	66.7				
作曲Ⅰ b		実技	3	○	○	100		100	33.3	66.7					
作曲Ⅱ a		実技	3	○	○	100		100	33.3	33.3	33.3				
作曲Ⅱ b		実技	3	○	○	100		100	33.3		66.7				
作曲基礎講座（楽曲分析）Ⅰ a		講義・演習	3		○	○	100		100		100				
作曲基礎講座（楽曲分析）Ⅰ b		講義・演習	3		○	○	100		100	33.3		66.7			
作曲基礎講座（楽曲分析）Ⅱ a		講義・演習	3	○	○	100		100	33.3	33.3	33.3				
作曲基礎講座（楽曲分析）Ⅱ b		講義・演習	3	○	○	100		100	33.3		66.7				
（作曲基礎講座）作曲理論Ⅰ a		実技	3	○	○	100		100	33.3	33.3	33.3				
（作曲基礎講座）作曲理論Ⅰ b		実技	3	○	○	100		100		66.7	33.3				
（作曲基礎講座）作曲理論Ⅱ a		実技	3	○	○	100		100		33.3	66.7				
（作曲基礎講座）作曲理論Ⅱ b		実技	3	○	○	100		100		66.7		33.3			
作曲専門ソルフェージュⅠ		演習	3	○	○	100		100	33.3	66.7					
作曲専門ソルフェージュⅡ		演習	3	○	○	100		100	33.3	66.7					
デスクトップ・ミュージック演習Ⅲ		演習	3		○	○	66.7		66.7	33.3	33.3		33.3		
デスクトップ・ミュージック演習Ⅳ		演習	1		○	○	100		100	100					
卒業作品			3		○		100		100		33.3	66.7			
管弦楽法Ⅰ・基礎		演習	3	○	○	○	100		100	33.3	66.7				
管弦楽法Ⅱ・応用		演習	3	○	○	○	100		100		66.7	33.3			
専門教育 共通科目	デスクトップ・ミュージック演習Ⅰ	演習	29		○	○	89.7		89.7	69.0	6.9	10.3	3.4	10.3	
	デスクトップ・ミュージック演習Ⅱ	演習	19		○	○	78.9		78.9	47.4	26.3		5.3	21.1	
	ソルフェージュⅡ	演習	157	○	○	87.3		87.3	0.6	20.4	27.4	38.9	12.7		
	ソルフェージュⅢ	演習	189	○		○	82.5		82.5	2.1	23.3	26.5	30.7	17.5	
	ソルフェージュⅣ	演習	158	○	○	88.6		88.6	7.6	20.3	32.3	28.5	11.4		
	ソルフェージュⅤ	演習	82	○	○	89.0	1.2	90.2	15.9	24.4	26.8	23.2	9.8		
	ソルフェージュⅥ	演習	58	○		○	81.0	1.7	82.8	25.9	32.8	20.7	3.4	17.2	
	視奏 A	演習	33	○	○	84.8		84.8	42.4	12.1	21.2	9.1	15.2		
	視奏 B	演習	26	○	○	76.9		76.9	3.8	26.9	46.2		23.1		
	音楽史（世界と日本の音楽を考える）	講義	277	○	○	88.1	0.4	88.4	13.7	27.8	26.4	20.6	11.6		
	音楽史（中世・ルネサンス）	講義	36	○	○	83.3		83.3		38.9	16.7	27.8	16.7		
	音楽史（バロック・古典派）	講義	74	○	○	73.0	1.4	74.3	16.2	23.0	21.6	13.5	25.7		
	音楽史（ロマン派）	講義	104	○	○	88.5		88.5	22.1	19.2	19.2	27.9	11.5		
	音楽史（20世紀）	講義	29	○		○	75.9		75.9	3.4	44.8	17.2	10.3	24.1	
	音楽史（日本）	講義	34	○	○	○	73.5		73.5	11.8	32.4	23.5	5.9	26.5	
	音楽史（諸民族）	講義	27	○		○	66.7		66.7	18.5	25.9	11.1	11.1	33.3	
	音楽史（ジャズ）	講義	17	○		○	76.5		76.5	11.8	5.9	11.8	47.1	23.5	
	音楽史（ポピュラー）	講義	48	○	○	○	72.9		72.9	6.3	20.8	12.5	33.3	27.1	

指揮法Ⅰ	講義	158	○		○	93.7		93.7	73.4	8.9	5.7	5.7	6.3
指揮法Ⅱ	演習	24			○	95.8		95.8	58.3	16.7	8.3	12.5	4.2
指揮法Ⅲ	演習	23			○	69.6		69.6	47.8	8.7	13.0		30.4
副科声楽Ⅰ	演習	105	○		○	93.3		93.3	31.4	46.7	13.3	1.9	6.7
副科声楽ⅡA	演習	44	○		○	88.6		88.6	4.5	31.8	43.2	9.1	11.4
副科声楽ⅡB	実技	46	○		○	93.5		93.5		54.3	37.0	2.2	6.5
合唱Ⅰa	演習	178			○	95.5		95.5	65.7	24.2	4.5	1.1	4.5
合唱Ⅰb	演習	179			○	91.6		91.6	70.4	10.6	4.5	6.1	8.4
合唱Ⅱa	演習	61			○	86.9		86.9	65.6	11.5	4.9	4.9	13.1
合唱Ⅱb	演習	61			○	78.7		78.7	37.7	26.2	4.9	9.8	21.3
副科鍵盤楽器Ⅰ（ピアノ）	実技	97	○			92.8		92.8	19.6	45.4	20.6	7.2	7.2
副科鍵盤楽器Ⅰ（電子オルガン）	実技	7	○			100		100	14.3	57.1	14.3	14.3	
副科鍵盤楽器Ⅱ（ピアノ）	実技	97	○			86.6		86.6	16.5	43.3	23.7	3.1	13.4
副科鍵盤楽器Ⅱ（電子オルガン）	実技	7	○			100		100		71.4	14.3	14.3	
副科鍵盤楽器Ⅲ（ピアノ）	実技	79	○			87.3	1.3	88.6	16.5	48.1	17.7	6.3	11.4
副科鍵盤楽器Ⅲ（電子オルガン）	実技	5	○			80.0		80.0		40.0	40.0		20.0
副科鍵盤楽器Ⅳ（ピアノ）	実技	60	○			81.7		81.7	8.3	35.0	28.3	10.0	18.3
副科鍵盤楽器Ⅳ（電子オルガン）	実技	4	○			50.0		50.0			50.0		50.0
副科鍵盤楽器演習Ⅰ	演習	49			○	89.8		89.8	20.4	44.9	18.4	6.1	10.2
副科鍵盤楽器演習Ⅱ	演習	47			○	83.0		83.0	21.3	48.9	12.8		17.0
副科鍵盤楽器演習Ⅲ	演習	39			○	69.2		69.2	7.7	51.3	5.1	5.1	30.8
副科鍵盤楽器演習Ⅳ	演習	23			○	65.2		65.2	4.3	34.8	21.7	4.3	34.8
電子オルガンⅠ	演習	30	○		○	96.7		96.7	50.0	36.7	10.0		3.3
電子オルガンⅡ	演習	29	○		○	79.3		79.3	20.7	44.8	10.3	3.4	20.7
電子オルガンⅢ	演習	3	○		○	100		100	100				
電子オルガンⅣ	演習	4	○		○	75.0		75.0	75.0				25.0
ピアノ構造論Ⅰ	講義	93	○		○	91.4		91.4	30.1	26.9	16.1	18.3	8.6
ピアノ構造論Ⅱ	講義	86	○		○	84.9		84.9	37.2	26.7	8.1	12.8	15.1
音楽療法Ⅰ	講義	112	○		○	92.0		92.0	28.6	23.2	28.6	11.6	8.0
音楽療法Ⅱ	講義	96	○		○	81.3		81.3	12.5	32.3	24.0	12.5	18.8
童謡・唱歌講座A	演習	49		○	○	83.7		83.7	32.7	16.3	22.4	12.2	16.3
童謡・唱歌講座B	演習	45		○	○	64.4		64.4	26.7	22.2	8.9	6.7	35.6
邦楽合奏AⅠ	演習	89			○	91.0		91.0	51.7	31.5	4.5	3.4	9.0
邦楽合奏AⅡ	演習	86			○	81.4		81.4	25.6	29.1	19.8	7.0	18.6
邦楽合奏BⅠ	演習	7			○	100		100	28.6	57.1	14.3		
邦楽合奏BⅡ	演習	5			○	100		100	20.0	40.0	20.0	20.0	
合奏BⅠ	演習	136			○	97.8		97.8	39.7	16.2	18.4	23.5	2.2
合奏BⅡ	演習	133			○	95.5		95.5	24.1	23.3	14.3	33.8	4.5
合奏DⅠ	演習	44	○		○	95.5		95.5	45.5	31.8	11.4	6.8	4.5
合奏DⅡ	演習	41	○		○	82.9		82.9	41.5	9.8	14.6	17.1	17.1
合奏EⅠ	演習	2			○	100		100	50.0			50.0	
合奏EⅡ	演習	2			○	50.0		50.0	50.0				50.0
合奏FⅠ	演習	13			○	69.2		69.2	53.8	7.7		7.7	30.8
合奏FⅡ	演習	11			○	63.6		63.6	45.5		9.1	9.1	36.4
コンピューター演習	演習	168	○		○	82.7		82.7	21.4	25.0	20.2	16.1	17.3
音楽基礎（ソルフェージュⅠ、音楽理論Ⅰ）	演習	149	○		○	96.6		96.6	18.8	28.9	34.9	14.1	3.4
音楽理論Ⅱ	演習	260	○		○	84.6	1.2	85.8	34.2	21.2	18.5	11.9	14.2
音楽理論Ⅲ	演習	196	○		○	83.7	1.0	84.7	21.4	24.0	24.0	15.3	15.3
音楽理論Ⅳ	演習	131	○		○	85.5		85.5	23.7	26.7	19.1	16.0	14.5
音楽理論Ⅴ	演習	62	○		○	90.3		90.3	27.4	19.4	33.9	9.7	9.7
音楽理論Ⅵ	演習	29	○		○	82.8		82.8	34.5	20.7	17.2	10.3	17.2

	作曲法Ⅰ	演習	213	○		○	94.4		94.4	37.6	26.8	19.7	10.3	5.6
	作曲法Ⅱ	演習	210	○		○	93.3	0.5	93.8	25.2	26.2	26.7	15.7	6.2
	インターンシップ特別実習	実習	2		○	○	100		100		100			
	リズムソルフェージュⅠ	演習	22	○		○	77.3		77.3	40.9	13.6	13.6	9.1	22.7
	リズムソルフェージュⅡ	演習	15	○		○	80.0		80.0	40.0	20.0	13.3	6.7	20.0
	音楽探検	演習	40		○	○	45.0	5.0	50.0	27.5		10.0	12.5	50.0
	音楽療法Ⅲ	講義	27	○		○	96.3		96.3	59.3	22.2	7.4	7.4	3.7
	音楽療法Ⅳ	講義	24	○		○	83.3		83.3	54.2	16.7		12.5	16.7
	ミュージック・ビジネス・マネジメントⅠ	講義	77		○	○	93.5		93.5		76.6	9.1	7.8	6.5
	ミュージック・ビジネス・マネジメントⅡ	講義	70		○	○	82.9		82.9		50.0	30.0	2.9	17.1
	副科ジャズ・ポピュラー演習Ⅰ	演習	35			○	71.4		71.4	14.3	34.3	11.4	11.4	28.6
	副科ジャズ・ポピュラー演習Ⅱ	演習	15			○	66.7		66.7	26.7	20.0	6.7	13.3	33.3
	インストラクター概論Ⅰ	演習	49			○	73.5		73.5		36.7	26.5	10.2	26.5
	ダンスA	講義・実技	37			○	78.4		78.4	45.9	32.4			21.6
	ダンスB	講義・実技	34			○	67.6		67.6	26.5	17.6	17.6	5.9	32.4
	視奏CⅠ	演習	9	○		○	66.7		66.7	33.3	22.2	11.1		33.3
	視奏CⅡ	演習	4	○		○	100		100		50.0	25.0	25.0	
専門教育 音楽専攻	声乐Ⅰa	実技	22	○			100		100	90.9	9.1			
	声乐Ⅰb	実技	22	○			100		100	31.8	59.1	9.1		
	声乐Ⅱa	実技	22	○			100		100	22.7	68.2	9.1		
	声乐Ⅱb	実技	22	○			100		100	40.9	54.5	4.5		
	声乐基礎講座Ⅰa	講義	22	○		○	100		100	54.5	45.5			
	声乐基礎講座Ⅰb	講義	23	○		○	95.7		95.7	43.5	8.7	8.7	34.8	4.3
	声乐基礎講座Ⅱa	講義・演習	22	○		○	100		100	72.7	18.2	9.1		
	声乐基礎講座Ⅱb	講義・演習	22	○		○	100		100	50.0	31.8	18.2		
	日本名曲講座	演習	21	○		○	95.2		95.2	76.2	14.3	4.8		4.8
	世界名曲講座	演習	20	○		○	100		100	40.0	50.0	10.0		
	ヴォーカル・アンサンブルA	演習	18	○		○	94.4		94.4	72.2	11.1	11.1		5.6
	ヴォーカル・アンサンブルB	演習	12	○		○	83.3		83.3	25.0	33.3	8.3	16.7	16.7
	歌曲発語演習Ⅰ	演習	14	○		○	92.9		92.9	85.7	7.1			7.1
	歌曲発語演習Ⅱ	演習	14	○		○	85.7		85.7	71.4		14.3		14.3
声・器	卒業演奏	実技	133	○			98.5		98.5	12.8	39.8	38.3	7.5	1.5
専門教育 音楽専攻	ピアノⅠa	実技	66	○			100		100	68.2	30.3	1.5		
	ピアノⅠb	実技	66	○			100		100	33.3	36.4	27.3	3.0	
	ピアノⅡa	実技	66	○			100		100	33.3	39.4	22.7	4.5	
	ピアノⅡb	実技	66	○		○	100		100	22.7	62.1	15.2		
	ピアノ基礎講座Ⅰa	講義	66	○		○	100		100	60.6	24.2	15.2		
	ピアノ基礎講座Ⅰb	講義	66	○		○	100		100	62.1	22.7	13.6	1.5	
	ピアノ基礎講座Ⅱa	講義・演習	66	○		○	100		100	65.2	24.2	10.6		
	ピアノ基礎講座Ⅱb	講義・演習	66	○		○	100		100	45.5	37.9	13.6	3.0	
	ピアノ教授法A	講義	55		○	○	94.5		94.5	78.2	16.4			5.5
	ピアノ教授法B	講義	54		○	○	83.3		83.3	53.7	18.5	7.4	3.7	16.7
	ピアノ・アンサンブルⅠ	演習	42	○		○	95.2		95.2	92.9	2.4			4.8
	ピアノ・アンサンブルⅡ	演習	29	○		○	100		100	96.6	3.4			
	管楽器Ⅰa	実技	34	○		○	100		100	29.4	50.0	17.6	2.9	
	管楽器Ⅰb	実技	34	○		○	100		100	5.9	79.4	14.7		
	管楽器Ⅱa	実技	34	○		○	100		100	17.6	76.5	5.9		
	管楽器Ⅱb	実技	34	○		○	100		100	17.6	38.2	41.2	2.9	

	弦楽器Ⅰ a	実技	4	○	○	100	100	75.0	25.0		
	弦楽器Ⅰ b	実技	4	○	○	100	100	75.0	25.0		
	弦楽器Ⅱ a	実技	4	○	○	100	100	25.0	75.0		
	弦楽器Ⅱ b	実技	4	○	○	100	100	50.0	50.0		
	打楽器Ⅰ a	実技	5	○	○	100	100	20.0	80.0		
	打楽器Ⅰ b	実技	5	○	○	100	100	20.0	60.0	20.0	
	打楽器Ⅱ a	実技	5	○	○	100	100	20.0	60.0	20.0	
	打楽器Ⅱ b	実技	5	○	○	100	100	20.0	40.0	40.0	
	合奏AⅠ a	演習	43		○	100	100	67.4	18.6	14.0	
	合奏AⅠ b	演習	43		○	100	100	81.4	11.6	4.7	2.3
	合奏AⅡ a	演習	43		○	100	100	67.4	18.6	14.0	
	合奏AⅡ b	演習	43		○	100	100	83.7	14.0		2.3
	オーケストラⅠ a	演習	2		○	100	100	100			
	オーケストラⅠ b	演習	2		○	100	100	100			
	オーケストラⅡ a	演習	4		○	100	100	100			
	オーケストラⅡ b	演習	5		○	100	100	100			
	吹奏楽Ⅰ a	演習	39		○	100	100	84.6	12.8		2.6
	吹奏楽Ⅰ b	演習	39		○	100	100	66.7	15.4	15.4	2.6
	吹奏楽Ⅱ a	演習	39		○	100	100	89.7	7.7		2.6
	吹奏楽Ⅱ b	演習	39		○	100	100	66.7	20.5	12.8	
	合奏AⅢ a	演習	43		○	100	100	79.1	18.6		2.3
	合奏AⅢ b	演習	42		○	97.6	97.6	54.8	31.0	9.5	2.4 2.4
	合奏AⅣ a	演習	43		○	100	100	79.1	18.6		2.3
	合奏AⅣ b	演習	42		○	100	100	54.8	33.3	9.5	2.4
	オーケストラⅢ a	演習	2		○	100	100	100			
	オーケストラⅢ b	演習	2		○	100	100	100			
	オーケストラⅣ a	演習	18		○	100	100	94.4			5.6
	オーケストラⅣ b	演習	17		○	100	100	94.1			5.9
	吹奏楽Ⅲ a	演習	38		○	100	100	86.8	13.2		
	吹奏楽Ⅲ b	演習	35		○	100	100	31.4	45.7	14.3	8.6
	吹奏楽Ⅳ a	演習	38		○	100	100	86.8	13.2		
	吹奏楽Ⅳ b	演習	35		○	100	100	31.4	45.7	14.3	8.6
	室内楽Ⅰ	演習	11		○	100	100	54.5	36.4	9.1	
	室内楽Ⅱ	演習	2		○	100	100		50.0		50.0
	室内楽Ⅲ	演習	2		○	100	100		50.0	50.0	
	室内楽Ⅳ	演習	2		○	100	100		50.0		50.0
	管弦打編曲法Ⅰ	講義	25		○	100	100	60.0	24.0	8.0	8.0
	管弦打編曲法Ⅱ	講義	24		○	79.2	79.2	20.8	16.7	20.8	20.8 20.8
	ピアノ演奏法A	演習	24	○	○	100	100	87.5	8.3	4.2	
	ピアノ演奏法B	演習	30	○	○	100	100	90.0	6.7	3.3	
器楽・J P	楽器構造演習	演習	18		○	94.4	94.4	38.9	38.9	16.7	5.6
	楽器構造論Ⅰ（管打）	演習	27		○	81.5	81.5	33.3	40.7	3.7	3.7 18.5
	楽器構造論Ⅱ（管打）	演習	27		○	77.8	77.8	33.3	37.0	7.4	22.2
	楽器構造論Ⅰ（弦）	演習	5		○	20.0	20.0	20.0			80.0
	モダンダンスA	演習	13		○	100	100	15.4	30.8	53.8	
	モダンダンスB	演習	13		○	100	100	15.4	30.8	53.8	
	モダンダンスC	演習	13		○	100	100	30.8	30.8	30.8	7.7
	モダンダンスD	演習	13		○	92.3	92.3	15.4	30.8	46.2	7.7
	バレエAⅠ	演習	13	○	○	100	100		30.8	38.5	30.8
	バレエAⅡ	演習	12	○	○	100	100		41.7	41.7	16.7
	バレエB	演習	13	○	○	100	100	15.4	23.1	38.5	23.1

専門教育 ジャズ・ポピュラー専攻	バレエC	演習	13	○	○	100		100	15.4	23.1	23.1	38.5	
	ジャズダンスAⅠ	演習	12	○	○	100		100		33.3	41.7	25.0	
	ジャズダンスAⅡ	演習	13	○	○	100		100		46.2	38.5	15.4	
	ジャズダンスBⅠ	演習	13	○	○	100		100	7.7	30.8	38.5	23.1	
	ジャズダンスBⅡ	演習	12	○	○	100		100	16.7	33.3	25.0	25.0	
	ミュージカル唱法Ⅰ	演習	13	○	○	100		100	23.1	69.2	7.7		
	ミュージカル唱法Ⅱ	演習	13		○	100		100	30.8	69.2			
	レパートリー唱法Ⅰ	演習	13	○	○	100		100	30.8	69.2			
	レパートリー唱法Ⅱ	演習	13	○	○	92.3		92.3	15.4	15.4	38.5	23.1	7.7
	ポピュラー音楽演習Ⅰ	演習	61		○	90.2	4.9	95.1	3.3	24.6	59.0	8.2	4.9
	ポピュラー音楽演習Ⅱ	演習	59		○	98.3		98.3		67.8	23.7	6.8	1.7
	ポピュラー・ヴォーカル・アンサンブルⅠ	演習	32	○	○	100		100	9.4	46.9	40.6	3.1	
	ポピュラー・ヴォーカル・アンサンブルⅡ	演習	32	○	○	100		100	6.3	34.4	43.8	15.6	
	電子オルガンアンサンブル演習（クラシック）A	演習	7		○	100		100	57.1	42.9			
	電子オルガンアンサンブル演習（クラシック）B	演習	7		○	100		100	42.9	42.9	14.3		
	電子オルガンアンサンブル演習（クラシック）C	演習	15		○	100		100	80.0	13.3		6.7	
	電子オルガンアンサンブル演習（クラシック）D	演習	15		○	93.3		93.3	20.0	53.3	13.3	6.7	6.7
	電子オルガンアンサンブル演習（ポピュラー）A	演習	13		○	100		100	69.2	7.7	15.4	7.7	
	電子オルガンアンサンブル演習（ポピュラー）B	演習	13		○	100		100	69.2	23.1	7.7		
	電子オルガンアンサンブル演習（ポピュラー）C	演習	15		○	100		100	60.0	33.3	6.7		
	電子オルガンアンサンブル演習（ポピュラー）D	演習	15		○	100		100	46.7	33.3	13.3	6.7	
	音楽指導法（電子オルガン）Ⅰ	演習	11	○	○	90.9		90.9	36.4	18.2	36.4		9.1
	音楽指導法（電子オルガン）Ⅱ	演習	11	○	○	72.7		72.7		36.4	27.3	9.1	27.3
	電子音響機器演習Ⅰ	演習	64	○	○	95.3		95.3	76.6	10.9	1.6	6.3	4.7
	電子音響機器演習Ⅱ	演習	62	○	○	88.7		88.7	71.0	12.9	1.6	3.2	11.3
	作曲法Ⅲ	演習	58	○	○	93.1		93.1	22.4	32.8	25.9	12.1	6.9
	作曲法Ⅳ	演習	55	○	○	83.6		83.6	3.6	34.5	29.1	16.4	16.4
	ミュージカルテーマ研究Ⅰa	講・演・実	13		○	100		100		38.5	61.5		
	ミュージカルテーマ研究Ⅰb	講・演・実	13		○	100		100	23.1	46.2	30.8		
	ミュージカルテーマ研究Ⅱa	講・演・実	13		○	100		100	15.4	30.8	46.2	7.7	
	ミュージカルテーマ研究Ⅱb	講・演・実	14		○	92.9		92.9	7.1	42.9	28.6	14.3	7.1
	声楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅰa	講・演・実	32	○	○	100		100	12.5	43.8	31.3	12.5	
	声楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅰb	講・演・実	32	○	○	100		100	6.3	37.5	37.5	18.8	
	声楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅱa	講・演・実	34	○	○	94.1		94.1	5.9	14.7	55.9	17.6	5.9
	声楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅱb	講・演・実	34	○	○	94.1		94.1	2.9	41.2	38.2	11.8	5.9
	器楽テーマ研究（ジャズ）Ⅰa	講・演・実	20		○	100		100		85.0	15.0		
	器楽テーマ研究（ジャズ）Ⅰb	講・演・実	20		○	100		100	5.0	75.0	15.0	5.0	
	器楽テーマ研究（ジャズ）Ⅱa	講・演・実	20		○	100		100	5.0	95.0			
	器楽テーマ研究（ジャズ）Ⅱb	講・演・実	20		○	100		100	25.0	65.0	10.0		
	器楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅰa	講・演・実	26	○	○	100		100	3.8	50.0	46.2		
	器楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅰb	講・演・実	26	○	○	100		100		53.8	38.5	7.7	
	器楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅱa	講・演・実	26	○	○	100		100	11.5	30.8	50.0	7.7	

	器楽テーマ研究（ポピュラー）Ⅱ b	講・演・ 実	26	○		○	100		100	7.7	30.8	42.3	19.2	
	器楽テーマ研究（電子オルガン）Ⅰ a	講・演・ 実	17	○		○	100		100	17.6	82.4			
	器楽テーマ研究（電子オルガン）Ⅰ b	講・演・ 実	17	○		○	100		100	23.5	70.6	5.9		
	器楽テーマ研究（電子オルガン）Ⅱ a	講・演・ 実	17	○		○	100		100	17.6	58.8	23.5		
	器楽テーマ研究（電子オルガン）Ⅱ b	講・演・ 実	17	○		○	100		100	11.8	41.2	41.2	5.9	
	ジャズ奏法	演習	13	○		○	76.9		76.9		38.5	38.5		23.1
	ジャズ歌唱法	演習	10	○		○	90.0		90.0		40.0	50.0		10.0
	ベーシック・キーボードⅠ	演習	25	○		○	92.0		92.0	8.0	24.0	56.0	4.0	8.0
	ベーシック・キーボードⅡ	演習	25	○		○	88.0		88.0	16.0	24.0	32.0	16.0	12.0
	キーボード演習Ⅰ	演習	41	○		○	82.9		82.9	34.1	22.0	24.4	2.4	17.1
	キーボード演習Ⅱ	演習	40	○		○	67.5		67.5	30.0	12.5	20.0	5.0	32.5
	バンド・パフォーマンスⅠ	演習	78			○	96.2	1.3	97.4	6.4	43.6	42.3	5.1	2.6
	バンド・パフォーマンスⅡ	演習	76			○	97.4		97.4	1.3	50.0	30.3	15.8	2.6
	ジャズ・ポピュラー音楽講座Ⅰ	講義	57	○		○	91.2		91.2	7.0	26.3	28.1	29.8	8.8
	ジャズ・ポピュラー音楽講座Ⅱ	講義	57	○		○	87.7	1.8	89.5		33.3	31.6	24.6	10.5
	MIDIシステム・テクノロジーAⅠ	演習	78	○		○	98.7		98.7	15.4	34.6	35.9	12.8	1.3
	MIDIシステム・テクノロジーAⅡ	演習	79	○		○	92.4		92.4	15.2	22.8	36.7	17.7	7.6
	MIDIシステム・テクノロジーBⅠ	演習	42	○		○	83.3		83.3	2.4	33.3	26.2	21.4	16.7
	MIDIシステム・テクノロジーBⅡ	演習	39	○		○	84.6		84.6	5.1	23.1	38.5	17.9	15.4
専門教育 音楽専攻	器楽テーマ研究AⅠ	講・演・ 実	2	○		○	100		100			100		
	器楽テーマ研究AⅡ	講・演・ 実	2	○		○	100		100			100		
	器楽テーマ研究CⅠ	講・演・ 実	2	○		○	100		100			50.0	50.0	
	器楽テーマ研究CⅡ	講・演・ 実	3	○		○	66.7		66.7			33.3	33.3	33.3
	声楽Ⅰ（S）a	演習	1	○		○	100		100		100			
	声楽Ⅰ（S）b	演習	1	○		○	100		100			100		
	声楽Ⅱ（S）a	演習	1	○		○	100		100			100		
	器楽Ⅱ（S）a（リコーダー）	演習	1	○		○			0					100
	器楽Ⅱ（S）b（リコーダー）	演習	1	○		○			0					100
	ステージ総合表現A	演習	1			○	100		100		100			
	ステージ総合表現B	演習	1			○			0					100
	ポピュラー音楽基礎講座Ⅰ	講義	2	○		○	50.0		50.0		50.0			50.0
	ポピュラー音楽基礎講座Ⅱ	講義	2	○		○	50.0		50.0			50.0		50.0
	デスクトップ・ミュージックAⅠ	演習	2		○	○	50.0		50.0		50.0			50.0
	ジャズ・ポピュラーリズム演習Ⅰ	演習	1	○		○	100		100	100				
	ジャズ・ポピュラーリズム演習Ⅱ	演習	1	○		○	100		100				100	
	ポピュラーコード演習Ⅰ	演習	1	○		○	100		100				100	
	ポピュラーコード演習Ⅱ	演習	1	○		○			0					100
	ピアノ指導法A	演習	1	○		○	100		100			100		
	ポピュラー・ピアノ演奏法Ⅰ	演習	1	○		○			0					100
	ポピュラー・ピアノ演奏法Ⅱ	演習	1	○		○			0					100
教職科目	教職入門セミナーⅠ	講義	67	○		○	100		100	38.8	43.3	14.9	3.0	
	教職入門セミナーⅡ	講義	67	○		○	97.0		97.0	11.9	26.9	43.3	14.9	3.0
	教育学概論	講義	73	○			87.7		87.7	26.0	23.3	19.2	19.2	12.3
	教育心理学	講義	76	○		○	92.1		92.1	43.4	31.6	17.1		7.9
	青年心理学	講義	17	○		○	58.8		58.8	11.8	11.8	23.5	11.8	41.2
	音楽科指導法	講義	71	○	○	○	91.5		91.5	38.0	22.5	18.3	12.7	8.5
	音楽科教材研究A（合唱指導法）	講義	5			○	40.0		40.0		20.0	20.0		60.0
	音楽科教材研究A（ギター指導法）	講義	2			○	100		100	100				

	音楽科教材研究A（リコーダー指導法）	講義	7	○		○	100		100	71.4	28.6			
	音楽科教材研究A（邦楽指導法）	講義	3			○	100		100		66.7	33.3		
	音楽科教材研究A（創作指導法）	講義	4	○	○	○	75.0		75.0	75.0				25.0
	音楽科教材研究B（合唱指導法）	講義	6			○	100		100	50.0	50.0			
	音楽科教材研究B（リコーダー指導法）	講義	3	○	○	○	100		100	100				
	音楽科教材研究B（邦楽指導法）	講義	2			○	100		100		100			
	音楽科教材研究B（創作指導法）	講義	2	○	○	○	100		100	100				
	特別活動の研究	講義	59		○	○	100		100	10.2	64.4	23.7	1.7	
	道德教育論	講義	61	○	○	○	91.8		91.8	8.2	24.6	31.1	27.9	8.2
	教育方法論	講義	68		○	○	92.6		92.6	51.5	33.8	4.4	2.9	7.4
	生徒指導論Ⅰ（教育相談を含む。）	講義	70		○	○	88.6		88.6	25.7	32.9	22.9	7.1	11.4
	生徒指導論Ⅱ（進路指導を含む。）	講義	64	○	○	○	98.4		98.4	18.8	25.0	25.0	29.7	1.6
	総合演習	演習	60			○	100		100	76.7	21.7		1.7	
	教育実習の研究	講義	59		○	○	100		100	11.9	72.9	13.6	1.7	
	教育実習	実習	58		○	○	100		100	13.8	50.0	34.5	1.7	
	教育学特論	講義	8			○	100		100	50.0	37.5		12.5	
	同和教育論	講義	4	○		○	75.0		75.0	25.0	25.0	25.0		25.0
単位 科目 目 互 換	音楽形式学	講義	2	○		○	50.0		50.0			50.0		50.0
	楽器学	講義	1	○		○	100		100				100	
	総合ソルフェージュ	演習	1	○		○	100		100	100				

試：筆記試験・実技試験、レ：レポート、平：平常点

※当該科目が閉講の科目及び履修登録者が0人の科目は除く。

<専攻科>

科目 の 種 別	授業科目名	授業 形態	履修 人員	主な単位の 認定方法			単位取得状況（％）			最終の評価（％）				
				試	レ	平	本試(人)	再試	％	秀	優	良	可	不可
専門教育 共通科目	コンピューター音楽演習	演習	9		○	○	6		66.7	11.1	33.3	22.2	0.0	33.3
	音楽史特論Ⅰ（ジャズ音楽論）	講義	6	○			4		66.7	0.0	33.3	33.3	0.0	33.3
	音楽史特論Ⅰ（鍵盤）	講義	7	○		○	7		100	14.3	42.9	42.9	0.0	0.0
	音楽史特論Ⅰ（オペラ）	講義	8	○	○	○	5		62.5	0.0	0.0	25.0	37.5	37.5
	音楽史特論Ⅱ（オペラ）	講義	8	○	○	○	5		62.5	0.0	0.0	12.5	50.0	37.5
	音楽史特論Ⅱ（リート）	講義	4	○		○	4		100	25.0	25.0	50.0	0.0	0.0
	ポピュラー音楽概論	講義	9		○	○	8		88.9	0.0	11.1	22.2	55.6	11.1
	鍵盤楽器特修	実技	9	○		○	8		88.9	11.1	44.4	33.3	0.0	11.1
	吹奏楽指導法	演習	10		○	○	8		80.0	10.0	10.0	40.0	20.0	20.0
	AV機器概論＜前期＞	講義	12			○	8		66.7	33.3	25.0	8.0	0.0	33.3
	AV機器概論＜後期＞	講義	1			○	1		100	100	0.0	0.0	0.0	0.0
	音楽社会活動実習	実習	7		○		2		28.6	0.0	28.6	0.0	0.0	71.4
	外国語Ⅰ（英会話）	演習	15	○		○	15		100	0.0	33.3	26.7	40.0	0.0
	外国語Ⅱ（ドイツ語Ⅲ）	演習	1	○		○	0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100
	外国語Ⅱ（イタリア語Ⅰ）	演習	2	○		○	1		50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	50.0
	外国語Ⅱ（イタリア語Ⅲ）	演習	1	○	○	○	1		100	0.0	0.0	100	0.0	0.0
	外国語Ⅱ（英語Ⅱ）	演習	1	○		○	1		100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	外国語Ⅱ（英語Ⅲ）	演習	3	○		○	2		66.7	0.0	33.3	0.0	33.3	33.3
	外国語Ⅱ（外国語専門Ⅱ英語）	演習	1	○	○	○	1		100	0.0	0.0	100	0.0	0.0
	外国語Ⅱ（英語Ⅰ）	演習	5	○		○	5		100	20.0	80.0	0.0	0.0	0.0
	コンサート・プロデュース	演習	24	○		○	24		100	41.7	58.3	0.0	0.0	0.0
	音楽療法（応用）	講義	7	○	○	○	5		71.4	0.0	57.1	14.3	0.0	28.6
	音楽療法（実践）	演習	6		○	○	4		66.7	0.0	66.7	0.0	0.0	33.3
作 曲 専 門 専 攻 科 目	作曲Ⅰ	実技	1			○	1		100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	作曲理論Ⅰ	実技	1			○	1		100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	修了研究		1		○		1		100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	作品分析	演習	1		○	○	1		100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	対位法作品研究	演習	1		○	○	1		100	0.0	0.0	100	0.0	0.0
	デスクトップ・ミュージック編曲法	演習	1		○	○	1		100	0.0	100	0.0	0.0	0.0

専門科目 声楽専攻	声楽 A	実技	8	○	○	8	100	37.5	25.0	37.5	0.0	0.0
	声楽 B	実技	8	○	○	8	100	37.5	37.5	25.0	0.0	0.0
	修了研究		4	○		4	100	0.0	25.0	75.0	0.0	0.0
	修了研究 (ポピュラー・ヴォーカル)		3	○		3	100	0.0	33.3	66.7	0.0	0.0
	ドイツリート演習	演習	3	○	○	3	100	33.3	33.3	33.3	0.0	0.0
	日本歌曲演習	演習	3	○	○	3	100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	ダンス演習 S I	演習	2	○	○	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100
	声楽資料研究	演習	4	○		4	100	100	0.0	0.0	0.0	0.0
	舞台制作実習 S	実習	4		○	4	100	0.0	0.0	25.0	75.0	0.0
	舞台制作実習 S	実習	3		○	3	100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	声楽アンサンブル	演習	4	○	○	4	100	100	0.0	0.0	0.0	0.0
	ヴォーカル・アンサンブル	演習	3	○	○	3	100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	ダンス演習 S II	演習	2	○	○	1	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	50.0
	ダンス演習 S II	演習	2	○	○	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100
専門科目 器楽専攻	器楽 A	実技	16	○	○	16	100	6.3	87.5	6.3	0.0	0.0
	器楽 B(基礎)	実技	6	○		6	100	0.0	83.3	16.7	0.0	0.0
	修了研究 (ピアノ)		9	○		9	100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	修了研究 (電子オルガン)		1	○		1	100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	修了研究 (管楽器)		3	○		3	100	0.0	66.7	33.3	0.0	0.0
	修了研究 (弦楽器)		1	○		1	100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	修了研究 (ジャズ)		2	○		2	100	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0
	ピアノ・アンサンブル A (連弾)	演習	9	○	○	9	100	100	0.0	0.0	0.0	0.0
	ピアノ・アンサンブル B (2 台のピアノ)	演習	8	○	○	8	100	75.0	25.0	0.0	0.0	0.0
	ピアノ作品構造研究	演習	8	○	○	7	87.5	0.0	50.0	37.5	0.0	12.5
	器楽アンサンブル S	演習	1		○	1	100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	電子オルガン・アンサンブル (ポピュラー)	演習	1		○	1	100	100	0.0	0.0	0.0	0.0
	器楽編曲法 S (ポピュラー)	演習	1		○	1	100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	器楽指導実習	実習	1		○	1	100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	合奏 (A) S【管打】	演習	3		○	3	100	66.7	0.0	33.3	0.0	0.0
	オーケストラ	演習	2		○	2	100	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0
	管打楽器リベア実習 (コラボレートスタジオ)	実習	2		○	2	100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	管打楽器リベア実習	実習	3		○	3	100	0.0	66.7	0.0	33.3	0.0
	室内楽研究【Gu】	演習	1		○	1	100	0.0	0.0	100	0.0	0.0
	弦楽作品構造研究	演習	1	○	○	1	100	0.0	100	0.0	0.0	0.0
	ジャズアンサンブル (バンド・パフォーマンズ)	演習	2		○	2	100	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0
	ピアノ初歩教材研究	講義	8		○	8	100	87.5	0.0	12.5	0.0	0.0
	吹奏楽 S	演習	3		○	3	100	66.7	0.0	0.0	33.3	0.0
	ポピュラー音楽研究 S (声楽・器楽専攻)	演習	5		○	5	100	0.0	100	0.0	0.0	0.0

試：筆記試験・実技試験、レ：レポート、平：平常点

(2) 学科長等がそれぞれの学科について、単位認定の方法、単位の取得状況及び担当教員による評価の現状についてどのように受け止めているかを記述して下さい。

「大阪音楽大学短期大学部学則」第 37 条により、適切な基準によって単位の認定を行うべく成績評価の方法を規定している。

本学の履修システムでは「A 群科目」(大学が受講曜・時限を指定する)、ついで「B 群科目」(学生が専攻する実技の個人レッスンで学生と担当教員との日程調整によって受講曜・時限を決定する)の時間割を決定する。最後に「C 群科目」(基本的に学生の選択によって受講曜限を決定する)を登録する。C 群科目がその学生個人の A、B 群の履修状況(時間割)による制約を受け、あるいは受講定員の制限により、その学生の当初の受講計画とは異なった授業(あるいは同種の科目であっても担当者が異なる)を受講することになる場合もある。この点について学生の側から見て評価基準や方法の差異によって不公平が生じないよう、評価の客観的な妥当性についてさらに精査・点検する必要がある。また個人レッスン主体の実技科目と講義・演習の科目との間に性格の相違はあるものの、本学の大局的

な教育理念に照らし、今後共通の評価基準、評価方法を検討するなど組織的な取り組みが必要であると考えてきた。これらの視点から単位認定率の検証を行い、成績評価の厳密化と評価システムの公正明確化を図るべく 2005（平成 17）年度に「成績評価システム・プロジェクト」を立ち上げ、研究と検討を続けている。

（3）学長等は、単位認定の方法、単位の取得状況及び担当教員による評価の現状について、短期大学全体の状況をどのように受け止めているかを記述して下さい。

単位認定と成績評価については「教員便覧」及び「履修規程」を専任・非常勤の全教員に配布し、それに基づいて概ね公平かつ客観的に行われているものと判断している。本学の開講科目は科目数も多く、専門科目と教養科目の間だけではなく、専門領域による授業形態の多様性がきわめて広範に及んでいるため、成績評価の一律化にはなじまない面を多く持つことも事実である。ただ特に実技レッスンなどの専攻科目に関しては長期にわたる単位認定と成績評価の経験により、近年学生に対する試験結果の講評を実施し、これによって成績評価のより高い客観性と公平性を確保し、学生の学習意欲向上に寄与している。今後も運営会議を中心にして成績評価の厳格化と客観性・公平性を研究し、実践していきたいと考えている。

【授業に対する学生の満足度について】

（1）各授業について、終了後に「学生の満足度」の調査を実施していればその調査の概要を記述して下さい。また調査票の様式等を訪問調査の際にご準備下さい。

学生の授業満足度調査については、Ⅱ領域「教育改善への努力について」（P27）においてその実施状況を報告した。ここでは各専攻、共通科目についての調査結果の概略と、長所（満足すべき点）と問題点、改善・改革を要する点について報告する。学生による授業評価アンケートの総合的満足度は総じて高く、特にレッスンについての学生による満足度は十分高いと言える。下表には、2004～2006（平成 16～18）年度の間に実施された「学生及び教員による授業評価アンケート」において得られた学生からの回答結果を示す。詳細は、学内公表した冊子により教職員及び学生に報告を行った。ここではアンケート最終選択設問（設問 23：総合的に判断して、この授業は満足できましたか。）にある学生による授業に対する総合的満足度を示す。

学生による「授業に対する総合的満足度」

2004～2006（平成 16～18）年度

年度	授業形態区分	平均値 (5段階)	回答率 (%)					ノーマーク・ 無効数	有効 回答枚数	回答枚 数
			A	B	C	D	E			
2004 年度	講義・演習	4.2	47.0	35.5	12.7	3.3	1.5	79	4083	4162
	レッスン	4.6	72.3	20.0	5.0	1.8	1.0	10	401	411
2005 年度	講義・演習	4.4	57.8	28.5	9.3	2.6	1.7	28	3701	3729
	レッスン	4.5	68.7	21.1	5.5	3.0	1.7	9	402	411
2006 年度	講義・演習	4.4	59.4	28.3	8.7	2.4	1.1	34	3601	3635
	レッスン	4.7	73.5	20.4	4.5	1.3	0.3	10	377	387
回答記号										
A：強くそう思う（平均値計算値：5）										
D：そうは思わない（平均値計算値：2）										
B：そう思う（平均値計算値：4）										
E：強くそう思わない（平均値計算値：1）										
C：どちらともいえない（平均値計算値：3）										

対象授業：2004～2006（平成 16～18）年度第 2 セメスター・第 4 セメスター開講の講義・演習、レッスン

(2)担当教員が授業終了後の学生の満足度に配慮しているかについて、学科長等が現状をどのように受け止めているかを記述して下さい。

担当教員は授業終了後の学生の満足度に関心を持っている。学生による授業評価アンケートの結果は総じて高い満足度を表しており、教育における良好な関係が保たれていると言えるが、担当各教員は現状に満足するのではなく、より満足度を高める努力を行っていると考えている。特に専門実技科目を中核に据えている本学においては平均値だけではなく、学生個々人の能力と知見の向上を教育目標の重点におかなければならない。このため就学条件が公平で好適なものであることを学生満足度の向上に欠かせない条件として考え、2007（平成 19）年度はレッスン室の改善や新たにオープン・レッスン制度の実施などの計画を、実施する予定である。

(3)学長等は短期大学全体の現状をどのように受け止めているかを記述して下さい。

音楽単科でかつ大学併設の短期大学であるということから、学生は専門実技の授業（レッスン）の充実度に極めて大きな関心と期待を寄せており、本学にはそれに応える充実した教育環境があると考えている。

しかし高等教育機関としての短期大学の意味を鑑みるに、音楽実技専門教育に限らず、学生に対して隣接専門科目や人間形成に必要な教養教育を如何にして有益なものと認識させるか、また学生の興味をそぐことなく如何に十分に修得させるか、即ち本学の目標とするところにどのようにして学生を導くかについてが今後の課題で、各種プロジェクトや、委員会等で活発に議論を交わし、研究を続けている。

【退学、休学、留年等の状況について】

(1)過去3ヶ年（平成 16 年度～18 年度）の退学、休学、留年等の数を、次の表を例にして学科等ごとに記載し、学科等の状況を明らかにして下さい。

音楽科・専攻科の退学者等一覧表（人数）

2007（平成 19）年 3 月 31 日現在

< 音楽科 >

	2004 年度入学				2005 年度入学				2006 年度入学				備考
	作曲	声楽	器楽	J P	作曲	声楽	器楽	J P	作曲	声楽	器楽	J P	
入学者数	9	28	160	115	3	27	※132	125	5	29	117	111	
うち退学者数	2	5	10	19	0	2	※18	17	0	0	7	6	
うち休学者数	1	0	3	2	0	0	2	2	0	0	3	1	
休学者のうちの復学者数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
うち留年者数（通常の学年進行によらない者）	0	0	0	0	0	4	7	7	0	0	0	0	
卒業者数	6	23	147	94	3	21	105	99					

< 専攻科 >

	2004 年度入学			2005 年度入学			2006 年度入学			備考
	作曲	声楽	器楽	作曲	声楽	器楽	作曲	声楽	器楽	
入学者数	3	5	23	1	7	7	1	7	16	

うち退学者数	0	0	1	0	0	0	0	0	0
うち休学者数	0	0	0	0	0	0	0	0	0
休学者のうちの復学者数	0	0	0	0	0	0	0	0	0
うち留年者数（通常の学年進行によらない者）	0	0	0	0	1	0	0	0	0
卒業生数	3	5	22	1	6	7	1	7	16

* 卒業生数は各入学年度の学生が2007（平成19）年3月31日現在において卒業もしくは卒業している総数。

* 退学者の中に除籍者含む。

* 休学者が2007（平成19）年3月31日付で退学した場合は、退学者への算入を優先する。

* 留年者数は2007（平成19）年3月31日現在において留年している人数。但し休学している場合は、休学者数に算入する。

* 休学については2007（平成19）年3月31日現在において休学している人数。

* 2006（平成18）年度入学者の留学者数については、2年生への進級留年の人数。但し休学している学生がある場合は、休学者に算入する。

* ※（2005（平成17）年度入学者数及び退学者数）には転入学（大学1年から短大1年への転入学）1名含む。

(2)退学者の退学理由割合、退学理由の最近の傾向及び退学者、休学者（復学者を含む）及び留年者に対する指導（ケア）の現状について学科等ごとに記述して下さい。

本学における退学、休学、留年等の理由について、近年の傾向を概括的に報告する。

第一に、「一身上の都合」に分類される者が増加傾向にある。これは、学生の就学あるいは修学に関する困難要因が多様化・複合化していることの反映であると思われる。

第二に、「経済的理由」による退学・休学の潜在的増加傾向について指摘しておきたい。本学の場合、そもそも経済的な理由で4年制でなく短期大学を選択する学生が一定数存在するが、昨今の経済情勢のもとで、入学後に様々な事情で家計が行き詰まるケースが増えている。本学では、独自の緊急的奨学金制度の活用等様々な形で就学を継続するための支援策をとることにより、退学・休学、除籍を食い止める努力を行っているが、今後奨学制度のさらなる整備も必要になる可能性がある。

退学者の理由の割合は、従来は経済的理由が最大であったが、近年では健康上の理由や一身上の都合あるいは進路変更など多様化してきている。

休学者に対しては、休学に至るまでの学生相談、及び復学時に履修等に係る特別ガイダンスを実施している。また留年者に対しては履修等に係る特別ガイダンスを実施し、卒業要件科目の優先的履修登録などを実施している。

(3)退学、休学、留年等の現状を、学科長等がどのように受け止めているかを学科等ごとに記述して下さい。

退学、休学、留年に対する基本的な観点としては、事後的な対応にとどまらず、日常的な指導助言が重要であると考えている。2007（平成19）年度の新入生に対しては、新たに学長提案により専任教員によるグループ・オリエンテーションを実施した。現在運営会議においてその成果と問題点を検証しているが、教員による指導助言は入学時にとどまらず継続して行っていきたいと考えている。

(4)学長等は、短期大学全体の現状をどのように受け止めているかを記述して下さい。

一般的に志願者が減少する方向にあることが避けられない状況の中で、専門的能力（特に基礎的知識や技能）に差異のある学生が入学してきている一方、経済的事情や、他大学卒業

後、音楽の専門能力を磨こうと入学してきた意識も能力も高い学生もいるなど、学生の範疇を一つに絞れないという状況が見られる。このような意識・能力・志向の多様な学生にどう対処するかはどの大学にも共通する問題であるが、本学も例外ではない。基本的にはこれを教育システムによって克服できる問題と捉え、本年度から開始した教員によるグループ・オリエンテーションのように教職員による学生相談や学生指導の体制をさらに推進するとともに、専攻、コース、カリキュラムなど、総合的に検討を加え、2009（平成 21）年度には抜本的改革を加えた改組を考えている。この中では、専門はもとより、専門以外の教養教育について、学生が社会で有用な人材となるような人間力を養うための教育を行えるよう意を注いでいる。

【資格取得の取組みについて】

(1)《Ⅱ教育の内容》の【教育課程について】(4)(9 ページ)で報告頂いた取得が可能な免許・資格、また教育課程とは別に取得の機会を設けている免許・資格の取得状況（取得をめざした学生数、取得者数、取得割合等）を学科等ごとに示して下さい。

中学校教諭二種免許状（音楽）の取得状況については下表に示す。

また、下表に中学校教諭二種免許状（音楽）を除いた資格について 2005（平成 17）年度の取得状況を示す。「音楽指導グレード」4、5 級については講習を受けた人数は把握できているものの、実際の取得者の把握は行っていない。まだ開講間もない資格ということもあり、今後は、取得状況を把握できるように、早急に調査方法を検討する必要がある。

教育職員免許状取得状況

2006（平成 18）年度

	作曲	声楽	器楽			ジャズ・ポピュラー	短大 小計	専攻科	合計
			ピアノ	管弦打	箏				
卒業者（人）	3	22	66	43	0	110	244	25	269
中学二種免許状取得者（人）	2	6	36	3	0	1	48	0	48
取得割合（％）	66.7	27.2	54.5	7.0		1.0	19.7	0.0	17.8

各種資格取得状況

2006（平成 18）年度

		作曲	声楽	器楽			ジャズ・ポピュラー	短大 小計	専攻科	合計	備考
				ピアノ	管弦打	箏					
パソコン資格 （Word 初級）	取得希望者	0	0	2	1	0	2	5	0	5	
	取得者	-	-	1	1	-	2	2	0	2	
	割合（％）			50.0	100		100	40.0		40.0	
パソコン資格 （Excel 初級）	取得希望者	0	1	1	0	0	1	3	0	3	
	取得者	-	1	1	-		0	2	-	2	
	割合（％）		100	100			0.0	66.7		66.7	
ホームヘルパー 2 級	取得希望者										
	取得者							0		0	注 1
	割合（％）										
秘書検定 2 級	取得希望者	0	1	4	1	0	1	7	1	8	
	取得者						1				注 2
	割合（％）		0.0	0.0	0.0		100	0.0	0.0	0.0	
音楽指導グレード 5 級	取得希望者	0	1	8	0	0	0	9	1	10	
	取得者										
	割合（％）		0.0	0.0				0.0	0.0	0.0	
音楽指導グレード 4 級	取得希望者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	取得者										注 3
	割合（％）										

注 1：2006（平成 18）年度は開講せず。

注 2：JP 以外の専攻生についてはアンケート未回答のため取得状況不明。

注3：取得者数は不明である。

専攻科では、修了後、所定の単位を取得し、「独立行政法人 大学評価・学位授与機構」の審査に合格すれば、学位「学士（芸術学）」が取得できる。これまでの資格取得者は、2002（平成14）年度2人、2005（平成17年）度1人である。

また、音楽科の資格取得のための講座は短大専攻科の学生も受講できる。

(2) 今後導入を検討している免許・資格があれば記述して下さい。

2007（平成19）年度に新たに導入を予定している免許・資格はないが、今後とも免許・資格についての調査研究・開拓を続け、学生の就職の支援としたい。

【学生による卒業後の評価、卒業生に対する評価について】
 (1) 学科等ごとに専門就職（当該学科等で学習した分野に関連する就職）の状況（専門就職数、割合等）について記述して下さい。また学科等ごとに専門就職先からの卒業生に対する評価について何か文書や資料があれば参考資料として準備して下さい。

専門就職先への進路状況

2006（平成18）年度卒業生

	作曲	声楽	器楽			ジャズポピュラー	音楽科小計	専攻科	合計
			ピアノ	管弦打	箏				
卒業生(人)	3	22	66	43	0	110	244	25	269
就職希望者(人)	1	10	31	17		58	117	未調査	
音楽系就職(人)	0		12	3		13	28	10	38
卒業生中の割合(%)	0.0	0.0	18.2	7.0		11.8	11.5	40.0	14.1
その他就職(人)	1	1	15	4		18	39	4	43
卒業生中の割合(%)	33.1	4.5	22.7	9.3		16.4	16.0	16.0	16.0
進学(人)	2	15	24	15		9	65	3	68
卒業生中の割合(%)	66.7	68.2	36.4	34.9		8.2	26.6	12.0	25.3
その他(人)		6	15	21		70	112	8	120
卒業生中の割合(%)	0.0	27.3	22.7	48.8		63.6	45.9	32.0	44.6

現状においては特定企業への就職という形態をとらず、卒業後も音楽活動を行いながら自己研鑽に励んでいる卒業生の割合が一般大学に比して高いように思われる。演奏や創作などの音楽活動は特定の機関に所属しないで自立している個人事業主、即ち専門就職とも考えられる。しかしながら社会には、プロデュースやマネジメントなどの領域において音楽に関する専門技術を学んだ人材が求められる確かな要望があり、新しい進路の開拓を含め専門就職率の向上は大きな課題である。

専攻科では主に実技の研鑽・追求が主体となっており、入学生もまたその事を大きな目的としている。そのため、専門就職が音楽科より多くなっている。

(2) 卒業生に対する就職先（専門就職に限らない）及びその他の進路先（編入先等）からの評価をどのように受け止めているかについて、短期大学全体については学長等が、学科等については学科長等が記述して下さい。

1 就職先からの評価

就職先からの評価については、これを真摯に受け止め、卒業生を社会に送り出すにあたってさらに良い評価が得られるよう、各専攻、各部署で、在学生の指導を改善するために

役立てている。本学出身者は音楽指導者として企業系の音楽教室を活動の場としているケースが多く、特にシステマティックに運営される教室等からの評価については、今後の在学生教育に対して有益であると考え、指導法の教育に生かすなど大いに参考としている。また、いわゆる一般企業からの評価については、進路・就職と社会活動を支援する学校法人全体の「エクステンション・センター」を中心に行っているキャリア・デザイン教育などに役立てている。

2 編入先からの評価

ほとんどの編入先が本学に併設される大阪音楽大学音楽学部であり、3年次編入試験を実施し、入試要項に即し厳正な選抜を行っている。専門分野は勿論のこと、専門以外の分野についても優秀な成績を修め、且つ、学習に対する積極性などについても高いレベルで満たしている者が編入試験に合格している状態にあり、総じて評価は高い。同一キャンパス内にある利点を生かし、大学への編入者の質を一層高めるべく、編入先の音楽学部からの評価を常に検討し、本学における教育の改善に役立てている。また編入後も同一キャンパスで学修を継続できることから、本学と編入先である音楽学部とは内容的にも常に連携を保つことが可能となり、効果を上げている。近年、他大学の保育・教育分野等からの編入者推薦依頼もあり、本学卒業生の可能性を広げるものとして、連携を視野に入れ検討を進めている。

(3)卒業生に対して「学生時代についてのアンケート(卒業後評価等)」等を実施している場合はその概要とその結果を記述して下さい。また教育の実績や効果を確認するための卒業生との接触、同窓会等との連携等を行っている場合もその取組みの概要と結果について記述して下さい。

○ 卒業生アンケート

2005(平成17)年7月に1994(平成6)、1999(平成11)、2004(平成16)年の3ヵ年度の卒業生を対象としたアンケートを実施し、300件以上の回答を得た。アンケート結果は2005(平成17)年9月に報告書を作成し、法人公式ホームページに公表した。

本アンケート調査における、在学中の学生生活に対する総合的満足度は3.99(5段階評価)であった。この中では専門分野のレッスンや講義・演習科目の充実とともに、整った環境や施設・設備が高い満足度を与えていることが示された。また在学中の満足度が高いほど、さらなる充実や学生サービスの向上を求める声が大きいくとも判明した。また就職支援として、在学中に就職への取組みを促すことや就職情報や資格取得支援など、専門教育以外の面での充実を求める声が多かった。卒業後の進路は「進学」(30%)、「就職」(24%)、「教育」(23%)、「演奏」(8%)、「その他」(15%)であった。この状況は本学のみならず日本の音楽大学共通の研究課題である。また、卒業から間もない卒業生の約60%が、いわば兼業的に自主的な音楽活動を続けていることが注目される。

○ 同窓会との連携

同窓会「幸楽会(こうがくかい)」は3万人を超える会員数を持ち、独自の組織体として運営されている。幸楽会という名称は本学の創設者永井幸次にちなんだものである。本学並びに併設大学の卒業生によって組織される幸楽会は全国各地に20支部をもち、海外支部もドイツ、フランス、イタリアに置かれている。これらの支部を通じ卒業生相互の連携を

図っている。同窓会主催の「幸楽会コンサート」は同窓会研究発表会として、卒業直後の若手会員にとっては音楽界への登竜門となっている。

また、2004（平成 16）年以後、同窓会の総会を大学で実施されるようになり、総会後の懇親会に理事長や学長が招かれ、卒業生からの意見や要望を直接的な形で聞くこと、などにより卒業生との連携が図られている。

(4)卒業生が社会からどのように評価されているか、学科長等、学長等は現状をどのように受け止めているかを記述して下さい。

本学卒業生は、全体として能力も高く、素直で率直であると評価されている。しかし、本学卒業者に限ったことではないが、時に音楽に関する基礎的知識などの不足を指摘されることもあり、今後は専門教育の充実とともに、卒業生が関わるであろう仕事や地域社会の中での位置や活動などに対する高い評価を得るためにも、音楽基礎教育の徹底を図ることが必要であると考えている。そのためには多様性を崩さず、学生個々の可能性を引き出す教育システムの構築が不可欠であり、これを展開すべく様々な委員会やプロジェクトで検討を続けている。

【特記事項について】

(1)この《Ⅳ教育目標の達成度と教育の効果》の領域で示した評価項目や評価の観点の他に、教育目標の達成度と教育の効果について努力していることがあれば記述して下さい。

特になし。

(2)特別の事由や事情があり、評価項目や評価の観点が求めることが実現（達成）できないときはその事由や事情を記述して下さい。

特になし。

V 学生支援

【入学に関する支援について】

- (1) 入学志願者に対し、短期大学は建学の精神・教育理念や設置学科等の教育目的・教育目標、求める学生像をどのような方法、手段で明示しているかを記述して下さい。なおそれらが記載されている短期大学案内等の印刷物を添付して下さい。

演奏技術の向上とともに、新たな音楽文化を創出できる人材を送り出すことこそが使命・目的であるとする建学理念に基づき、入学者選抜方針は、学生が本学で学修を希望する専門に対する適性の有無と資質についての選考・評価、及び本学で学びたいとする積極的な姿勢を重視している。入学志願者に対して本学の建学の精神・教育理念や、学科、専攻等の教育目的、教育目標については「大学案内」及び法人公式ホームページ上に示している。

- (2) 入学志願者に対し、入学者選抜の方針、選抜方法(推薦、一般、AO入試等)をどのような方法、手段で明示しているかその概要を簡潔に記述して下さい。なおそれらが記載されている募集要項等の印刷物を参考資料としてご準備下さい。

推薦入試・一般入試における入学者選抜の方針及び選抜方法は、毎年6月に発行する次年度の入学試験要項に明示している。また2007(平成19)年には「進学ガイドブック」として、過去の入試問題など志願者向けの関連情報を掲載した冊子を発行し、選抜方針や方法についてのより詳しい情報を提供するように努力している。また本学の教育目標や教育内容についての理解を深めるため、毎年度数回行っているオープンキャンパスや入試説明会でも周知を図っている。年間2回(夏期、冬期)の受験講座と高校3年生以上を対象とした「短大実技適性テスト」では、本学の教育を受けるにふさわしい具体的な水準を提示し、選抜の方針や方法について示唆している。

専攻科については、本学音楽科在学生に対し、7月、3月、4月にガイダンスを行い、教育目標の説明を行っている。

- (3) 広報及び入試事務についての体制(組織等)の概要を記述して下さい。また入学志願者、受験生等からの問い合わせにはどのような体制で応じているかを記述して下さい。

入試事務全般についてアドミッション事務部門が担っている。入試広報についてはアドミッション事務部門の入試広報デスクが担当しているが、企画事務部門の広報室とも常に連絡を密にし、広報誌「Muse」にも随時、受験情報を掲載している。また法人公式ホームページにも逐次入試情報を改訂掲載している。入学志願者や受験生などからの問い合わせや質問についても入試広報デスクが対応している。

- (4) 願書受付から合否通知にいたる入学試験の流れについて、選抜方法ごとにその概要を記述して下さい。また多様な選抜を公正かつ正確に実施しているかどうか、入試事務の責任者は現状をどのように受け止めているか(なし)を記述して下さい。入学願書等を参考資料としてご準備下さい。

推薦入学試験・一般入学試験とも次の過程で行われる(コンピューターによりシステム化されている)。

- ① 受付：願書(原則郵送)は入試事務局で受付ける。受付処理後、受験票を返送する。
- ② 試験：専門実技試験は、公正を期すため、受験生自身が抽選して試験の順を決める入室制度を実施している。試験期間中(概ね4日間)、在学生は登校禁止、関係者以外庄内学舎立ち入り禁止となる。
- ③ 採点入力作業：実技試験は複数試験官による採点であるため集計作業等が必要であり、

コンピューターに数値入力する作業が行われる。

- ④ 判定会議資料作成作業：専攻別・総合成績順の判定会議資料を作成する。このとき、受験番号は一切伏せられ、会議資料には示されない。
- ⑤ 合否判定：教授会において判定会議を行う。合格者の選考については、最終判定(合格判定教授会)終了まで、受験番号を伏せ、整理番号のみで採点・判定を行っており、入学選抜は公正かつ正確に実施されていると考えている。
- ⑥ 合否通知：受験生に合否通知を速達で郵送。受験生が認めた場合のみ、高等学校長宛にも郵送する。

合格者の選考については、最終判定(合格判定教授会)終了まで、判定資料に受験番号を表記せず、整理番号のみにより採点・判定を行っており、入学選抜は公正かつ正確に実施している。

(5)合格者もしくは入学手続き者に対し、入学までの間、授業や学生生活についてどのような方法、手段で情報の提供を行っているかを記述して下さい。なおそのための印刷物等があれば参考資料としてご準備下さい。

現在は主として下記の印刷物を郵送するという方法で情報の提供を行っている。今後は在学生に対して行いつつあるWebを使った方法で、より丁寧にまた迅速に行っていけるよう検討している。

- ① 当該専攻のカリキュラム
- ② 受講案内の送付物：ソルフェージュ・音楽理論のスタート段階(科目)の選択について/ソルフェージュ受講案内 /音楽理論受講案内 /副科鍵盤楽器、副科鍵盤楽器演習受講案内(作曲、声楽、管弦打、邦楽、ジャズ・ポピュラー各専攻に同封) /外国語科目受講案内 /教職課程の履修について(適性試験実施要項) /実技レッスン受講教員について(声楽、ピアノ、管弦打各専攻)

(6)入学後(入学直前を含む)、入学者に対して行っている学業や学生生活のためのオリエンテーション等の概要を示して下さい。

○ 入学後の学業や学生生活のためのオリエンテーション

入学式翌日の全体ガイダンスでは、教職員により、カリキュラム・学生生活の案内・本学の施設利用等のオリエンテーションが、その後授業開始までの間に専攻・コース別のガイダンスが行われる。また2007(平成19)年度からは、新入生がよりスムーズに大学環境になじむために、学生生活や学業について様々な指導示唆を行う、教員による新入生オリエンテーションを導入した。

豊南寮(女子)に入った新入生及び寮生以外の希望する新入生(おもに下宿生)を対象に4月上旬もしくは中旬の土曜・日曜を利用し、1泊2日の「フレッシュマン・キャンプ」として研修・親睦の機会を設けている。これには、豊南寮の上級生や、学生自治会の有志、学生生活委員の教員を中心とする若手教員も参加し、独り暮らしを始める新入生にとって大学生活の大きな支えとなっている。

フレッシュマン・キャンプ参加者数

2004～2006（平成 16～18）年度

	新入生		在学生 リーダー	教員	職員	その他	合計	備考
	短大	大学						
2004 年度	69	60	30	12	5	4	180	
2005 年度	38	34	23	14	5	4	118	リーダーに卒業生 1 名を含む
2006 年度	74	69	26	14	6	5	194	リーダーに卒業生 6 名を含む

【学習支援について】

(1)入学時もしくは学期ごとに行っている学習や科目選択のためのガイダンス等の概要を示して下さい。

本学では科目の選択方法や履修登録の方法について「Campus Guide」を発行し、学生に対して受講登録の方法及び受講から単位の認定までの流れを案内している。また、入学時及び前・後期の学期(セメスター)ごとに、授業開始前の日時を設定して専攻ごとに受講登録ガイダンスを行っている。教職員の代表者から授業内容の説明等を受け、受講登録について説明及びアドバイスを受ける。なお、受講相談日を設け、個々の学生の相談にも対応している。

受講登録はコンピューターによって処理され、追加登録取り消しが生じた場合にも学生の履修状況は正確に記録される。また、復学者・留年者等卒業要件単位数が不足するおそれのある学生に対して、日時を設定して個別に履修指導を行っている。登録は、A群科目（クラス指定のある必修科目）、B群科目（レッスン科目）、C群科目（選択科目）に分けて行う。

専攻科は、入学試験合格者に対して、3月に履修に関する説明と学位「芸術学学士」の取得についての説明を行う。また4月の履修ガイダンスは、専攻科代表者及び学務担当職員によって全体説明と共に各学生に対して個別に履修指導を行う。

(2)学習や科目選択のための印刷物(学生便覧等を除く)があれば参考資料としてご準備下さい。

学習・科目選択のための印刷物として、「学生便覧」及び「Campus Guide」が用意されている。

「学生便覧」には学生のキャンパスライフに必要な情報として本学の生い立ち（沿革）、組織、学則、履修課程、授業内容等について記載されている。「Campus Guide」では学生生活の案内と受講登録の方法及び集中講義の時間割などについて周知を図っている。

2005・2006（平成 17・18）年度は学生にCD-ROM形式の「講義概要」（シラバス）を配布した。「講義概要」（シラバス）は、2007（平成 19）年度からは法人公式ホームページ上に限定公開され、学生・教職員はIDとパスワードにより閲覧する。「講義概要」（シラバス）には、当該科目の講義テーマ、成績評価方法、講義のねらい、各回授業の内容、教科書、参考図書などを記載している。

(3)基礎学力不足の学生に対し補習授業等の取組みを行っている場合は、その概要を記述して下さい。

補習授業は特に設定していないが、ソルフェージュ及び音楽理論については、希望により学生の能力に応じたスタートラインを選択できるグレード別クラスを設置している。また、実技授業は個人レッスンであるため、学生の進度に合わせた内容になっている。

(4)学生の学習上の問題、悩み等に対し指導助言のための取組みや体制があれば記述して下さい。

履修相談窓口は常時設けているが、その他、年2回出席状況調査を実施し、積極的に指導が必要と思われる学生に対し指導助言を行っている。日常の学生相談は、学生部長、学生生活委員及び学務事務部門学生生活担当の職員が受け付け、指導助言を行っている。

学務事務部門の事務室に隣接して設置されている「学務センター」においては、開放的な広いスペースを設け、学生からのあらゆる質問・相談を受け付けている。質問の内容によっては質問カードの記入と提出を求めており、必要な場合には直接該当する教職員あるいは担当部門や教学執行部が回答している。レッスン担当教員変更の希望については、学生生活担当にて事情を聞いた上で学生部長が面談し、変更が必要と認めた場合、各教育主任と相談の上、変更を行うこととしている。

(5)進度の早い学生や優秀学生に対する学習上の配慮や学習支援を行っていれば、記述して下さい。

学習上の配慮は現在特に行っていないが、奨学制度において、優秀学生に対し卒業時に優秀賞を選考して表彰している。また短期学外研究の申請において、学業成績が資格として考慮される。専門実技において優秀な学生は、オーディションなどを通じてその実力が認められれば演奏会に出演できるなど、正規授業の延長線上にあるものとして本学が有する制度を多面的に活用して学習支援を行っている。

【学生生活支援体制について】

(1)学生生活を支援するための組織や体制(教員組織、事務組織のいずれも)の現状を示して下さい。

学生生活を支援するための組織「学生生活委員会」は、学生部長を委員長として7名の教員と2名の職員で構成されている。委員会は月1回定例で開催され、学籍異動や学生生活の様々な問題(健康・人間関係・学費・奨学金・学習等々)について審議している。また、日常の学生生活に関わる事務組織として、「学務事務部門学生担当」を設置し、常時5～6名の職員が当該業務を遂行している。

(2)クラブ活動の現状、学友会の現状、学園行事(学園祭、短大祭等)の実施の状況を、その指導体制及び学生の活動状況を含めて記述して下さい。

○ クラブ・サークル活動

本学におけるクラブ・同好会活動への学生の参加状況については下表に示す通りである。全体としてクラブ活動の参加者は多いとはいえないが、参加者は専門実技をはじめとする多忙な学生生活の中で自主活動に大きな意味を見出している。

クラブ・サークル活動の現状

2006(平成18)年度

名称	学生数(人)		合計
	音楽科	専攻科	
オペラ研究会			
ジャズダンス	4		4
生命哲学	19		19
木2会	7		7
ヨガ部			
Commedia Musicale	1		1
てんとうむし	2		2
Fool's Paradise	2		2

○ 学生自治会

全学生を会員とする学生自治会を組織し、選挙により執行部を選出している。学生自治会は各種委員会を設け、学生生活をより豊かにするために活動することを目的としている。

○ 大学祭

大学祭は学生自治会を中心に実行委員会が組織され、教職員は学生の自主性を尊重しつつ学生生活委員会を中心に支援する体制をとっている。大学祭は例年 10 月末～11 月上旬の 3 日間開催する。音楽を主体にした本学独自の手作り大学祭を目指している。2004（平成 16）年度からは後援会（保護者会）の協力を得て、教員、保護者から供託を受けバザーを行い、交流を深めている。

(3) 学生の休息のための施設・空間、保健室、食堂、売店の設置の概要について記述して下さい。なお訪問調査の際にご案内いただきます。

各校地の校舎にそれぞれ学生、教員のためのアメニティースペースが確保されている。また非喫煙者の健康に配慮し、学生、教職員を問わず 2004（平成 16）年 4 月より校舎内を全面的に禁煙とし、指定された屋外の喫煙場所でのみ喫煙可としている。

○ 休息のための施設・空間

第 1 キャンパスの A・B・C・D・E・F 号館・学生サロン「ぱうぜ」に囲まれた中庭には、芝生、植木が植えられ、休憩用テーブル・椅子、ベンチ、カサブランカが設置された憩いと語らいの場となっている。

学生サロン「ぱうぜ」はグランドピアノの形を基にデザインされた 2 階建ての建物であり、座席数、約 650 席の食堂を兼ねている。正面には四季の花に囲まれたテラス、2 階にはグランドピアノを設置している。学生や教員が主催するサロン・コンサートなどが催され、授業や練習後の憩いと語らいの場となっている。Windows 起動のコンピューターを 1 階に 4 台、2 階に 13 台設置し、インターネットの閲覧、本学図書館の蔵書検索が可能となっている。

K 号館は第 1 キャンパスから離れているため、1 階に第 1 サロン（兼食堂）及び第 2 サロンを備えている。第 1 サロンは 2006（平成 18）年度にライブハウスとして使用できるように一部改修し、ジャズ・ポピュラー専攻の学生の特別講義や研究発表、卒業生のコンサートに使用している。また、第 2 サロンには 12 台のコンピューター、1 階のコンピューター・ブースには 15 台のコンピューターを設置しており、インターネットの閲覧、本学図書館の蔵書等の検索が可能となっている。

O 号館 1 階に学生控室を設置し、飲食等ができるようになっている。この控室にも 6 台のコンピューターを設置し、インターネットの閲覧、本学図書館の蔵書等の検索が可能となっている。

○ 保健室

相談室及びベッドを備えた専用の保健室を設置し、看護師資格を有する職員を配置して、身体に不調を感じた学生に対応している。保健に関する個人的相談も受け付けている。年

度初めの学生健康診断を実施している。

○ 売店

庄内学舎内の学生サロン「ぱうぜ」2階には文具や日用品、軽食などを扱うミニ・コンビニを設置している。また、N号館1階には（株）ヤマハミュージック大阪の売店を設置し、楽譜や楽書、管弦打楽器の付属品、消耗品等を販売している。ここでは一部合奏授業等で使用する楽器などの斡旋、販売等も行っている。また、O号館1階学生控室では昼食時（昼休憩時）に学生サロン「ぱうぜ」より弁当、軽食の出張販売を行っている。

(4)短期大学が設置する学生寮の状況、下宿・アパート等の宿舍の斡旋の体制、通学のための便宜(通学バスの運行、駐輪場・駐車場の設置等)の概要を示して下さい。

○ 学生寮

庄内学舎から南東へ徒歩約20分の場所に、自宅通学が困難な女子学生に対して、学生寮「豊南寮」を設置している。毎年約70～80名（併設大学を含む。）の入寮者を迎えるが、希望者が多数の場合は書類審査によって入寮者を決定している。2002（平成14）年度には老朽化の解消と学生の現在の生活スタイルに合わせるべく、全館リニューアルを完了し、全室を個室、フローリング、ベッド、収納棚を設置し、共有ではあるがユニットバスによる個別の浴槽及びシャワー室を完備した。

特に本学は音楽短期大学であることからピアノの持込を可能とし、防音及び冷暖房を完備することで、22時までの練習を可能としている。しかし、近年は入寮者数が減少している傾向もあり、空き室の練習室転用など、学生寮ならではのメリットを活かしている。下表に豊南寮の概要を示す。

豊南寮の概要

名 称	大阪音楽大学豊南寮	
所在地	〒561-0814 豊中市豊南町東1-5-1	
本学との距離	徒歩にて約20分	
建物の構造	鉄筋コンクリート2階建：3棟、3階建：1棟、食堂（平屋）1棟	
入寮定員	191名（個室）	
室の広さ・数	大	6畳・・・・・・・・13室
	小※	4畳・・・・・・・・178室
入寮費	70,000円（入寮時のみ）	
寮 費	小室：年額342,000円 大室：年額372,000円	
設 備	食堂（兼談話室）、浴室（個別浴槽ブロックと温水シャワーのみブロックあり）、洗濯場、洗面室、物干場、冷暖房完備	
食 事	食費 年額147,000円消費税込（全員納入制）（2006年度） （朝・夕食200日分、4期分納）	
楽器の持込	ピアノ（アップライトのみ）持込可 防振台は大学で用意	
管 理	寮担当職員 4名 警備員 1名（幼稚園警備を兼ねる）	

※新入寮生は小室（4畳）への入寮を原則とする。

○下宿生への支援

下宿紹介を希望する学生に対しては学務センターが斡旋などの支援を行っている。特にピアノの設置希望に応じるため、防音加工を施した平均家賃6～7万円程度の物件を中心

に紹介している。毎年 15～20 件の下宿の紹介を行っている。

○通学のための便宜

本学は、阪急電車宝塚線庄内駅より徒歩 7 分の通学至便の場所に位置するため、特に通学のために便宜を図ることはしていないが、自転車による通学者のために、府道穂積菰江線を挟んだ本校の向かい側に駐輪場を設置している。自転車通学者には学生総合保障制度に加入することを勧め、特に豊南寮生については加入を義務付けている。

校地間の移動については、庄内学舎から K 号館の間が徒歩 10 分弱という距離であるため、楽器等を携帯しての移動や両校地間の治安・交通事情などを考慮し、スクールバスを運行（月～金 8：50～20：40／土 8：50～17：10）している。運行時間は概ね授業の開始及び終了時刻に合わせ、30 分から 40 分間隔で運行している。

(5)平成 18 年度の日本学生支援機構等の外部奨学金の取得状況を記述して下さい。また短期大学独自の奨学金等があればその概要を記述して下さい。

経済的理由等により修学が困難な学生に対する奨学金としては日本学生支援機構の奨学金に加え、本学独自の奨学事業財団による奨学金制度を設けている。

また、2003（平成 15）年度より、学生の積極的な勉学を支援し、優れた学習成果を賞する目的で新しい奨学制度が発足した。さらに夏期休業期間中に海外や国内の音楽研修・セミナーの受講希望者に所定の選考を経て経費を援助する短期学外研修（海外または国内）制度も設けている。2008（平成 20）年度からは、成績優秀者に対して授業料額の 2 分の 1 額、4 分の 1 額、6 分の 1 額を給付する報奨的給付奨学金制度を立ち上げる予定である。また学外研修についても、期間拡充など抜本的改正を予定している。以下に本学にて取得可能な奨学金の種類を示す。また、下表に 2004～2006（平成 16～18）年度における奨学金の受給者一覧表を示す。

奨学金受給者数

2004～2006（平成 16～18）年度（各年度 5 月 1 日現在）

奨学金名称	種別	貸与額 (円)	2004 年度			2005 年度			2006 年度		
			1 年	2 年	専攻 科	1 年	2 年	専攻 科	1 年	2 年	専攻 科
大阪府育英会		29,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		30,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0
あしなが育英会		50,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岡山県育英会		42,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0
島根県育英会			1	0	0	0	1	0	0	0	0
池田市奨学金			-	-	-	-	-	-	1	0	0
ヤマハ音楽支援制度学生 奨学支援		50,000	1	0	0	0	1	0	0	0	0
交通遺児育英会		60,000	0	0	0	1	0	0	0	1	0
日本学生 支援機構	第一種奨学金	50,000	0	1	0	-					
		51,000									
		52,000	8	16	2	1	8				
		53,000				16	0	1	13	16	4
		57,000		1	0						
		59,000	5	5	1	0	6				
		60,000				3	0	0	5	3	1
		61,000									
	第二種奨学金	30,000	4	5		6	4	0	0	3	0
		50,000	16	14		21	17	1	13	17	1
		80,000	22	16	2	9	18	1	16	8	1

		100,000	45	39	1	43	44	0	55	45	1
	入学時特別増額		18		2	22		0	17		0
大阪音楽大学 奨学事業財団 奨学金	一般	43,000									
		45,000	19	15	1	10	20	0	5	12	0
	特別奨学金	(人)	1	4	0	0	3	0	2	2	0
		(円)	65万	272万	-	-	190万	-	110万	182万	-
年度合計(人)			140	116	9	132	122	3	127	107	8

大阪音楽大学奨学事業財団特別奨学金の金額は総額（単位：万円）

短期学外研修助成金を受けるための条件

趣 旨	夏期休業期間中に海外や国内における音楽研修・セミナーの受講を希望する学生を対象に所定の経費を援助する。
研 修 内 容	音楽研修・セミナーについては特定しない。 参加手続は学生本人が行う。
助成額（上限）	海外：60 万円 国内：20 万円 いずれも領収書などに基づく実費精算
対 象 学 年	短大 1 年次
申 請 資 格	短大 1 年次生で第 2 セメスターの専攻実技あるいはテーマ研究の成績が「秀」及び、全科目の平均成績が優秀な者。
申 請 期 間	2 月上旬～3 月上旬の期間に申込書を提出。
審 査 方 法	書類選考 実技オーディション 外国語 面接

(6) 学生の健康管理、メンタルケアやカウンセリングの体制の概要を示して下さい。

○ 健康管理

校医による健康相談は月 2 回実施している。また、学校保健法に則り、毎年 4 月に学生の健康診断を実施している。保健室は看護師資格を持つ職員 1 名が担当している。その他、応急処置は保健室で行い、症状によっては専門医を紹介している。2004～2006（平成 16～18）年度の保健室の利用状況、健康診断の受診状況を以下にそれぞれ示す。2006（平成 18）年 7 月より夜間にも看護師を配置した。

保健室の利用者数 2004～2006（平成 16～18）年度

学年	2004 年度	2005 年度	2006 年度
音楽科 1 年	236 (49)	158 (34)	155 (45)
音楽科 2 年	261 (57)	146 (40)	164 (31)
専攻科	29 (2)	1 (0)	7 (1)
合計	526 (108)	305 (74)	326 (77)

延べ利用人数。（ ）はベッド使用者内数。

健康診断の受診状況 2004～2006（平成 16～18）年度

学年	2004 年度			2005 年度			2006 年度		
	対象者数 (人)	受診者数 (人)	受診率 (%)	対象者数 (人)	受診者数 (人)	受診率 (%)	対象者数 (人)	受診者数 (人)	受診率 (%)
音楽科 1 年	314	307	97.8	289	287	99.3	262	261	99.6

音楽科 2 年	386	336	87.0	305	244	80.0	275	243	88.4
専攻科	31	31	100.0	15	13	86.7	25	24	96.0
合計	731	674	92.2	609	544	89.3	562	528	94.0

対象者数＝在籍者数－休学者数

○ メンタルケア

学務センターには学生相談室が常設されている。また「心の相談室」が設けられ、専門のカウンセラーによるカウンセリングを行っている。また、所定の相談日（毎月第2月曜日及び第4水曜日）以外にも電話による直接相談を行っている。キャンパス・ハラスメントについてはセクシュアル・ハラスメント等のハラスメントに対応するための教職員の中から任命された相談員（ハラスメント相談員：教員3名、職員2名）を配置し、恒常的に相談を受け付けている。この相談員との連絡は、直接相談のほか電子メール、携帯電話、封書（郵送等）の3つの手段を用意し、「Campus Guide」や学生が集う場所での掲示等を通じて周知を図っている。また、教職員に対しては2004・2005（平成16・17）年度は弁護士を講師に招き講習会を催し、様々なハラスメントに対する意識の向上と注意を喚起した。

（7）学生支援のために学生個々の情報等を記録していれば、それらはどのように保管・保護されているかを記述して下さい。

学生の学籍に関する学籍簿、学生カード、学生名簿、学生名表、入学時の誓約書、学籍異動の記録、退学休学復学許可書発行台帳、学生相談記録の書類については学務事務部門において管理している。また、学生に関してエクステンション事務部門が管理している記録は進路調査カード（兼求職票）、就職活動記録、音楽教室講師採用試験受験記録である。進路調査カード（兼求職票）は、在籍学生が希望する進路調査を目的とし、就職相談や就職活動用各種証明書の発行に利用している。就職活動記録用紙は、在籍学生が実際に体験した就職活動についての記録である。音楽教室講師採用試験受験記録は音楽教室への就職活動についての記録であり、本学が音楽教育に特化した短期大学であることから、一般的な就職活動記録である就職活動記録用紙と区別して作成している。いずれも個人情報の保護には十分配慮している。

【進路支援について】

（1）下の進路状況表を例に、過去3ヶ年（平成16年度～18年度）の就職状況を学科等ごとに記載して下さい。また進路一覧表等の印刷物があれば参考資料としてご準備下さい。

音楽科の進路状況

2004～2006（平成16～18）年度卒業生

			2004 年度		2005 年度		2006 年度	
a	卒業者数		348 人		275 人		244 人	
b	就職希望者数	b/a	124 人	35.6%	121 人	44.0%	117 人	48.0%
c	うち学校で斡旋した就職者数	c/b	27 人	21.8%	32 人	26.4%	23 人	19.7%
d	うち自己開拓分の就職者数	d/b	55 人	44.4%	39 人	32.2%	44 人	37.6%
e	就職未定者	e/b	42 人	33.9%	50 人	41.3%	50 人	42.7%
f	進学・留学希望者数	f/a	81 人	23.3%	62 人	22.5%	71 人	29.0%
g	進学・留学者	g/f	96 人	118.5%	70 人	112.9%	65 人	91.5%
h	進学・留学準備中	h/f	24 人	29.6%	12 人	19.4%	10 人	14.0%
i	その他進路決定者	i/a	19 人	5.5%	24 人	8.7%	8 人	3.3%

j 不明・無業者数	j/a	127人	36.5%	98人	35.6%	94人	38.5%
-----------	-----	------	-------	-----	-------	-----	-------

注 「g+h」が「f」にならない理由は、調査時期のタイムラグによる。

専攻科の進路状況

2004～2006（平成16～18）年度卒業生

		2004年度		2005年度		2006年度	
a 卒業者数		30人		14人		25人	
b 就職希望者数	b/a	7人 23.3%		7人 50.0%		14人 56.0%	
c うち学校で斡旋した就職者数	c/b	3人 42.9%		3人 42.9%		9人 64.3%	
d うち自己開拓分の就職者数	d/b	4人 57.1%		4人 57.1%		5人 35.7%	
e 就職未定者	e/b	0人 0.0%		0人 0.0%		0人 0.0%	
f 進学・留学希望者数	f/a	11人 36.7%		1人 7.1%		3人 12.0%	
g 進学・留学生	g/f	11人 100%		1人 100%		3人 100%	
h 進学・留学準備中	h/f	1人 9.0%		1人 100%		2人 66.7%	
i その他進路決定者	i/a	0人 0.0%		2人 14.3%		1人 4.0%	
j 不明・無業者数	j/a	11人 36.7%		3人 21.4%		5人 20.0%	

音楽科と専攻科を含めた進路状況について専攻別の特徴を概観すると、声楽専攻は進学傾向が強く、器楽専攻のうちピアノを専門に学んだ学生は本学卒業後に直ちに専門を活かした教育活動に関する職に就く者が多い。同じ器楽専攻でも管弦打楽器を専攻した学生は進学、あるいはアルバイト等をしながら演奏活動を行う場合が多いようである。

主な就職先機関

種 別	就職先機関名
音楽教室 (講師)	ヤマハ音楽教室、カワイ音楽教室、三木楽器、第一楽器、ヤマハミュージック大阪、小阪楽器店、七田チャイルドアカデミー、ツカモトミュージックアカデミー 他
企業 (楽器店)	三木楽器、小阪楽器店 他
企業・ その他	イズミヤ、ファイブフォックス、ワールドストアパートナーズ、トリンプスタッフサービス、アワーズ、上新電機、ヨドバシカメラ、ホテル日航茨木大阪、ノボテル甲子園、三井生命保険、日本生命保険、徳島信用金庫、JTB、TNS、京阪百貨店、KDDIエボルバ、パソナオン、テンプスタッフ、モンブラン、堺商工会議所、橿原神宮、サウンドウェイ、エムミュージックスタジオ、向陽会向陽病院、あすか会東井医院 他
公務員	陸上自衛隊

(2) 学生の就職を支援する組織や体制(教員組織、事務組織のいずれも)の現状を記述して下さい。

学生の就職支援に関わる事業の企画運営を扱う委員会としてエクステンション事業委員会を組織している。構成は担当理事、センター長、センター長の推薦を受けた理事長任命委員5名程度、エクステンション事務部門長となっている。また、これらエクステンション事業の事務的バックアップを行う部署としてエクステンション・センター（就職担当課員 専任職員1名、派遣職員1名）を設置している。

エクステンション・センターは、進路説明会、進路支援セミナー、就職ガイダンス、就職支援講座、就職活動状況調査、資格取得準備講座の実施、教員採用試験受験対策説明会・公務員採用試験受験対策説明会・音楽教室講師採用説明会、求人（企業）情報検索システムの運用、進路（就職）情報検索用パソコンの設置等の業務を通じて学生の就職活動を支

援している。

(3)就職支援室、就職資料室等の現状を示し、学生にどのように就職情報等を提供しているかを記述して下さい。

エクステンション・センターは本館内の玄関ホールに近接した場所に十分なスペースを確保し、開かれた雰囲気の中で常時学生が入室することができる環境を創り出すことに留意している。

進路情報等の提供に関しては、参考書籍の設置及び貸し出し、大学、各種専門学校の入学案内、情報収集用のパソコンの設置（学生の自由使用可能）、留学情報の収集等を行っている。

就職情報等の提供については、業種別求人票のファイリング及び掲示、就職情報収集のためのパソコンの設置（4台）、法人公式ホームページによる求人情報の公開、就職担当課員による企業訪問の情報、進路・就職ガイダンスの実施、等を行っている。

就職のための資格取得、就職試験対策についてはエクステンション・センターによって、資格取得準備講座が開催され、就職のための資格取得、就職試験対策が実施されている。

また、インターンシップ制度を実施し、音楽系の企業等へ受け入れを申し入れている。また、特別実習科目として2単位の認定を設け、インターンシップを卒業要件単位の一部として認めることにより積極的に推奨している。下表の2004～2006（平成16～18）年度の実施状況にみられるように恒常的にインターンシップを行っている。

インターンシップの実施状況

2004～2006（平成16～18）年度

受け入れ先	実習業務内容	2004年度		2005年度		2006年度	
		受入 定員	実習 人数	受入 定員	実習 人数	受入 定員	実習 人数
(株)ヤマハミュージック大阪	売場実習	6	4	6	0	3	1
	音楽教室運営/管理	3	0	3	0	3	0
大阪アーティスト協会	演奏会運営	2	1	3	0	3	1
いずみホール	ホール企画/運営補助	2	0	2	0	2	0
三木楽器(株)	コンペティション業務実習	9	1	5	2	5	0
大阪音楽大学附属音楽幼稚園	保育助手業務の実習	3	0	3	0	3	1
(株)福永管楽器	リコーダー製作作業	3	1	3	0	3	0
(株)河合楽器製作所	音楽教室業務/売場実習	2	1	2	0	2	0
ザ・フェニックスホール	ホール運営業務全般	2	1	2	0	-	-
伊丹アイフォニックホール	ホール運営業務全般	2	0	2	0	1	1
清家楽器	音楽教室業務全般	5	3	4	1	6	1
大阪音楽大学音楽博物館	博物館業務全般	4	1	-	-	8	0
(株)全音出版社	幼児音楽講座での販売・受付	4	2	3	0	-	-
	ピアノ発表会運営補助	5	4	5	0	-	-
大阪センチュリー交響楽団	オーケストラの練習・本番までの舞台裏	5	3	5	0	5	1
(株)ステップ	制作部（テレビ・ラジオのCM制作など）	4	2	1	0	2	1
びわ湖ホール	ホール運営事業全般	2	0	2	0	2	0

(株)ヤマハミュージック神戸	店頭にて接客、清掃、商品補充など	-	-	3	0	3	2
兵庫県立芸術センター	広報、営業活動	-	-	-	-	1	0
小阪楽器店	イベントスタッフ、レッスン見学、音楽教育・普及等についてのディスカッション	-	-	-	-	9	1
羽曳野市生活情報文化センター LIC はびきの	各種催しの運営業務	-	-	-	-	2	0
羽曳野市教育委員会 LIC はびきの市民大学	はびきの市民大学に関する業務	-	-	-	-	2	0
合計		63	24	54	3	65	10

・受入定員は併設大学との合計数。

(4)過去3ヶ年(平成16年度～18年度)の就職状況について、就職率及び就職先を学長等、学科長等はどのように受け止めているかを記述して下さい。

就職希望者の就職率が上昇傾向にある点は評価できるが、就職が決まった者の多くが学生の自己開拓によるものである現状を見ると、本学としての支援強化が今後の課題であると感じられる。本学の卒業生の約3分の1の学生が併設大学への編入や専攻科への進学を選ぶという状況があり、多数の進学希望者を抱えている。なお、音楽大学に特徴的な事柄であるが、就職支援と共に、フリーの演奏活動など、就職という概念よりもさらに広い音楽活動全般への卒業後支援も視野に入れておく必要がある。音楽文化の創出者、よき送り手として卒業後に演奏活動を継続して行っていくことは、音楽系の専門短期大学として極めて重要な進路であると言える。

本学では独自に音楽人材登録制度を設け、演奏家や指導者などの人材紹介を求めに応じに行っている。下表にその状況を示す。音楽人材登録は、本学の卒業・修了生の希望者を所定の手続きによりエクステンション・センターに登録するもので、紹介先はソリストや合唱、アンサンブルとしての演奏から吹奏楽やヴォイス・トレーナー、ギターやジャズの指導者、音楽に関する各種の講演、作・編曲から楽譜浄書、舞台スタッフや音楽プロデューサー、音楽関連の翻訳、通訳など広い分野にわたっている。

音楽人材紹介実績 2004～2006（平成16～18）年度

	2004年度	2005年度	2006年度
演奏者（個人・団体）紹介	112件	205件	379件
音楽指導者紹介	80件	60件	93件
講師等派遣依頼	40件	46件	32件

音楽人材登録者の対象者は本学及び併設大学・大学院の卒業者および修了者。

(5)過去3ヶ年(平成16年度～18年度)の進学(4年制大学、専門学校等)及び海外留学の実績について、その支援はどのような方法、体制で行ったかを記述して下さい。

進学を希望する学生の多くは、本学に入学する時点で進学も考慮している。しかし、ジャズ・ポピュラー専攻が新設されたこともあり、進学を希望しない学生が増加しており、進学率は減少傾向にあることが下表からも見て取ることができる。また、留学に関してはその希望を抱く時期が明確でなく、これについては調査を行い、その傾向について検討す

る必要がある。進学、留学に対する支援方法・体制は、大学、各種専門学校の入学案内の設置、専攻科への進学、及び大阪音楽大学 3 年次編入への進学ガイダンスの実施、進学情報収集用のパソコンの設置、進学参考書籍の設置、留学情報の収集と掲示による広報等を行っている。

過去 3 ケ年の進学（4 年制大学、専門学校等）・留学

		2004 年度 (人)	卒業者に対する割合 (%)	2005 年度 (人)	卒業者に対する割合 (%)	2006 年度 (人)	卒業者に対する割合 (%)
音楽科	卒業生数	348		275		244	
	大学進学	65	18.7	32	11.6	41	16.8
	短大専攻科進学	13	3.7	21	7.6	12	4.9
	専門学校進学	8	3.4	7	2.9	7	2.9
	留学	3	0.9	4	1.5	0	0.0
	その他	7	0.9	6	1.8	5	2.0
	合計	96	27.6	70	25.5	65	26.6

専攻科	修了者数	30		14		25	
	大学進学	0	0.0	1	7.1	1	4.0
	専門学校進学	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	留学	1	0.0	0	0.0	0	0.0
	その他	10	30.0	0	0.0	2	8.0
	合計	11	30.0	1	7.1	3	12.0

【多様な学生に対する支援について】

(1) 過去 3 ケ年(平成 16 年度～18 年度)の留学生・社会人・帰国子女・障害者・長期履修学生の受け入れ状況を示し、その学習支援、生活支援はそれぞれどのような方法、体制で行っているかを記述して下さい。なお、学生数はいずれの年度も 5 月 1 日時点とします。

多様な学生の受入状況

2004～2006（平成 16～18）年度

種別	2004 年度		2005 年度		2006 年度		計	
	音楽科	専攻科	音楽科	専攻科	音楽科	専攻科	音楽科	専攻科
留学生	1	0	0	0	1	1	2	1
社会人*1								
帰国子女*1								
障害者	1	0	1	0	0	0	2	0
長期履修生*2								

*1 社会人・帰国子女の入試枠は設定していない。

*2 長期履修制度は実施していない。

計は各年度の受入数を合計した延べ人数を記す。

(単位：人)

○ 留学生に対する支援

留学生支援については、下表のように 1986（昭和 61）年 12 月 22 日教授会決定事項に基づき行っている。入学希望の段階で、授業が理解できる程度の日本語能力を求めている。入学後の学習支援については、履修登録時の補助や定期試験の際の支援などを行っている。

留学生に対する支援事項

授 業	日本語の習熟度をはかりつつ、各授業担当者において、適切な課題を与えるなど、適宜支援する。
試 験	時間延長（別室） 別課題 口頭試験
レポート	別課題 口頭報告
評 価	評価基準に基づいて行う。

○ 社会人学生に対する支援

社会人入学定員枠は、現在のところ特に設けていない。入学試験の応募資格については、推薦入学試験においては高等学校等の卒業年次を限定しているが、一般入学入試においては年齢・高等学校等卒業年次などの限定は行っていない。現在、高等学校等卒業後、時期を経て音楽の高等教育を受けようとする人達（社会人等）を積極的に受け入れるため、入試制度やカリキュラムなどの整備を進めている。

○ 身体障害を持つ学生に対する支援

視覚障害を持つ学生に対する支援については、1986（昭和 61）年 12 月 22 日の教授会において下表の支援体制を決定した。また学内における教室移動時の安全確保のため点字誘導ブロックの設置を行っている。試験等では点字プリンターを使用し、点字試験用紙を作成している。

身体障害者に対する支援体制

授 業	視覚障害学生の場合、テキストの点字訳等は原則的には自弁とすること。特定の楽譜等については大学が教材の提供・貸与等を行うこともある。実技を伴う授業については検討中。
試 験	点字試験（早めの問題提出） 時間延長・別室試験 面談試験 上記方法のいずれか、または併用による。
レポート	点字 別課題 面談試験 上記方法のいずれか、または併用による。
評 価	担当教員が行う。

身体障害を持つ学生に対しては、入学時及び年度始めのガイダンス時には面談を行い、履修登録時の補助を行っている。設備としては A 号館・O 号館の 1 階に車椅子での使用が可能な洗面室を設置し、各校舎入り口にはスロープを設けるなど、バリアフリー化を推進している。

○ 長期履修生

本学では長期履修生の特別選抜は行っていない。社会人学生は入学後に本人の希望で休学する場合もあるが、その場合には最長在籍期間の間に復学し、所定の卒業要件単位を取得する必要がある。最長在籍期間は現在短期大学部在籍期間の 2 倍の 4 年であるが、社会

人の在籍期間についてはその延長を検討中である。

【特記事項について】

(1)この《Ⅴ学生支援》の領域で示した評価項目や評価の観点の他に、例えば成績不良者への支援、長期欠席者への援助、学生に対する表彰制度等、学生支援について努力していることがあれば記述して下さい。

○ 学生に対する表彰制度

本学は、学生に対する褒賞制度として、卒業時に「優秀賞」及び「社会活動賞」の授与を行っている。また、オーディションによる選抜者が出演できる演奏会には、ソロ及びアンサンブルの「ジュニアカレッジ・コンサート」（専攻科在学生を含む。）があり、ザ・カレッジ・オペラハウスで開催する。また学生及び卒業生が作曲作品を応募し、審査の結果優秀作品を発表する「新作展」はミレニアムホールで開催している。

○ 自主公演活動への支援

学生の自主的なオペラやミュージカルの公演及び各種コンサートの制作など、学内外を問わずその発表の場を求め、学生が自ら企画運営する伝統がある。なかでも、「Tutti オペラ」は代表的な自主活動として毎年開催されている。学年や専攻を越え、企画・演出から舞台制作までを学生自身によって創り上げる過程は、学生の自主性と協調性を高める貴重な経験となっている。このような自主活動のための助成金制度があり、「大阪音楽大学音楽文化振興財団」によって支援がなされている。2005（平成17）年度は、併設大学と併せて21 団体より申請があり、約345万円の助成を行った。

○ 同窓会《幸楽会》からの学生活動への支援

同窓会から学生の諸活動への支援として学生自治会（併設大学と合同）に対して活動資金援助を行っている。2006（平成18）年度は直接自治会に30万円の助成を行った。また、同窓会総会の機会に「学生アンサンブルコンテスト」（賞金付き）を実施し、入賞者は演奏を披露する機会を持つことができる。

(2)特別の事由や事情があり、評価項目や評価の観点が求めることが実現（達成）できないときはその事由や事情を記述して下さい。

特になし。

Ⅵ 研究

【教員の研究活動全般について】

(1)次の「専任教員の研究実績表」を例にして過去3ヶ年(平成16年度～18年度)の専任教員の研究状況を記載し、その成果について記述して下さい。

2004～2006（平成16～18）年度 専任教員の研究実績表

所属	氏名	職名	研究業績					国際的 活動の有無	社会的 活動の有無	備考
			著作数	論文数	学会等 発表数	作曲・ 演奏数	その他			
学 長	中村孝義	教授					191	無	有	
副学長	本山秀毅	教授				67	45	無	有	
一般教育	水瀧征矢雄	教授	1				3	無	有	
	山下 豊	准教授					3	無	有	
外国語	中山喜満	准教授	2	1	1		1	無	有	
保健体育	大野寿一	教授	5				105	有	有	
教 職	大前哲彦	教授	1	1	3		6	無	有	
	喜多忠政	准教授					5	無	有	
	藤本敦夫	准教授					53	無	有	
作 曲	永田孝信	准教授	1		1 (CD)	10	2	有	有	
	水谷一郎	教授	1			1	4	無	有	
声 楽	柿木 功	教授				2	1	無	有	
	武田省二	教授				2	8	無	有	
	谷川勝己	教授				6		無	有	
	中井美恵子	教授					4	無	無	
	布埜洋子	教授					12	無	有	
	水谷雅男	教授				11	17	無	有	
ピアノ	浅井康子	教授				26	5	無	有	
	浅野恵子	教授				3		無	有	
	茨木節子	教授				4	8	無	有	
	植田定和	教授				1	7	無	有	
	小川侑俊	教授				1	9	無	有	
	土井 緑	准教授			1 (CD)	17	10	無	有	
	福田紀子	教授				7		無	有	
	松本昌敏	准教授				24	35	有	有	
管弦打	赤松二郎	教授				12	13	有	有	
	木村寛仁	准教授			2 (CD)	33	27	無	有	
ソルフェ ージュ	大前育子	教授		2	1		8	無	有	
	駒井 肇	教授				2	4	無	有	
	長谷川慶岳	講師				6	1	無	有	
ジャズ・ ポピュラ ー	塩谷信廣	教授			55	1	6	無	有	
	日野皓正	教授			6 (CD)	156	3	有	有	
	藤井司朗	講師				2	8	無	有	
	森 宏	准教授				13	11	無	有	
音楽専攻	高橋 徹	准教授	11		6 (CD)	13	25	有	有	

(2)教員個人の研究活動の状況を公開していれば、その取組みの概要を記述し、公開している印刷物等を訪問調査の際にご準備下さい。

教員個人の研究活動については、法人公式ホームページの教員紹介の欄において概要を公開している。また、演奏活動、書籍・CD等の出版、社会貢献活動などについては広報誌「Muse」に随時掲載している。

(3)過去3ヶ年(平成 16 年度～18 年度)の科学研究費補助金(以下、「科研費」という)の申請・採択等、外部からの研究資金の調達状況を一覧表にして下さい。

外部からの研究資金調達状況

2004～2006（平成 16～18）年度

			2004 年度		2005 年度		2006 年度	
			申請	採択	申請	採択	申請	採択
科学研究費補助金			0	0	0	0	0	0
* その 他の 外部 研究 資金	芸術文化助成	(財) 野村国際文化財団	0	0	1	1	0	0
	音楽活動・国際交流助成	(財) ロームミュージック・ファンデーション	1	1	1	1	1	1
	三菱信託芸術文化財団助成	(財) 三菱信託芸術文化財団	1	1	1	1	1	1
	朝日新聞文化財団助成	(財) 朝日新聞文化財団	1	1	0	0	1	1

*：全て併設大学と共同による取得。

(4)学科等ごとのグループ研究や共同研究、短期大学もしくは学科等の教育に係る研究の状況について記述して下さい。

本学における演奏活動は、教育・研究・社会活動を問わず共同開催や共同参加の演奏会という形式をとることが多い。ソリストとしての活動による演奏会と並んで、室内楽、オーケストラ、オペラ等、複数の教員が係わる音楽活動は共同研究発表として位置づけられる。これらの演奏活動に学生が参加する場合は、教員の直接・間接的な指導のもとに舞台の実践を経験するという意味で、非常に効果的な教育現場となる。複数の教員が出演するこれらの演奏会は一般にも公開され高い評価を得ている。

また作曲専攻においては、併設大学の作曲学科の専任教員と共同で、現況の学生の理解力に応じた新たな和声法教科書(音楽理論)の作成に取り組んでいる。第1巻は2006(平成18)年3月に出版した。第2巻は2007(平成19)年6月に出版予定である。

ソルフェージュ担当教員は共同でソルフェージュ科目(大学=ステップ1～3、短大:ソルフェージュⅠ～Ⅵ)で使用するテキスト「ソルフェージュA」(2000(平成12)年4月出版)の改訂版を2005年4月に出版した。内容はピアノ伴奏付視唱曲である。また、無伴奏視唱曲及び伴奏付練習曲を中心とした「ソルフェージュB」も作成・出版した。

【研究のための条件について】

(1)研究費(研究旅費を含む)についての支給規程等(年間の支出限度額等が記載されているもの)を整備していれば訪問調査時に拝見します。なお規程等を整備していない場合は、過去3ヶ年(平成16年度～18年度)の決算書から研究に係る経費を項目(研究費、研究旅費、研究に係る施設、機器・備品等の整備費、研究に係る図書費等)ごとに抽出し一覧表にして参考資料として準備して下さい。

本学専任教員に対する研究費あるいは研究助成金の支給については、「大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部研究助成規程」(参考資料 資料10 学校法人大阪音楽大学規程集所収)に基づいて行われている。

研究費には、①個人研究費(研究用品の購入、学会の会費、演奏会の鑑賞費など)②通常研究費(機材・機器費・資料費の助成)③研究出張費(学会、研究会への参加費、調査研究活動費)④研究紀要論文執筆補助費、⑤特別研究費(研究成果が公表される研究を対象とする助成で、学術分野と芸術分野がある)、⑥特別プロジェクト研究費(学術分野及び芸術分野で研究成果が公表されるものであり、かつ特段の助成に値すると判断されるもの)

⑦研究成果出版助成費（刊行経費の一部を助成）、⑧海外研修費（研修期間が6か月以上1年以内かつ通算2年以内で、研修成果を発表する義務を負う長期特別研修と、それ以外の研修に対する助成）、⑨国内研修費がある。

(2)教員の研究成果を発表する機会(学内発表、研究紀要・論文集の発行等)の確保について、その概要を説明して下さい。なお過去3ヶ年(平成16年度～18年度)の研究紀要・論文集を訪問調査の際に拝見いたしますのでご準備下さい。

演奏及び作品発表の機会は、学外の演奏会場における公演活動の他に、学内のザ・カレッジ・オペラハウス、ミレニアムホールにおける演奏活動が数多くあり、教員の研究成果の発表が活発に行われている。なお、教員の演奏活動の支援策として、特別研究費（芸術分野）の支給制度を設けている。

また、論文等の研究成果の発表の機会としては、併設大学との共同で「大阪音楽大学研究紀要」と、大阪音楽大学音楽博物館の年報「音楽研究」があり、いずれも毎年公刊している。

(3)教員の研究に係る機器、備品、図書等の整備状況について、平成18年度の決算よりその支出状況を記述して下さい。また訪問調査の際の校舎等案内時に教員の研究に係る機器、備品、図書等の状況を説明して下さい。

教員の研究費支給実績

2004～2006（平成16～18）年度

種類		2004年度		2005年度		2006年度	
		金額（円）	件数	金額（円）	件数	金額（円）	件数
通常研究	機器・楽器	648,090	4	158,800	1	318,465	5
	図書・視聴覚資料等	578,237	79	495,503	156	287,724	67
	消耗品その他	82,956	6	6,675	2	60,292	3
	合計	1,309,283	10	660,978	3	666,481	8
個人研究費*		2,375,642	40/45	2,398,589	40/42	1,846,147	31/37
特別プロジェクト研究		0	0	0	0	0	0
特別研究（学術分野）		225,792	1	0	0	0	0
特別研究（芸術分野）		1,587,805	4	2,420,000	5	866,000	3
研究成果出版助成費		0	0	568,000	1	638,400	1
論文執筆補助費		0	0	60,000	2	0	0
長期海外特別研修		1,964,697	1	0	0	0	0
海外研修助成		168,000	1	0	0	160,330	1
研究出張費		535,890	6	782,970	10	814,030	14
研究費総計		8,167,109	-	6,890,537	-	4,991,388	-

*個人研究費の件数は、申請者数/専任教員数分

(4)教員の教員室、研究室または研修室、実験室等の状況を記述して下さい。なお訪問調査の際に研究室等をご案内願います。

専任教員には、それぞれ個別のレッスン室または研究室が配当され、専攻教員共同の研究室や資料室も設置されている。個人研究室(レッスン室)の他に作曲資料室、音楽学資料室、ソルフェージュ研究室、管弦打共同研究室、ジャズ・ポピュラー専攻教員研究室等を設置している。

(5)教員の研修日等、研究時間の確保の状況について記述して下さい。

原則として土日を除き週 1～2 日の研究日(研修日)があり、現状では専任教員の研究時間は確保されていると言える。大学運営に関わる活動や大学の社会的貢献に伴う業務の増加などに伴い、アンバランスになりがちな専任教員の業務の適正な配分等について現状分析と改善策の検討を行うことが必要である。

【特記事項について】

(1)この《VI研究》の領域で示した評価項目や評価の観点の他に、教員の研究について努力していることがあれば記述して下さい。

特になし。

(2)特別の事由や事情があり、評価項目や評価の観点が求めることが実現(達成)できないときはその事由や事情を記述して下さい。

特になし。

Ⅶ 社会的活動

【社会的活動（国際的活動は別項で記述）への取組みについて】

(1) 社会的活動への取組みについて、その理念や方針等、教育・研究における位置づけについて、短期大学ではどのように考え、また今後どのように取組む予定かを記述して下さい。

短期大学は社会に直結し、社会と密接に関わり合う教育を期待されている。本学では学生の社会活動をカリキュラム上からも支援する体制をとっており、社会活動特別実習として単位を認定する制度を設けている。また、教員の研究成果や授業のエッセンスを地域社会へ開放する「大学開放講座」や、これに類するものを近隣の自治体などと共催で開催している。

また、学内で開催する各種の演奏会や特別講義などは一般にも開放しているため、近隣の住民の中には熱心なファンも生まれてきている。ザ・カレッジ・オペラハウスでの、併設大学との共催演奏会は、年間 10 数公演にのぼっている。

学生の社会活動は、学外での活動に多大なエネルギーを費やすことで、学修に支障をきたすという危惧もあるが、学内外での学生の演奏会、発表会などは今後も推進したいと考えている。

(2) 社会人受け入れの状況について、生涯学習の観点から短期大学では社会人の受け入れを今後どのように考えているかを記述して下さい。

社会人の受け入れについては、①働きながら学ぶという勤労学生的側面、②現役を引退したシニアあるいは子育てを終えた主婦など、かつて果たせなかった夢の実現という側面、③現役で活動しながらその専門のスキルアップのための学習等の側面、という 3 つの側面がある。①についてはこれまでも例があり、奨学金貸与の際に考慮するなどの方策はとってきたが、システムとして確立したものはなく、将来の課題である。②については科目等履修生制度である程度カバーしてきたと考えているが、より本格的な在学生としてのあり方を望む層が増加していることが問い合わせ等の内容からうかがうことができる。これまでの例から、このような社会人・シニア層の存在が、現役学生にとって勉学への良い刺激となることが明らかである。今後、積極的に受け入れるシステムを確立するべきであると思われる。③については科目等履修生及び各種の指導者研修会によりその機会を設けている。

また、専攻科は短大卒業生の専門に関するスキルアップを目的としている側面が強く、働きながら学ぶ学生も少なからず在籍している。

総じて社会人の受け入れにはゆとりのある時間割やカリキュラム編成が不可欠であり、長期履修制度についても今後の検討課題である。

(3) 過去3ヶ年(平成 16 年度～18 年度)に短期大学が行った地域社会に向けた公開講座、生涯学習授業、正規授業の開放等の実施状況を記述して下さい。

○ 公開講座

本学が併設大学と共同開催した公開講座について 2004～2006（平成 16～18）年度の実施状況を下表に示す。また公開講座の一環として行われているオペラハウス公演の 2004～2006（平成 16～18）年度の開催状況を表に示す。

2004～2006（平成 16～18）年度に開催した公開講座

講座名	2004 年度	2005 年度	2006 年度
ミレニアムホール特別講座	4 回(各 1 講座)	4 回(各 1 講座)	4 回(各 1 講座)
カレッジ・オペラ講座” オペラ物知り講座”	-	4 回(各 1 講座)	4 回(各 1 講座)
カレッジ・オペラ講座” 高校生のためのオペラ講座”	-	1 回（3 日間）	1 回（3 日間）
カレッジ・オペラ講座” 一般社会人のためのオペラ講座”	-	1 回（5 日間）	1 回（5 日間）
青少年のための名曲コンサート	4 回(各 1 公演)	5 回(各 1 公演)	2 回(各 1 公演)
公開レッスン	4 回(各 1 講座)	4 回(各 1 講座)	-
ミニコンサート	3 回	1 回	-

2004～2006（平成 16～18）年度に開催したオペラハウス公演

年度	公演回数
2004 年度	年 13 回（15 公演）（オペラのみ 2 回 4 公演）
2005 年度	年 11 回（13 公演）（オペラのみ 2 回 4 公演）
2006 年度	年 11 回（13 公演）（オペラのみ 2 回 4 公演）

これらの表に示すものは常設的な公開講座であるが、これに加えて、2005（平成 17）年度には創立 90 周年記念事業の一環として、シンポジウム「音楽の文化力」と「オペラ活動の 21 世紀」の開催、2005（平成 17）年度、新国立劇場地域招聘公演としてのオペラ「沈黙」上演（1 回 2 公演）、NHK 大阪ホールでの演奏会「関西吹奏楽 150 年 幕末鼓笛隊からシンフォニックバンドへ」の実施、大阪歴史博物館で特別企画展「古今東西 吹奏楽の楽器たち」（大阪歴史博物館との共催）の開催等が行われた。

○ 生涯学習講座

2004～2006（平成 16～18）年度に行った生涯学習講座を示す。

2004～2006（平成 16～18）年度に行った生涯学習講座

講座名	2004 年度	2005 年度	2006 年度
指導者研修	7 科目 12 講座	7 科目 9 講座	7 科目 11 講座
サテライト・マスタークラス	2 コース・年 3 回・各 6 講座	2 コース・年 3 回・各 6 講座	2 コース・年 3 回・各 6 講座

併設大学と共同開催。

○ 正規授業の開放

大阪府立池田北高等学校との高大連携による授業の開放以外に正規授業の開放は行っていない。特別講義については多数の科目において行っている。（特記事項参照）

(4) 過去3ヶ年(平成 16 年度～18 年度)の短期大学と地域社会(自治体、商工業、教育機関、その他団体等)との交流、連携等の活動について記述して下さい。

本学では(3)において述べたように、所在地である豊中市や近隣都市との共催で公開講座や演奏会などを行い、下表のように、音楽の様々なジャンルで教員の演奏や講演を行って

いる。

自治体との連携協力による公開講座・演奏会

2004～2006(平成 16～18)年度

講座名	2004 年度	2005 年度	2006 年度
古今東西音楽考(大阪府立文化情報センターと共催)	6 講座	6 講座	6 講座
公開講座フェスタ(HNS ネット主催)	1 講座	1 講座	1 講座
音楽・心の旅(豊中市立中央公民館と共催)	4 講座	4 講座	4 講座
音楽の宝石箱(高槻市生涯学習センターと共催)	5 講座	5 講座	5 講座
音楽への旅・・・”歌”の魅力を探る(羽曳野市提携)	-	-	12 講座

すべて併設大学と共同参加

【学生の社会的活動について】

(1)過去3ヶ年(平成 16 年度～18 年度)の学生による地域活動、地域貢献あるいはボランティア活動等社会的活動の状況を記述して下さい。

本学の学生が社会とかかわる場合、演奏活動によるものが多い。このような中で、社会的に顕著な活動や貢献をした学生に対し、「音楽社会活動賞」を設けて卒業時にその功績を表彰する制度を設けている。2004(平成 16)年度には、活発な社会活動を展開したモンゴルからの留学生に対してこの賞が授与された。

学生の学外での演奏活動は基本的に自主的なものであるため全てを把握できないが、本学の学生による学外演奏活動として 2004～2006(平成 16～18)年度に以下の報告があった。

学生による社会活動

2004～2006(平成 16～18)年度

	イベント	主催他	内容
2004 年度	ひったくり撲滅 市民コンサート	豊中南警察署／大学は協力	オペラハウスで開催。大学の吹奏楽団とジャズアンサンブルが出演。
	アフタヌーン コンサート	1 月 24 日 柏原市民文化会館リビエールホールレセプションホール 11 月 27 日 柏原市民文化会館リビエールホールレセプションホール	サクソフォーン四重奏、金管五重奏を演奏。 木管五重奏、金管五重奏を演奏。
2005 年度	シティモコンサート	京阪シティモール 2 階、8 階	各種編成によるジャズ演奏 14 日間にわたる公演
2006 年度	クリスマス会	大阪市姫島こども園	歌とピアノによるイベント参加

すべて併設大学と共同参加

このほかに学生のボランティアサークルとして「てんとうむし」があり、月に 2 回西宮市甲東園の段上公民館で、様々な問題を抱えた子供たちを対象に音楽療法的な活動を行っている。

(2)短期大学では学生の地域活動、地域貢献あるいはボランティア活動等についてどのように考え、どのように評価しているか記述して下さい。

2003(平成 15)年度から学生の積極的な勉学を応援し、優れた学業成果を賞する新しい褒賞制度の一つとして「音楽社会活動賞」(対象は全在学期間で、申請は卒業年度)を設け

ている。この賞は、創造的な音楽活動や音楽を通じた継続的なボランティア活動を賞するもので、学生自身が書式に則り必要資料を添えて申請する。審査会で選考された学生には、卒業式において学長から表彰状及び記念品が授与され、その功績が称えられる。また、授業外での実地的な音楽活動が学修活動としても有益である場合には、それを積極的に評価する目的から、所定の申請手続をすることにより「社会活動特別実習」として単位（実習：2単位）の認定も実施している。学生の出張演奏等の社会活動に対しては積極的に奨励している。

【国際交流・協力への取組みについて】

(1)過去3ヶ年(平成 16 年度～18 年度)の学生の海外教育機関等への派遣(留学〈長期・短期〉を含む)の状況を記述して下さい。

本学は 2004（平成 16）年度から、本学・大阪音楽大学・同大学院在学生の短期留学に対する助成制度を設けており、学生が専攻する実技のオーディション及び面接（語学力の診断を含む）審査の上、助成を行っている。本学において助成を受けた学生は、2005（平成 17）年度に 1 名である。

(2)過去3ヶ年(平成 16 年度～18 年度)の短期大学と海外教育機関等との交流の状況を記述して下さい。

本学は、併設の大阪音楽大学と共同で国際交流推進委員会を設け、海外教育機関との交流に全学的体制で取り組んでいる。2004（平成 16）年度に本学及び併設大学が、韓国の啓明大学校と「大阪音楽大学と啓明大学両大学間における相互理解のための覚書」に調印したことを受け、2005（平成 17）年 5 月に啓明大学校舞台芸術大学の学長と学生を招き、日韓学生交流演奏会（2 回）及び同舞台芸術大学の学長等による 2 つの講演を実施した。

また、2005（平成 17）年 4 月には、ドイツ・ヘッセン州ユース・ジャズ・オーケストラ（Landes Jugend Jazz Orchester Hessen）との日独交歓ジャズ・コンサート（ドイツ・ヘッセン州科学文化省、大阪ドイツ文化センター、大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館の全面協力）を、同 10 月には韓国の啓明大学校と中国の上海音楽学院の協力を得て、日中韓伝統音楽演奏会と日中韓伝統音楽レクチャーコンサートを実施した。

2006（平成 18）年度には上海音楽学院と提携に向け交渉を始め、2007（平成 19）年度初頭には交流提携協定文書に正式に調印した。

また、フィンランドのシベリウスアカデミーやドイツのワイマール音楽大学及びフランスのパリ・エコール・ノルマル音楽院との間で 2007（平成 19）年度中に提携すべく協議中である。

(3)過去3ヶ年(平成 16 年度～18 年度)の教職員の留学、海外派遣、国際会議出席等の状況を記述して下さい。

教員の海外留学・派遣

2004～2006（平成 16～18）年度

年度	時期	渡航先	所属 (専門)	目的
2004	8/4～8/20	フランス(ニース)、ドイツ	声楽	研修(ニース夏期国際アカデミー)
2005	7/1～9/30	ドイツ (ベルリン、シュトゥットガルト)	合唱	短期海外研修

	9/20～27	マレーシア	ピアノ	演奏活動
2006	7/6～7/13	イギリス (ロンドン、ギルドホール音楽院)	作曲	短期海外研修

【特記事項について】

(1)この《Ⅶ社会的活動》の領域で示した評価項目や評価の観点の他に、例えば高大連携等の他の教育機関との連携、外国人への日本語教育等、社会的活動について努力していることがあれば記述して下さい。

高大連携として、2003（平成 15）年度より大阪府立池田北高等学校の生徒を受け入れている。現在、聴講受け入れの科目は「音楽史（世界と日本の音楽を考える）」（音楽科前期開講科目）で毎年 10 名程度の生徒が本学音楽科に来校し聴講している。

地域貢献としては、2006（平成 18）年度より豊中市との間で、「サウンド・スクール」事業に関する協定を締結し、学生による豊中市立小・中学校への授業支援等の活動を開始している。

(2)特別の事由や事情があり、評価項目や評価の観点が求めることが実現（達成）できないときはその事由や事情を記述して下さい。

特になし。

Ⅷ 管理運営

【法人組織の管理運営体制について】

(1) 短期大学を設置する法人のトップである理事長は、短期大学の運営に対して適切にリーダーシップを発揮しているか、また短期大学に係る重要事項はどのような流れで決定し、その流れのなかで理事長はどのように関与しているかを、できれば理事長自身が率直に現状を記述して下さい。

学校法人大阪音楽大学の運営は理事長が代表するとともに最終責任を負っている。理事長は常勤であり、理事会と評議員会を主宰する。また、副理事長及び常任理事とともに日常的に本学をはじめ、法人を構成する各機関及び事務局との間に密接な連絡体制を保っている。本学の運営については教授会の決定に従って学長が運営責任を持つ。理事長と学長は理事会、常任理事会等を通じて常に連絡・協議を行っている。

(2) 過去3ヶ年(平成16年度～18年度)の理事会の開催状況(主な議案、理事の出席状況等を含む)を下表を例に開催日順に記述して下さい。加えて理事会についての寄附行為上の規定を記述して下さい。平成19年5月1日現在の理事・監事・評議員名簿等を準備し、理事の構成に著しい偏りが無いことをお示し下さい。また理事会議事録は必要に応じて閲覧いたします

(ア) 過去3ヶ年の理事会開催状況

2004～2006（平成16～18）年度

年	月	日	主な議案	出席者数 (名)	定数 (名)
2004	5	28	・理事及び監事の補任・常任理事会構成員 ・評議員補任 ・2005年度大阪音楽大学付属音楽幼稚園収容定員変更・園則変更 ・次期事務局長人事 ・2003年度事業報告及び決算報告 ・2004年度第1回補正予算案 ・株式会社の設立 ・理事辞任届 ・短期財政試算（2004～07年度） ・法人運営規模等の推移 ・90周年記念事業の方針及び準備経過	13 (内表決書提出3)	15
2004	12	1	・評議員の補任 ・株式会社の設立 ・理事の補任候補者 ・専任教職員の基本的労働条件の見直し ・国際交流事業の推進 ・第三者評価への対応 ・2005年度大学・短大・大学Ⅲ年次編入推薦入試並びに大学院入試の結果	14	15
2005	2	7	・理事の補任 ・株式会社の設立 ・大阪音楽大学学則及び同音楽専攻科規則変更 ・大阪音楽大学短期大学部学則及び同専攻科規則変更 ・大阪音楽大学大学院規則変更 ・私立学校法の改正に伴う代表理事登記 ・役員、評議員の定数見直し ・大学・短大の改組並びに入学定員変更・学部Ⅲ年次編入定員化 ・90周年記念事業企画	14	15
2005	3	22	・評議員の補任 ・大阪音楽大学音楽学部入学定員の変更並びに同学部Ⅲ年次編入学定員の設定 ・寄付金の募集 ・2005年度事業計画案及び同年度予算案 ・株式会社の設立 ・2005年度入学試験結果	15 (内表決書提出3)	15

2005	5	30	・大阪音楽大学音楽学部学則変更 ・2004 年度事業報告及び決算報告 ・短期財政計画案（2005～08 年度） ・2005 年度第 1 回補正予算案 ・法人の短期事業計画（2006～09 年度）策定に向けての方針 ・法人運営規模等の推移	15 (内表決書提出 2)	15
2005	7	27	・評議員の補任 ・理事の補任 ・役員定数の改定 ・評議員定数の改定 ・寄附行為の変更 ・法人の短期事業計画案（2006～09 年度）策定に向けての展開方針 ・労働条件の抜本的見直しに対する基本姿勢	14	15
2005	9	1	・理事の補任	15 (表決書決議)	15
2005	12	5	・役員定数の改定 ・評議員定数の改定 ・寄附行為変更 ・次期学長任命 ・大学人事委員会規程並びに短大人事委員会規程の制定 ・理事の補任 ・法人の短期事業計画（2006～09 年度）策定の展開方針に基づく「達成指標別事業項目」案（第 1 次） ・大学・短大推薦入学試験に係る同窓会特別推薦制度導入	14 (内表決書提出 2)	15
2006	1	26	・大阪音楽大学短期大学部学則変更	14 (表決書決議)	15
2006	3	15	・理事の補任 ・次期理事長互選 ・次期副理事長選任、次期常任理事会構成員選任 ・大阪音楽大学学則及び同音楽専攻科規則変更 ・大阪音楽大学短期大学部学則変更 ・大阪音楽大学大学院規則変更 ・法人の短期事業計画第 2 次案（2006～09 年度） ・2006 年度事業計画案及び同年度予算案 ・学校法人大阪音楽大学自己点検・評価組織規程の制定 ・2006-07 年度教学等執行部人事 ・株式会社テスタ活動報告 ・2006 年度入学試験結果	14 (内表決書提出 3)	定数 10～ 15 現員 14
2006	5	25	・理事及び監事の選任 ・次期副理事長選任、次期常任理事会構成員選任 ・評議員の選任 ・2005 年度事業報告及び決算報告 ・2006 年度第 1 回補正予算案 ・評議員互選理事選出 ・寄附行為変更認可 ・会計検査院実地検査 ・新人事制度具体化検討会議の発足 ・法人運営規模等の推移	14 (内表決書提出 2)	定数 10～ 15 現員 14
2006	12	7	・大阪音楽大学学則及び同音楽専攻科規則変更 ・大阪音楽大学短期大学部学則及び同専攻科規則変更 ・大阪音楽大学大学院規則変更 ・大阪音楽大学付属音楽幼稚園園則変更 ・大阪音楽大学短期大学の第三者評価実施 ・2007 年度大学・短大・大学Ⅲ年次編入推薦入学試験結果並びに大学院入学試験結果	13 (内表決書提出 1)	定数 10～ 15 現員 13

2007	3	15	・2006 年度第 2 回補正予算案 ・2007 年度事業計画案 ・2007 年度予算案 ・学校教育法の一部改正に伴う諸規程改正 ・高齢者雇用安定法の一部改正に伴う規程改正 ・学校法人大阪音楽大学事務局組織運営規程制定 ・新人事制度構築内容の方向性 ・大学・短大一般入学試験〔B 日程〕の導入 ・株式会社テスタ活動報告 ・2007 年度入学試験結果	13 (内表決書 提出 2)	定数 10～ 15 現員 13
------	---	----	---	----------------------	---------------------------------

(イ) 理事会についての寄附行為上の規定

学校法人大阪音楽大学寄附行為

(役員)

第 6 条	この法人に次の定数の役員を置く。 理事 10～15 人 監事 2 人 (理事長及び副理事長)
第 7 条	理事のうち 1 人は理事の互選により理事長となる。 2. 理事長は法令及びこの寄附行為に規定する職務を行い、この法人内部の事務を総括し、この法人の業務についてこの法人を代表する。 3. 理事長は必要な場合、理事会の同意を得て理事の内より副理事長を選任することができる。 4. 副理事長は理事長の職務を補佐し、理事長に事故あるとき又は理事長が欠けたときは理事長の職務を代理し、又は理事長の職務を行う。 (理事の選任)
第 8 条	大阪音楽大学の学長はその在職中理事となる。 2. 評議員のうちから選任される理事は 2 人とし、評議員の互選で定める。 3. 前 2 項の規定により選任された理事以外の理事はこの法人に関係のあるもの又は学識経験者のうちから評議員会の意見を聞いて理事会において選任する。 (役員任期及び補充)
第 11 条	役員(第 8 条第 1 項の規定により理事となる者を除く。この条中以下同じ。)の任期は 4 年とする。ただし、欠員が生じた場合の補欠の役員の任期は前任者の残任期間とする。 2. 役員は再任されることができる。 3. 役員はその任期満了の後でも後任者が選任されるまではなおその職務を行う。 4. この法人の理事又は監事のうちその定数の 5 分の 1 を超える者が欠けたときは 1 ヶ月以内に補充しなければならない。 (役員解任及び退任)
第 12 条	役員が次の各号の 1 に該当するに至ったときは、理事総数の 4 分の 3 以上出席した理事会において、理事総数の 4 分の 3 以上の議決及び評議員会の議決により、これを解任することができる。 (1)法令の規定又はこの寄附行為に著しく違反したとき。 (2)心身の故障のため職務の執行に堪えないとき。 (3)職務上の義務に著しく違反したとき。 (4)役員たるにふさわしくない重大な非行があったとき。 2. 役員は次の事由によって退任する。 (1)任期の満了。 (2)辞任。 (3)学校教育法第 9 条各号に掲げる事由に該当するに至ったとき。 (理事代表権の制限)
第 13 条	理事長たる理事以外の理事はすべてこの法人の業務についてこの法人を代表しない。 (理事長の職務の代理及び代行)
第 14 条	理事長に事故がある時又は理事長が欠けたときは、理事会の予め指定した他の理事が順次に理事長の職務を代理し、又は理事長の職務を行う。ただし、副理事長が選任されている場合にあっては第 7 条第 4 項の定めによる。 (理事会)
第 15 条	理事会は、学校法人の業務を決し、理事の職務の執行を監督する。 2. 理事会は理事をもって組織する。 3. 理事会は随時理事長が招集する。ただし、理事長は理事総数の 2 分の 1 以上から会議に付議すべき事項を示して理事会の招集を請求された場合には、その請求のあった日から 7 日以内にこれを招集しなければならない。 4. 理事会の議長は理事長とする。 5. 理事会は、この寄附行為に別段の定めがある場合を除くほか、理事総数の 3 分の 2 以上の

理事が出席しなければ会議を開き議決することができない。

6. 前項の場合において、理事会に付議される事項につき書面をもってあらかじめ意思を表示した者は出席者とみなす。

7. 理事会の議事は、法令及びこの寄附行為に別段の定めある場合を除く外、出席理事の過半数で決し、可否同数の時は議長の決定するところとなる。

(業務決定の特例)

第16条 次に掲げる事項については理事会における出席理事の3分の2以上の議決がなければならない。

(1) 予算、借入金（当該会計年度内の収入をもって償還する一時の借入金を除く。）、基本財産の処分、運用財産中の不動産及び積立金の処分並びに不動産の買受に関する事項

(2) 予算外の新たな義務の負担又は権利の放棄に関する事項

(3) 私立学校法第50条第1項第3号に掲げる事由による解散

(4) 残余財産の処分に関する事項

(議事録の作成)

第17条 議長は理事会の開催場所及び日時並びに議決事項及びその他の事項について議事録を作成しなければならない。

2. 議事録には出席理事全員が署名押印し、常にこれを事務所に備えて置かなければならない。

(常任理事会)

第18条 理事会は、理事会において決定したこの法人の業務並びに理事長の職務を円滑に遂行するため、理事会内部に常任理事会を置く。

2. 常任理事会は、理事長及び理事長が理事会の承認を得て任命した常任理事を以って組織し、その構成員数は理事定数の2分の1を超えないものとする。

3. 常任理事会の運営等については、別に定める「学校法人大阪音楽大学常任理事会規程」による。

(ウ) 理事の構成

寄附行為第6条により理事の定数は10～15人であるが、2007（平成18）年5月1日現在における理事の総数は13名であり、その中で本学の教職員、卒業者を除く学外の学識経験者は4名であり、積極的に外部有識者の登用を図っている。

(3) 理事会の下に理事会の業務を一部委任する常任理事会、幹部会等を置いている場合は、その名称と根拠規定、理事会との関係、構成メンバー等を記述して下さい。

本法人は、寄附行為第18条の定めにより、法人の業務並びに理事長の職務を円滑に遂行するため、理事会内部に常任理事会を置く。理事会と常任理事会の関係については、常任理事会は寄附行為並びに「常任理事会規程」の定めに基づき業務を執行している。以下に根拠規程、構成メンバーを記す。

学校法人大阪音楽大学常任理事会規程

第1条 この規程は寄附行為第18条第3項に基づいて定める。

第2条 常任理事会は、理事会が決定した法人の業務、並びに理事長の職務を円滑に遂行するため、次の事項を協議する。

(1) 理事会が決定した業務の執行にあたって必要な事項

(2) 理事会があらかじめ常任理事会の議に付託した事項

(3) 理事長の職務遂行にあたって、理事長から常任理事会に付議された事項

(4) 理事会に付議するために事前協議を要する事項

第3条 常任理事会は随時理事長が招集する。

第4条 常任理事会の議長は理事長とする。

第5条 常任理事会は、その開催場所、日時並びに審議内容等について議事録を作成する。

2. 議事録には出席常任理事全員が署名捺印し、常にこれを事務所に備えて置かなければならない。

第6条 この規程の変更は理事会の議を経て理事長が行う。

2007（平成19）年5月1日現在の常任理事会の構成メンバーは、西岡信雄理事長、永井俊一副理事長、鹿島正昭常任理事、中村孝義常任理事、水瀧征矢雄常任理事の5名である。

(4) 監事の業務についての寄附行為上の規定、平成 18 年度における監事の業務執行状況について、できれば監事自身が率直に記述して下さい。

(ア) 監事の業務についての寄附行為上の規定

学校法人大阪音楽大学寄附行為

(監事の職務)

第 10 条 監事は次の各号に掲げる職務を行う。

- (1) この法人の業務を監査すること。
- (2) この法人の財産の状況を監査すること。
- (3) この法人の業務又は財産の状況について、毎会計年度、監査報告書を作成し、当該会計年度終了後 2 ヶ月以内に理事会及び評議員会に提出すること。
- (4) 第 1 号又は第 2 号の規定による監査の結果、この法人の業務又は財産に関し不正の行為又は法令若しくは寄附行為に違反する重大な事実があることを発見したときは、これを文部科学大臣に報告し、又は理事会及び評議員会に報告すること。
- (5) 前号の報告をするために必要があるときは、理事長に対して評議員会の招集を請求すること。
- (6) この法人の業務又は財産の状況について、理事会に出席して意見を述べること。

(イ) 2006 (平成 18) 年度における監事の業務執行状況

監事は、寄附行為第 10 条に定める職務を適切に執行するためすべての理事会に出席し、法人業務、財産状況を把握、必要に応じ意見を述べるとともに、同条第 1 項第 1 号・第 2 号に基づいて、2006 (平成 18) 年度において実施した法人業務及び財産監査について正確に執行されているものと判断し、その旨を理事会及び評議員会に報告している。

なお、毎年 5 月に監査法人から理事長、財務担当理事に対する監査実施報告の際、監事も同席し、報告を受ける体制がとられており、外部監査との整合性も確認している。

また、文部科学省が開催する監事研修会には、毎年出席し知識習得に努めているが、「私立学校法」の改正に関連し、「学校法人と監事のあり方」について及び「監事の役割」に関した事項があり、広範囲な職務について、法人経営と教学の関係を踏まえた役割との関係が、今後の重要な課題となる。

(5) 平成 18 年度の評議員会の開催状況(主な議案、評議員の出席状況等を含む)を開催日順に記述し、評議員会についての寄附行為上の規定を記述して下さい。

(ア) 評議員会の開催状況

2006 (平成 18) 年度

年	月	日	主な議案	出席者数 (名)	定数 (名)
2006	5	24	・ 評議員互選理事選出 ・ 理事及び監事の選任 ・ 2005 年度事業報告及び決算報告 ・ 2006 年度第 1 回補正予算案 ・ 寄附行為変更認可 ・ 理事長選任 ・ 副理事長選任 ・ 常任理事会構成員 ・ 会計検査院実地検査 ・ 新人事制度具体化検討会議の発足 ・ 法人運営規模等の推移	31 (内委任状 提出 6)	21～31 現員 31

2007	3	9	・2006 年度第 2 回補正予算案 ・2007 年度事業計画案 ・2007 年度予算案 ・新人事制度構築の方向性 ・株式会社テスタ活動報告 ・2007 年度入学試験結果	28	21～31 現員 30
------	---	---	--	----	----------------

(イ) 評議員会についての寄附行為上の規定

学校法人大阪音楽大学寄附行為

(組織)

第 19 条 評議員会は次に掲げる評議員をもって組織し、評議員の定数は 21～31 人とする。

- (1) この法人の職員のうちから選任された者 7～12 人
 - (2) この法人の設置する学校（この法人の前身者が設置した学校を含む。）を卒業した者で年齢 25 年以上の者のうちから選任された者 5 人
 - (3) 大阪音楽大学の学長及びこの法人の理事長
 - (4) この法人に関係ある者又は学識経験者 7～12 人
2. 前項第 1 号及び第 3 号に規定する評議員は、学長又はその職員の地位を退いた時は評議員の職を失うものとする。

(評議員の選任)

第 20 条 前条第 1 項第 1 号第 2 号及び第 4 号に規定する評議員は理事会において選任する。

(評議員の任期)

第 21 条 評議員（第 19 条第 1 項第 3 号に規定する者を除く。この条文中以下同じ。）の任期は 4 年とする。ただし、欠員が生じた場合の評議員の任期は前任者の残任期間とする。

2. 評議員は再任されることができる。
3. 評議員はその任期満了の後でも後任者が選任されるまではなおその職務を行う。

(評議員会)

第 22 条 評議員会は理事長が招集する。

2. 評議員会の議長は理事長とする。
3. 理事長は評議員総数の 3 分の 1 以上の評議員から会議に付議すべき事項を示して評議員会の招集を請求された場合には、その請求のあった日から 20 日以内にこれを招集しなければならない。
4. 評議員会は評議員総数の過半数の出席がなければその議事を開き議決することができない。
ただし、評議員会に付議される事項について書面をもってあらかじめ意思を表示した者は出席者とみなす。
5. 評議員会の議事は出席評議員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
6. 前項の場合において議長は評議員として議決に加わることが出来ない。

(諮問事項)

第 23 条 次の各号に掲げる事項については、理事長において、あらかじめ評議員会の意見を聞かなければならない。

- (1) 予算、借入金（当該会計年度内の収入をもって償還する一時の借入金を除く。）及び基財産の処分並びに運用財産中の不動産及び積立金の処分
- (2) 事業計画
- (3) 予算外の新たな義務の負担又は権利の放棄
- (4) 収益を目的とする事業に関する重要事項
- (5) 寄附金品の募集に関する事項
- (6) その他この法人の業務に関する重要事項で理事会において必要と認めるもの

(意見具申等)

第 24 条 評議員会はこの法人の業務若しくは財産の状況又は役員の業務執行の状況について役員に対して意見を述べ、若しくはその諮問に答え、又役員から報告を徴することができる。

(議事録)

第 25 条 議長は評議員会の開催場所及び日時並びに議決事項及びその他の事項について議事録を作成しなければならない。

2. 議事録には議長及び出席評議員のうちから互選された評議員 2 人以上が署名押印し常にこれを事務所に備えて置かなければならない。

(6) 法人の管理運営について今後改善や変更をしたいと考えている事項があれば記述して下さい。また法人が抱えている問題あるいは課題について差し支えない範囲で記述して下さい。

私立学校法改正に伴う改善項目については、すでに次のように改善を実施している。

- ① 寄附行為の改正により理事長のみが代表権者を持つと定め、代表権の登記を行った。
- ② 寄附行為を改正し、理事会を法人決定機関とし、評議員会を諮問機関とする、法人組織の機能の明確化を行った。
- ③ 評議員について寄附行為に「本法人に関係ある者又は学識経験者」からの選任を規定するが、常にこの中に学外からの学識経験者を登用している。
- ④ 監事の監査対象として「法人の財産の状況及び理事の執務状況」に「法人の業務」を加えた。—2006（平成 18）年 3 月以降—
- ⑤ 法人では、過年度から上記に基づき監事を選任しているが、寄附行為を改定し、監事の選任を学外からとし、かつ役員・評議員との兼任を排除した。—2006 年（平成 18）3 月以降—
- ⑥ 監事はすべての理事会に出席している。
- ⑦ 財務情報を公開し、法人公式ホームページに掲載している。
- ⑧ 2007～2010（平成 19～22）年度短期事業計画及び短期財政計画を作成し、評議員会において意見を聴取し、理事会において承認・決定した。
- ⑨ 2006（平成 18）年度事業報告書を作成し、評議員会及び理事会において報告した。また同事業報告書を法人公式ホームページに公開している。
- ⑩ 2007（平成 19）年度事業計画書を作成し、評議員会において意見を聴取し、理事会において承認・決定した。
- ⑪ 寄付金「大阪音楽大学教育振興資金」募集を実施中である。

募集期間＝2005（平成 17）年 10 月 15 日～2010（平成 22）年 10 月 14 日

今後の法人の管理運営は、本学が一層高等教育機関としての負託に応えるために、これまで進めてきた法人事業計画の推進による組織的な法人運営体制の確立と教職員の働きがいのある新人事制度の構築をはかる。

【教授会等の運営体制について】

(1) 短期大学の教育・研究上のトップである学長は、短期大学の教育活動全般について適切にリーダーシップを発揮しているか、また短期大学に係る教育・研究上の事項はどのような流れで決定し、その流れのなかで学長はどのように関与しているかを、できれば学長自身が率直に現状を記述して下さい。なお学長選考規程等があれば訪問調査の際に拝見することがありますのでご準備下さい。

学長は、本学における教育理念の確立、育成すべき学生像の明確化、研究体制の充実など、教育研究活動全般の推進について、執行部を形成する副学長、教育、学生、演奏の各部長の補佐を受けながら、中心的な役割を果たしている。学長によって提起された基本的方向性に基づく教育、研究に関する様々な事項は、教授会の了解のうえで、まずプロジェクト・チームなどによってさらに精査、検討された案として具体化される。これを執行部と各専攻・科目教育主任によって組織された運営会議で徹底審議を加えた上で教授会に上程、審議を経て決定するという手順を踏んでいる。

学長の主導による問題提起を、学長が主宰する何段階にも渡る民主的な会議で徹底討議を加えることによって、教育研究活動全般にわたって、適切な決定がなされていると考える。またそれらとは別に、学長が全学生に直接語りかける「学長特別講義」を 2007（平成 19）年度に開催し、直接学長の教育理念を伝えたり、専任、非常勤を問わず、教職員の声を直接に吸い上げる「学長を囲む会」などを開催し、教職員の声に耳を傾けるよう努めて

いる。

(2)教授会についての学則上の規定(教授会で議すべき事項等を含む)、平成 18 年度における開催状況(主な議案、構成メンバー、出席状況等を含む)を年月日の順に記述して下さい。なお、学則を添付して下さい。

(ア) 教授会についての学則上の規定

教授会についての学則上の規定は下記の通りである。また、「大阪音楽大学短期大学部教授会運営規程」(参考資料 資料 10 学校法人大阪音楽大学規程集 所収)に教授会の運営規則を定めている。

大阪音楽大学短期大学部学則

- (教授会)
第 47 条 本学に教授会を置く。
- (教授会の構成)
第 48 条 教授会は学長・教授・准教授・講師・助教をもって構成する。
- (招集、議長、成立の要件、定例および臨時教授会)
第 49 条 教授会は学長がこれを招集し、議長は教授会構成員の中から互選する。
2. 教授会は 3 分の 2 以上の出席をもって成立し、その過半数の賛成により可決する。
3. 教授会は定例として月 1 回招集する。ただし、学長または議長が特別に必要と認めたとき、あるいは 3 分の 1 以上の構成員から請求があるときは臨時に招集しなければならない。
4. 教授会の運営にあたって必要な事項は別に定める。
- (審議決定事項)
第 50 条 教授会において審議決定する事項は下記のとおりとする。
(1) 学則の制定および改定に関する事項
(2) 授業および研究に関する事項
(3) 学生生活および勉学環境の整備に関する事項
(4) 試験・入退学・卒業・賞罰等学生の身分に関する事項
(5) 学長・名誉教授・教授・准教授・講師・助教・助手・その他授業を担当する者の任免について理事会に推薦する事項
(6) 他大学または短期大学との間の単位互換等、他の教育機関との協定に関する事項
(7) その他大学に関する重要な事項

(イ) 教授会の開催状況

大阪音楽大学短期大学部教授会

2006 (平成 18) 年度

年	月	日	主な議案	出席者数 (名)	定数 (名)
2006	4	24	学籍異動、留学生、単位互換科目及び科目等履修生履修許可、教員人事、評議員候補者推薦委員選出、自己点検・評価報告書 2002～2004 年度版発行報告、創立 90 周年記念事業報告	36	36
2006	5	22	学籍異動、奨学生採用、短期学外研修褒賞、研究助成、2007 年度入試要項、卒業生の進路状況、音楽人材紹介等の実績、啓明大学校(韓国)との交流演奏会	33	36
2006	6	19	学籍異動、2007 年度授業日程、2005 年度事情別学籍異動件数と総括、個人情報漏洩等の防止、2007 年度短期大学基準協会による第三者評価実施申請	32	36
2006	7	24	学籍異動、2007 年度短大専攻科カリキュラム変更・規則変更(案)、教員人事、カリキュラム改革等の着手、2007 年度音楽学部第 3 年次編入推薦入試受験適性審査結果	32	36

2006	9	25	2007 年度音楽学部第 3 年次編入者推薦、2006 年度前期科目等履修生単位認定、2006 年度前期卒業・進級判定、学籍異動、2007 年度カリキュラム変更、2007 年度学則変更（案）、学科目受講人数による開講条件の設定、教員人事、短大進学実技適性テスト結果、教職員の名札着用	35	36
2006	10	30	学籍異動、教員職位変更に関する学則変更（案）、教員人事、2007 年度大学祭への協力、豊中市教育委員会との連携教育に関する覚書締結、授業補助者	32	36
2006	11	20	学籍異動、2007 年度推薦入試実施方法、教員人事、実技試験における講評、2007 年度短期大学基準協会による認証評価実施決定報告、短大改組に関する協議、成績評価システムの検討、年度受講単位数の上限設定、「建学の精神」碑の完成、G P プロジェクトの計画	29	36
2006	11	28	2007 年度音楽科推薦入学試験判定、2007 年度時間割	32	36
2006	12	18	学籍異動、国際交流推進委員会規程（案）、2006 年度研究活動報告・研究助成申請結果、新入生ガイダンス・オリエンテーションへの積極的参加、学長プロジェクト進捗状況報告	33	36
2006	12	25	短大副学長人事、2007 年度入試全般に関する討議	29	36
2007	1	29	学籍異動、2007 年度大阪音楽大学との単位互換科目、大阪私立短期大学協会単位互換事業、教員人事、2007 年度一般入試実施要項	31	36
2007	2	9	2007 年度音楽科一般入学試験判定	34	36
2007	2	26	2007 年度転入学者の決定、2007 年度短大履修規程、2008 年度一般入学試験（3 月実施）について、教員人事、る学則変更に伴う諸規程等の改定（案）、学籍異動、2006 年度卒業演奏会出演者	33	36
2007	3	7	2007 年度専攻科入学試験判定	33	36
2007	3	7	2006 年度科目等履修生単位認定、2006 年度単位互換科目単位認定、2006 年度音楽科卒業判定・専攻科修了判定、2006 年度進級判定、教員人事	33	36
2007	3	19	学籍異動、2006 年度優秀賞・音楽社会活動賞、役職の使命・任命・任期等に関する要綱（案）、会議体の役割・構成員等に関する要綱（案）、教員人事、研究助成規程（案）／音楽博物館規程（案）／付属図書館規程（案）、「いずみホール」との提携	32	36

(3) 学長もしくは教授会の下に教育・研究上の各種の委員会等を設置している場合は、その名称と根拠規程、主な業務、構成メンバー、平成 18 年度の開催状況等を記述して下さい。

名称	根拠規程	主な業務	構成員	2006（平成 18）年度の開催状況等	備考
運営会議	会議体の役割・構成員等に関する要綱	短大教育の基本方針をはじめ教育運営諸問題、カリキュラム編成、教育システム、成績評価基準及び、入試全般の検討、特別実習など。関係事務部門との連携。自己点検評価統括委員会との連携	学長、副学長、教育部長、学生部長、演奏部長、専攻科主事、アドミッション・センター長、各専攻科目教育主任、学務事務部門長	2006 年 4 月 14 日、5 月 1 日、5 月 29 日、6 月 26 日、7 月 3 日、9 月 13 日、10 月 2 日、11 月 2 日、12 月 4 日、2007 年 1 月 12 日、2 月 5 日、3 月 5 日	
短期大学部人事委員会	短期大学部人事委員会規程	短大人事委員会規程第 1、2 条。必要に応じて下部組織を置く。	学長、副学長、短大専任教員によって選書された 5 人の委員	2006 年 4 月 17 日、5 月 15 日、6 月 12 日、7 月 11 日、7 月 21 日、9 月 19 日、10 月 23 日、11 月 13 日、12 月 11 日、12 月 18 日、2007 年 1 月 22 日、2 月 20 日、3 月 7 日、3 月 12 日	
演奏委員会	会議体の役割・構成員等に関する要綱	学内の演奏会等全般に関する立案・実施の支援及び調整。大学・短大定期演奏会等全学的行事の企画・立案。	演奏部長、各専攻毎に学長・演奏部長から推薦された委員、学務事務部門長	2006 年 4 月 24 日、5 月 22 日、6 月 19 日、7 月 24 日、10 月 23 日、12 月 18 日、2007 年 2 月 26 日	
学生生活委員会	会議体の役割・構成員等に関する要綱	学生生活全般の支援、学籍異動審議、奨学金給付に関する検討、学生相談、新入生ガイダンス・フレッシュマンキャンプの企画運営、学生の自主演奏活動支援、学生寮の諸問題、学生自治会	学生部長、学長・学生部長から推薦された委員 6 名程度、学務事務部門長	2006 年 4 月 17 日、5 月 2 日、5 月 12 日、6 月 12 日、7 月 18 日、9 月 19 日、10 月 23 日、11 月 13 日、12 月 11 日、2007 年 1 月 22 日、2 月 19 日、3 月 12 日	

研究委員会	研究助成規程、図書館規程、博物館規程	教員の研究のための諸問題の検討。研究助成制度に係る募集、申請の可否、学長・理事長への提案。附属機関間の共通課題の検討。研究紀要の発刊。	研究部長、図書館長、音楽博物館長、全教育領域から推薦された委員（8人）、研究事務部門長	2006年4月17日、5月29日、7月3日、9月25日、10月23日、11月13日、12月18日、2007年1月22日、2月19日、3月19日	
専攻科運営委員会	短期大学部専攻科規則	カリキュラム、入学試験・学年末試験、その他教育に関する事項	短大専攻科主事、短大副学長、短大教育部長、各専攻から推薦された委員、学務事務部門長	2006年4月24日、5月22日、6月12日、9月12日、10月23日、11月20日、12月18日、2007年1月15日	
国際交流推進委員会	国際交流推進委員会規程	海外の大学・研究機関等との国際交流推進	学長並びに事務局長が推薦する若干名	2006年5月18日、6月20日、7月24日、9月11日、10月18日、11月22日、2007年2月9日、3月19日	
アドミッション事業委員会	会議体の役割・構成員等に関する要綱	アドミッション諸活動の推進、入試実施・運営の検討、受験講座・入試説明会等の運営、音楽普及活動の推進、入試関連情報収集	担当理事、センター長、センター長の推薦を受けた理事長任命委員5名程度、事務部門長（あるいは同部門長が指示する担当職員）	2006年4月17日、5月29日、7月24日、9月19日、10月23日、12月11日、2007年1月15日、2月19日、3月19日	※
エクステンション事業委員会	会議体の役割・構成員等に関する要綱	在学生への進路支援、インターンシップへの取組み、リカレント教育・生涯教育、卒業生人材派遣、卒業生への演奏機会提供、演奏員、留学・コンクール情報の提供	担当理事、センター長、センター長の推薦を受けた理事長任命委員5名程度、エクステンション事務部門長	2006年4月24日、5月29日、6月26日、7月24日、9月25日、10月30日、11月27日、12月25日、2007年1月15日、2月19日、3月19日	※
オペラハウス運営委員会	会議体の役割・構成員等に関する要綱	複数年にわたる事業計画の策定、オペラハウス企画演奏会の実施・運営の検討、オペラハウス管弦楽団・合唱団の活動企画・運営	担当理事、オペラハウス館長、エクステンション・センター長、演奏部長、オペラハウス館長推薦委員3名程度、エクステンション事務部門長	2006年4月20日、6月15日、7月24日、9月21日、11月30日、2007年1月30日、2月26日、3月19日	※
自己点検評価統括委員会	自己点検・評価組織規程	自己点検・評価組織規程第8条3項（自己点検評価に係る全学的な遂行・実施の統括）。必要に応じて下部組織を置く。	自己点検評価部長、大学副学長、短大副学長、担当理事、全自己点検評価委員長、短大ALO、事務局長、企画事務部門長	2006年5月1日、5月22日、7月20日、19月25日、11月6日、2007年1月29日、2007年2月27日	※
規程整備委員会	会議体の役割・構成員等に関する要綱	教授会・理事会との連携による規程の整備。	担当理事、学長から推薦された委員2名程度、企画事務部門長、事務局長から推薦された委員2名程度	2006年4月19日、6月5日、9月13日、10月19日、11月15日、2007年1月15日、2月1日、3月12日	※
人権委員会	人権委員会規程	人権問題の啓発、人権に関わる事象の検討、ハラスメント防止の啓発	担当理事、学長から推薦された教授会構成員4名、事務局から推薦された事務職員2名	2006年4月25日、11月27日	※
短大自己点検・評価委員会	自己点検・評価組織規程	短期大学部音楽科の自己点検・評価報告書報告書作成	短大自己点検・評価委員会委員長、委員4名	2006年5月1日、5月22日、6月22日、7月18日、9月29日、2007年1月11日～17日、2月15日～21日、3月15日～20日	
短大専攻科自己点検・評価委員会	自己点検・評価組織規程	短期大学部専攻科の自己点検・評価報告書報告書作成	短大自己点検・評価委員会委員長、委員4名	2006年5月1日、6月12日、9月12日、1月15日、3月15日	

※：本法人設置委員会

(4)短期大学の運営全般について抱えている問題あるいは課題について差し支えがない範囲で記述して下さい。

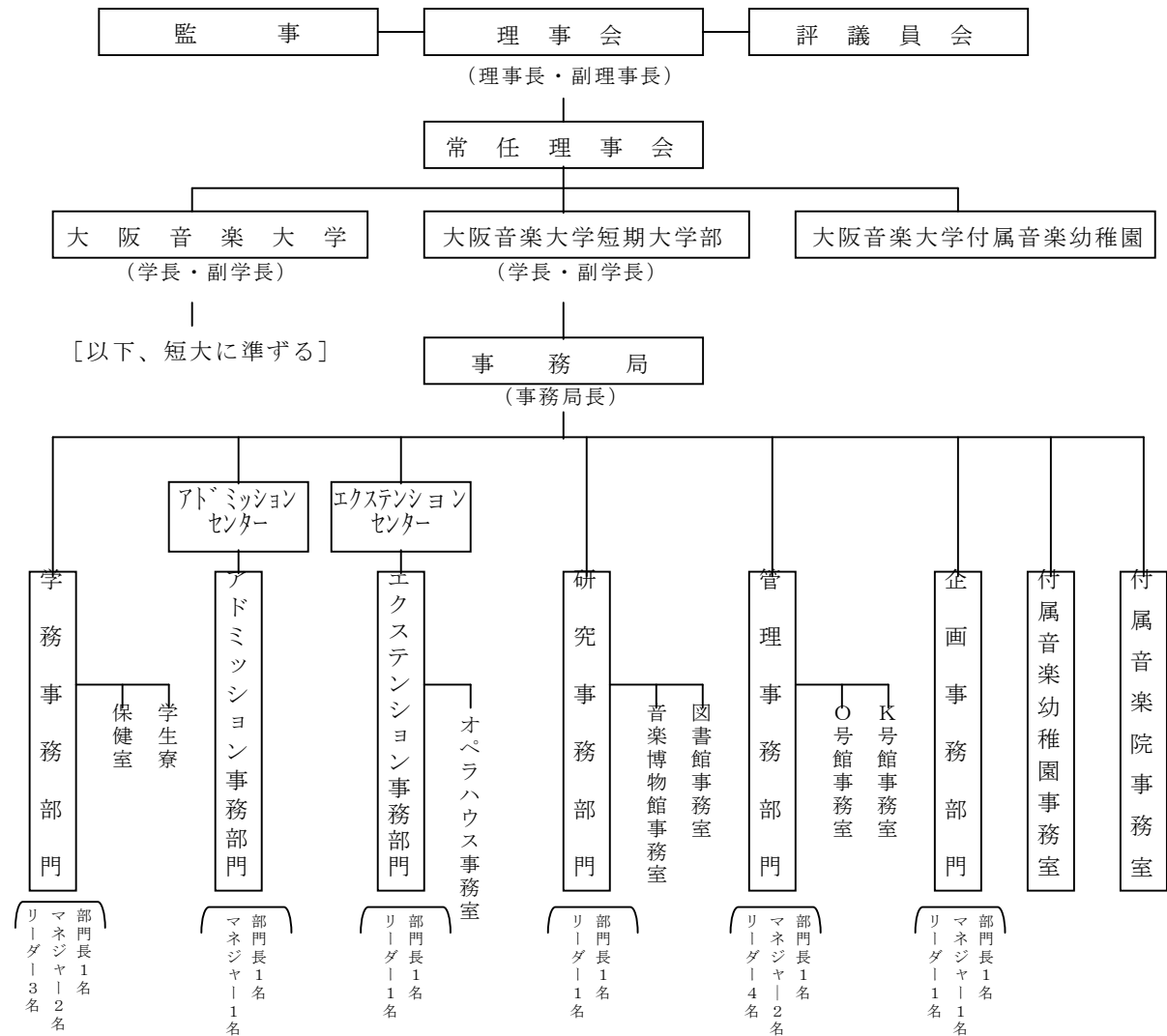
特になし。

【事務組織について】

(1)現在の法人全体の事務組織図を記載し、その中に短期大学の事務部門を記入して下さい。また組織図には短期大学の事務部門の役職名（課長、室長相当者以上。兼務の有無を含む）、各部門の人員（専任・兼任の別を含む）、各部門の主な業務を含めて記入して下さい。また事務組織が使用している部屋等は、機器・備品を含めて訪問調査の際に案内いただきます。

下表に本学における事務組織の概要を図示する。

事務機構図



2007（平成 19）年度事務職員数

5月1日現在

	大阪音楽大学 短期大学部	大阪音楽大学	大阪音楽大学 付属音楽幼稚園	小計
副理事長		1		1
事務局長（局長付を含む）		2		2
学務事務部門	9	17		26
アドミッション事務部門	1	3		4
エクステンション事務部門	4	6		10
研究事務部門	4	6		10
管理事務部門	8	14		22
企画事務部門	3	8		11
付属音楽幼稚園事務室			1	1
付属音楽院事務室		1		1
計	29	58	1	88

2006（平成 18）年 5 月 1 日付の本学発令の事務職員は 30 名であるが、校地及び校舎が大阪音楽大学と共有であること、また本法人全体の規模が約 1,728 名（内短期大学部音楽科は 554 名、同専攻科は 25 名）であること等を大きな要因として、大学発令の事務職員 59 名（本法人が 100%出資する株式会社「(株) テスタ」への出向者を除く。）と協働して業務を遂行している。学生の多様化対応の増加並びにこれまでの学生サービスの維持と向

上に向けて、アウトソーシングの導入を含め業務の効率化を進めていかなければならない状況である。

以下に各事務部門が取り扱う業務内容を示す。

① 学務事務部門

学修・教育・演奏に関する業務、並びに学生生活・課外活動、福利厚生全般にわたる在学中の学生に係る業務を担当する。在学中はもとより卒業後も成績証明の発行・教員免許についての相談並びに科目等履修などを取り扱っている。なお、学生のあらゆる問い合わせ等に応えられる総合窓口として、学務センターを開設している。

② アドミッション事務部門

入試に関する業務全般を担当する。入学志願者・関係指導者・保護者・高等学校への情報サービスを提供する業務並びに在学生のうち内部進学希望者に対して学務センターを介して情報を提供する業務などを行う。

③ エクステンション事務部門

在学生に対するインターンシップなどの学外活動及び就職活動などの支援業務全般を担当する。卒業生の活躍機会の開拓並びに本学が音楽教育機関として社会に提供できる事業の企画と提供に関する業務全般を担当する。また、ザ・カレッジ・オペラハウス主催・共催演奏会に関する業務を担当する。

④ 研究事務部門

本学教員の研究全般に必要な事務及び、本学付属機関（図書館・音楽博物館）の事務を担当する。この他、在学生、教職員、学外研究者に対し研究支援のためのサービス業務などを行う。

⑥ 管理事務部門

財務・施設・人事の管理に必要な事務全般並びに、事務機構全体のための事務用コンピュータ・ネットワークの整備・管理業務などを担当する。

⑦ 企画事務部門

理事会並びに学長等の教学運営責任者の業務執行に必要な事務全般を担当する。法人関連の監督官庁への届出・申請の事務、対外重要契約書類、対外広報の統括・広報誌の作成などを行う。

⑦ 付属音楽幼稚園事務室

付属音楽幼稚園に係る業務を行う。

⑧ 付属音楽院事務室

付属音楽院に係る業務を行う。

(2)事務職員の任用(役職者の任免を含む)について現状を訪問調査時にご説明下さい。

現在、各事務部門の業務量や業務内容からみた各事務部門の専任事務職員適性配置人数は定めていない、退職者の一部補充という形で現状の職員数を確保してきた。任用にあたっては、事務局会議にてその目的を確認した上で、事務職員の年齢構成を踏まえながら、新卒採用あるいは中途採用を決定している。いずれも一般公募で実施する。選考にあたっては、履歴書や成績証明書等の提出書類と作文等の書類審査の上、複数回の面接を実施している。

事務職員の異動（配置転換）は、組織の活性化、能力開発、適材適所等を目的として、同一部門に5年以上勤務する者を対象に、6月に実施することを原則としている。事務職員の各種職制に係る任期は、「事務局運営規程」によって4年と定め、2000（平成12）年9月の新事務機構発足と同時に開始し、2004（平成16）年9月1日に第2期—2008（平成20）年5月31日まで一に入った。

今後の課題として、各事務部門の業務量や業務内容からみた各事務部門の専任事務職員適性配置人数を策定したい。また、現状は事務局会議の申し合わせ事項で運営しているが、事務職員任用基準や昇格基準などを早急に整備する必要がある。

(3)事務組織について整備している諸規程名を列記して下さい。なお諸規程等は訪問調査の際に拝見することがありますのでご準備下さい。

事務組織については、学校法人大阪音楽大学として「事務局組織運営規程」、「事務局会議運営規程」、「文書取扱規程」、「公印規程」、「文書保存基準について」等を整備し、これに基づき業務を行っている。業務分掌は「事務局組織運営規程」別表に明文化している。今後の課題として、一部の規程については、現事務局に対応する見直しを行う必要がある。

(4)決裁処理の概要と流れ、また公印や重要書類(学籍簿等)の管理、防災の状況、情報システムの安全対策等の現状を記述して下さい。

学籍、成績認定、卒業判定などの教学上の重要事項やカリキュラム改定など、履修関係事項、短期大学部の方向性等については、運営会議や各種委員会で審議された後、短大教授会で決定している。

稟議書、企画書、出張稟議書、予算執行等については、事務局長通達により決裁者や決済ルートが定められており、当該通達に基づき執行している。

公印については「公印規程」に基づき管理され、文書については「文書取扱規程」を定めている。現在のその文書保存基準については見直しを行っている。

防災対策関係では、気象警報発令時や電車ストライキ時の対応については内規を定めているほか、「自衛消防隊規程」に基づき定期的に消防訓練や救命講習を実施している。また、学生寮では毎年消防訓練や防犯講習を実施している。

情報セキュリティの面に関しては、個人情報に係わる指針を遵守するとともに、「情報セキュリティポリシーに関する規程」を定めている。特に、学務事務部門に設置している学生の各種情報を管理する教務システムを使用するには個々の業務用パソコンに使用制限を設けることで、権限を有する教職員しか使用できない安全対策を講じている。

なお、本法人において発生または発生することが予想される様々な事象に伴う危機に、迅速かつ的確に対処するため、2007（平成19）年度に入り「危機管理規程」を新たに制定した。

(5)事務職員は教員や学生から支持され信頼されているか、できれば事務組織の責任者(事務局長等)が現状を率直に記述して下さい。

2003（平成15）年まで毎年、学生生活実態調査を実施し、学生生活の実態を調査するとともに学生からの意見や要望を聴取してきたが、各種自己点検のためのアンケート調査が頻繁に行われることになったため、重複した内容も多く、学生の負担を考え同調査は現在行っていない。しかしながら学生サービス向上を目指し、2004（平成16）年12月に事務

局会議のもとに設置された事務機構の自己点検作業チームが、事務機構に対する学生アンケートを実施した。この集計結果によると、各窓口における対応の総合的満足度において「悪かった」が 38.8%となっており、約 1/3 を占めている。「悪かった」という回答の内容について検討を要するが、結果としてこの割合を減少させなければならない。今後、学生に対する説明責任が強く求められることが予想されるため、この点を踏まえ組織的に対策を講じる必要がある。学生対応の研修も強化すべきである。

現在は授業評価アンケート調査等における自由記述から学生の意見や要望を吸収している。今後、学生側の負担を最小限にする実施方法を検討するとともに、組織的な調査を行わなければならない。また、学生自治会及び学生寮の豊南寮運営委員会も意見聴取の場となっている。なお、後援会総会が毎年6月に本学で開催されているが、この折にも保護者の立場からの意見を聴取し、改善可能な事項は実行している。学生個人からの様々な質問については学務センターに「質問カード」を提出してもらっている。

(6)事務組織のスタッフデベロップメント(SD)活動(業務の見直しや事務処理の改善等、事務職員的能力開発、内部研修、外部への研修等)の現状を記述して下さい。

事務機構の意志決定機関である事務局会議のもとに、2004（平成 16）年 1 月に「事務機構の自己点検作業チーム」を編成し、2000（平成 12）年 9 月に改革した事務機構について自己点検の作業を開始、2004（平成 16）年 5 月 31 日に、「事務機構の自己点検作業について（中間報告）～短期構想点検結果報告」が提出された。この中間報告を補完するための情報収集及び分析を行うことを目的に、2004（平成 16）年 9 月に「第 2 次事務機構の自己点検作業チーム」を編成した。

この報告書には、学生サービスの向上を視野に現事務機構における業務の効率化を図ることを目的に、短期的な構想と中長期的な構想に分けて改革案が提起された。その中で、各事務部門内及び部門間の問題点が詳細な事項も含め指摘されているが、残念ながら、報告書の内容を事務局会議において検討するととどまり全てを改善する段階にまで至っていない。また、本学を取り巻く社会的環境から、専任事務職員数が減少している。各事務部門内の事務分掌を見直しながら、可能なものは派遣社員や業務委託などのアウトソーシング化を行っているが、その要となる専任事務職員の役割が一層重要となる。そのために、専任事務職員に対する能力開発や研修を効率的に、体系的に実施する必要がある。

(7)短期大学の事務組織が抱えている問題あるいは課題について差し支えがなければ記述して下さい。

本学における役職者の役割については、内規において「役職の使命、任命、任期等に関する要綱」を定め、具体化されている。しかしながら、個々の役職者間の関わりについては明文化したものがなく、これまでの慣行で運営している。社会動向を見据えた本学の事業計画を実現していくためには、諸策が組織として体系的にかつ効果的に実施されることが求められ、各役職者間の関わりと連携が重要となる。たとえば、理事会執行部と教学執行部、教員役職者と事務局長、教員役職者と事務部門長などの関わりについて明確な組織図（指示・命令系統図）の整備が今後の課題である。

【人事管理について】

(1)教職員の就業について、現在、短期大学が抱えている問題あるいは課題について差し支えない範囲で記述して下さい。なお、教職員の就業についての規程(就業規則、給与規程等)を訪問調査の際にご準備下さい。

教員の服務規律、就業時間、休暇、異動、休職等は、「就業規則」(参考資料 資料 10 学校法人大阪音楽大学規程集 所収。本項の各規程について同じ。)に、定年は「定年規程」により運用している。又、給与は「給与規程」に拠って運用している。しかし、専任教員の勤務日数や労働時間についての詳細な基準は明確とは言えず、教員間の格差は大きい。労働条件を抜本的に見直す作業は、現在理事会において進めている。

専任職員の服務基準・就業時間・休暇・任用・異動・休職などは「就業規則」、定年は「定年規程」、給与は「給与規程」によって運用している点は教員と同様である。

職員の勤務体制は定時勤務体制となっているが、今後は業務によっては、変形時間労働制で対応する必要性が一層高まると考えられる。

(2)法人(理事長及び理事会等)と短期大学教職員の関係について、できれば理事長及び学長がそれぞれ記述して下さい。

理事会は、学内 L A N への「法人短期事業計画」と財政状況の開示、専任教職員への「法人運営説明会」の開催(2007 年からは年 2 回定期的に開催を予定)、学内教職員組合との団体交渉・事務折衝、「教職員学内報 大音あれこれ」への理事長による年頭所信の執筆、年度当初教授会での挨拶等の機会を通じて、法人の活動や運営方針に対して教職員の理解が得やすい学内環境の維持に努力している。また、「法人短期事業計画」(2007～2010(平成 19～22)年度)の策定に際しては、理事会が提示した創立 100 周年(2015(平成 27)年)の展望を踏まえて、教学関連事業をはじめ各事務部門から申請された事業を包括して検討された。今後とも相互理解や協力関係をさらに密にし、学内におけるあらゆる環境の向上に努めたいと考えている。

選挙によって選出された学長は、同時に「寄附行為」に基づく第 1 号理事として理事会の一員となるが、教学分野を代表するものとして、教授会並びに教職員の意向を理事会に伝え、よりよい教育研究環境を整えるための役割を果たさねばならない。理事長をはじめとする理事会が、学長が主導する教育研究活動全般について深い理解を示していることから、法人と教職員の関係は概ね良好な状態にあると考える。今後とも相互理解や協力関係をさらに密にし、学内におけるあらゆる環境の向上に努めたいと考えている。

(3)教員と事務職員の関係について、できれば学科長等及び事務局長がそれぞれ記述して下さい。

法人運営並びに大学運営の円滑な遂行のために、教員と事務職員の相互理解は不可欠であり、互いに尊重し合い、連携を緊密に保つことが重要である。現行の事務部門制において、全ての事務部門長を事務職員の中から配置する一方、教学あるいは教員の研究に直接関連する部門・部署には、教員の中から教育部長、学生部長、研究部長等を配置して連携を図っている。また、理事会傘下となるアドミッション・センターおよびエクステンション・センターにおいても、事務職員の事務部門長を配置し、センター長には教員を配置して教員と事務職員の連携を図っている。現在、教授会傘下の多くの各種会議や委員会において、資料作成や議事の記録のために配置する事務職員のほかに、立場や経験の上から意見を述べるために構成員として事務職員を配置している。

なお、事務局長と事務部門長は短大教授会にオブザーバーとして参加しており、教授会内の動向把握と各種情報の共有が図られている。さらに、月 1 回開催する執行部連絡会議では、理事長、学長、事務局長をはじめ、理事会、教授会、事務局それぞれの役職者が参加し、学内の情報を共有する場としている。

(4)教職員の健康管理、就業環境の改善、就業時間の順守等の現状を率直に記述して下さい。

毎年 5 月末から 6 月上旬の時期に、非常勤を含めた全教職員を対象に健康診断を実施している。受診率は他医療機関の受診者を含め、2004（平成 16）年は 61.3%、2005（平成 17）年は 61.5%、2006（平成 18）年度は 73.9%と上昇している。また、2004～2006（平成 16～18）年度の教職員の保健室利用平均件数は年 400 件程度である。

事務職員の超過勤務状況について、2004（平成 16）年度は多くの部門で前年に比べ増加となったが、その後は減少傾向にある。2006（平成 18）年度後期より、毎月第 2 と第 4 水曜日を「ノー超勤デー」と定め、その削減に努めている。また、就業時間外に開催する演奏会の業務や学外の各種講座等の業務にはスライド勤務で対応している。

【特記事項について】

この《Ⅷ管理運営》の領域で示した評価項目や評価の観点の他に、管理運営について努力していることがあれば記述して下さい。

本法人は 2005（平成 17）年に 1915（大正 4）年の大阪音楽学校創立から 90 周年を迎えた。寄附行為の前文には「この学園は、大正 4 年永井幸次が音楽教育の必要を痛感してこれを創立しその努力によって大阪音楽大学に至るまで発展せしめた。この開学の精神を尊重し益々音楽教育に貢献せんとするものである」と記載されている。本学は併設の大阪音楽大学と共同で、「音楽を拓げる」を統一テーマに 2005（平成 17）年度の 1 年間にわたり音楽に関する多くの企画を実施した。この企画実施には、多くの教員はもちろん、各事務部門の連携のもと事務職員も密接に係わり成功した。とりわけ創立 90 周年企画の一つであったオペラ「沈黙」（松村禎三作曲）の公演が 2005（平成 17）年度文化庁芸術祭で芸術祭大賞を受賞したことは、今後の 100 周年に向けて一層努力する弾みとなった。

(2) 特別の事由や事情があり、評価項目や評価の観点が求めることが実現（達成）できないときはその事由や事情を記述して下さい。

特になし。

Ⅸ 財 務

【財務運営について】

(1) 学校法人もしくは短期大学において「中・長期の財務計画」を策定している場合は、計画の名称、策定した経緯等を簡潔に記述して下さい。なお中・長期の財務計画は訪問調査の際に参考資料として拝見いたしますのでご準備下さい。

本法人においては、短期事業計画に基づき4ヵ年の短期財政計画を策定するとともに、中期・長期視点に立った経営安定の観点から中期8ヵ年、長期16ヵ年の財政試算を策定している。この財政計画・試算は、前年度決算確定に伴い毎年度見直し、毎年5月の常任理事会に短期財政計画を上程（参考資料として中期財政試算を添付）し、審議・検討した後同月開催される評議員会に諮問、理事会の承認を得て計画的に財政を遂行している。

(2) 学校法人及び短期大学の毎年度の事業計画及び予算決定に至る過程、手続を簡潔に記述して下さい。

2006（平成18）年3月15日開催の理事会において、2015（平成27）年に迎える創立100周年の展望を見据え、これを実現するための「法人の短期事業計画（2006～2009（平成18～21）年度）」を定め、本法人が取り組むべき諸事業の指針を構築した。また、同計画の進捗状況の把握・管理を行い、これらの情報を理事会に提起する法人事業計画管理会議が設置された。構成員は事業計画担当理事、財務担当理事、大学・短大両副学長、事務局長、エクステンション事務部門長、担当事務部門スタッフである。

年度毎の事業計画と予算編成にあたっては、各執行部から「短期事業計画」を踏まえて事業計画を申請（11月上旬）する。その内、本学の教学関連事項などについては運営会議等や教授会の審議を経て申請する。常任理事会から予算編成方針が提示される一方、申請のあった事業計画案については財務担当理事、事業計画担当理事、事務局長によるヒアリングが行われ、その採否結果を12月上旬に内示する。各事務部門は経常事業及び内定された事業計画を含む予算編成案を12月末までに申請することになる。各年度の事業計画と予算編成案は常任理事会で検討された後、評議員会への諮問を経て、3月開催の理事会で確定する。

(3) 決定した予算の短期大学各部門への伝達方法、予算執行に係る経理、出納の業務の流れを必要な承認手続きを含めて簡潔に記述して下さい。なお経理規程等の財務諸規程について、整備している規程名を列記して下さい。財務諸規程は訪問調査の際に参考資料として拝見いたしますのでご準備下さい。

予算の伝達方法は、各事務部門から12月末までに提出された事業計画に基づく予算申請書に承認内容を記載し各事務部門に通知する。

また予算執行はすべてシステム化されているため、予算成立とともにサーバ上に各事業項目、予算枠など新年度のデータ作成作業を行い、年度の更新とともに各事務部門の端末から予算執行票の起票が可能な状態となる。予算執行は、各事務部門が予算執行票の起票（事業目的・勘定科目等の入力作業）を行ったうえ、各事務部門の責任者の承認・捺印を得た予算執行票が管理事務部門長に提出され、管理事務部門の各担当者が業者等への支払手続きを行うとともに会計伝票の起票を行う。

財務関連規程は以下のとおり。

「経理規程」、「経理規程施行細則」、「固定資産及び物品調達規程」

(4)過去3ヶ年(平成16年度～18年度)の公認会計士監査状況の概要を開催日順に記述して下さい。公認会計士の監査と監事がどのように連携しているか、また公認会計士から指摘を受けた事項があれば、その対応について記述して下さい。[例]公認会計士による監査実施状況(平成16年度～18年度)

公認会計士による監査実施状況

2004～2006（平成 16～18）年度

年	月	日	概 要
2004	4	2	会計帳簿と現金、預金通帳、預金証書等と銀行残高証明書の照合
2004	4～5	4.26～5.1	2003 年度決算の会計処理の妥当性、補正予算と決算額の比較・分析
2004	12	13～17	期中会計処理についての監査
2005	3	22～25	期中会計処理についての監査
2005	4	6	会計帳簿と現金、預金通帳、預金証書等と銀行残高証明書の照合
2005	4	25～29	2004 年度決算の会計処理の妥当性、補正予算と決算額の比較・分析
2005	12	12～16	期中会計処理についての監査
2006	3	27～30	期中会計処理についての監査
2006	4	4	会計帳簿と現金、預金通帳、預金証書等と銀行残高証明書の照合
2006	4	24～29	2005 年度決算の会計処理の妥当性、補正予算と決算額の比較・分析
2006	12	11～15	期中会計処理についての監査
2007	3	28～30	期中会計処理についての監査
2007	4	4	会計帳簿と現金、預金通帳、預金証書等と銀行残高証明書の照合
2007	4	23～28	2006 年度決算の会計処理の妥当性、補正予算と決算額の比較・分析

公認会計士と監事の連携については、毎年5月に行われる理事長・財務担当理事に対する監査法人からの監査実施報告の際、監事も同席し報告を受ける体制をとっている。またこの機会を、本法人の業務が適正・円滑に遂行するための意見交換・検討の場としている。なお、この3年、監査における指摘事項はない。

(5)財務情報の公開は今までどのように行ってきたか。また私立学校法第47条第2項に基づき、財務情報の公開をどのように実施しているか。それぞれの概要を記述して下さい。

財務情報は予算・決算概要を学生に配布するとともに、教職員に対しては「学内報」で公開している。1981（昭和 56）年度決算以降、閲覧希望者に対して決算書類並びに決算詳細説明書を公開し、2005（平成 17）年度からは法人公式ホームページ上での決算書類の公開を開始した。

学校法人会計基準の一部改正により、2005（平成 17）年4月から貸借対照表の注記事項の充実が求められたことから、本法人の決算書類に重要な会計方針や有価証券の時価情報等を記載した。

(6)寄附行為に基づき、どのような基本方針で資金等の保有と運用を考えているか簡潔に記述して下さい。なお資金等の保有と運用に関する規程等が整備されていれば、訪問調査の際に参考資料として拝見いたしますのでご準備下さい。

運用目的の資金に関しては元本の確保など、リスクヘッジを十分に考慮した上でデリバティブ預金、債券などの金融商品を保有している。規程は未整備の状態であり、今後これを整備する必要があるが、現在の運用は、予算に基づき常任理事会の議を経て実施するとともに、その運用内容は、逐次、理事会に報告している。

(7)寄附金・学校債の募集を行っていただければその概要を記述して下さい。なお寄附金・学校債の募集についての印刷物等を訪問調査の際に参考資料としてご準備下さい。

創立 90 周年を記念し、文部科学省の特定公益法人の認定を得て、2005（平成 17）年 10 月より 5 年間の計画で「大阪音楽大学教育研究振興資金」の寄付金募集活動を展開している。この資金は学生が参画する国際交流事業の拡充や、学生自身の計画による国内外短期研修奨励制度の充実などの事業に充当することを目的とする。学校債は発行していない。

【財務体質の健全性と教育研究経費について】

(1)過去3ヶ年(平成16年度～18年度)の資金収支計算書・消費収支計算書の概要を、別紙様式1にしたがって作成し、添付して下さい。

帰属収入において大きなウェイトを占める学生生徒納付金収入は、学生生徒数の減少を受けて毎年減少し、学生生徒納付金比率（学生生徒納付金／帰属収入）は、本法人並びに本学で見た場合、2004（平成 16）年度 82.6%（本学 80.5%）、2005（平成 17）年度 80.2%（本学 80.0%）、2006（平成 18）年度 79.4%（本学 78.9%）と減少傾向に推移している。これを若干でも補う収入獲得策として、補助金獲得と資産運用にも積極的な展開を行っているが、新たな収入獲得策を講じることが課題となっている。基本金組入額は、大きな施設・設備充実計画が概ね完成したこと、並びに基本金組入対象借入金・未払金が多額でないこと、学校法人会計基準の改正に伴う基本金の取り崩しが認められたことに伴い、ここ 2 ヶ年においては、取り崩しと少額の組入が発生した。

消費支出において、人件費比率（人件費／帰属収入）は本法人並びに本学で見た場合、2004（平成 16）年度 62.7%（本学 67.4%）、2005（平成 17）年度 65.3%（本学 74.1%）、2006（平成 18）年度 65.9%（本学 77.2%）と推移し、帰属収入の減少に伴い高い比率を示しているため、更なる人件費削減を講ずる必要がある。また、教育研究比率（教育研究経費／帰属収入）は、本法人並びに本学で見た場合、2004（平成 16）年度 24.3%（本学 24.6%）、2005（平成 17）年度 26.4%（本学 28.0%）、2006（平成 18）年度 25.5%（本学 26.2%）と推移しており、教育研究活動を積極的に展開していることの表れと認識している。

上記を受けた消費収支差額は、本法人としては、各年度とも当年度消費収入超過となっているが、本学の帰属収支差額比率〔（帰属収入－消費支出）／帰属収入〕は 2004（平成 16）年度から 1.6%、△10.1%、△9.9%と推移し、消費支出超過の状況にある。

(2)平成19年3月31日現在の貸借対照表の概要を、別紙様式2にしたがって作成し、添付して下さい。

本法人の総資産は 17,412,422 千円、総負債は 2,732,860 千円、正味資産は 14,679,562 千円である。総資産は対前年比 105,932 千円の減少となっているが、これは固定資産総額では大きな変動がなかった中で流動資産が減少したことによるものである。総負債は約定借入金返済等に伴い対前年比 156,351 千円減少し、この減少額が総資産の減少額を上回る結果となった。

また、基本金については、未組入額が 58,668 千円となり、この結果、自己資金構成比率（自己資金／総資金）は 84.3%、総負債比率〔（固定負債＋流動負債）／総資産〕は 15.7%、負債比率[総負債／自己資金]は 18.6%で、全国平均レベルとなった。

なお固定負債の内の退職給与引当金は全教職員の退職金 100%相当額を計上している。

(3)財産目録及び計算書類(資金収支計算書、資金収支内訳表・人件費支出内訳表・消費収支計算書・消費収支内訳表・貸借対照表・固定資産明細表・借入金明細表・基本金明細表)について、過去3ヶ年(平成16年度～18年度)分を訪問調査の際に参考資料としてご準備下さい。

(4)過去3ヶ年(平成16年度～18年度)の短期大学における教育研究費比率(消費収支計算書の教育研究経費を帰属収入で除した比率)を、小数点以下2位を四捨五入し1位まで求め記述して下さい。

帰属収入に占める教育研究経費の比率は24%～28%の間で推移しているが、今後教育研究の充実のためにこの比率を一層高める努力が必要である。

教育研究経費比率

2004～2006（平成16～18）年度

	2004 年度	2005 年度	2006 年度
教育研究経費(a)	410,854 千円	394,753 千円	351,476 千円
帰属収入(b)	1,667,602 千円	1,410,324 千円	1,340,552 千円
教育研究経費比率(a)/(b)	24.6%	28.0%	26.2%

【施設設備の管理について】

(1)固定資産管理規程、図書管理規程、消耗品及び貯蔵品管理規程等、施設設備等の管理に関する諸規程を、財務諸規程を含めて一覧表として示して下さい。なお整備した諸規程を訪問調査の際に参考資料としてご準備下さい。

○ 施設設備の管理に関する規程

「経理規程」、「経理規程施行細則」、「固定資産及び物品調達規程」、「固定資産及び物品管理規程」、「施設貸出規程」、「備品・楽器利用規程」、「駐車場・駐輪場使用規程」、「ホスト・サーバ設置運用規程」、「付属図書館図書管理規程」、「音楽博物館規程」

(2)火災等の災害対策等、以下の危機管理対策について現状を簡潔に記述して下さい。

- ① 火災等の災害対策
- ② 防犯対策
- ③ 学生、教職員の避難訓練等の対策
- ④ コンピュータのセキュリティ対策
- ⑤ 省エネ及び地球環境保全対策
- ⑥ その他

① 火災等の災害対策

冊子「防災のしおり」を「本校（庄内校地）」「O号館」「K号館」「ザ・カレッジ・オペラハウス」「付属音楽幼稚園」「豊南寮」の計6種類発行し、火災や事故等の緊急事態が発生した場合の対処方法をマニュアル化している。また所轄消防署の指導を受け、2006（平成18）年2月には「自衛消防隊規程」を制定し、火災時の指揮命令、役割分担などを具体化した。

② 防犯対策

本法人全体において発生または発生するおそれがある様々な事象に伴う危機に、迅速かつ的確に対処するため、2007(平成19)年度に入り「危機管理規程」を制定した。この規程を基にして災害、事故、防犯対策等を総合的に見直しているところである。

③ 学生、教職員の避難訓練等の対策

火災、地震の際の避難は「防災のしおり」でマニュアル化している。また毎年2回実施予定の防火訓練においても避難誘導を積極的に取り入れている。

④ コンピュータのセキュリティ対策

「情報セキュリティポリシーに関する規程」を始めとする諸規程により本学の情報保護、個人情報の保護、ウイルス対策等、セキュリティの確保に関する具体的な方策を定めている。またシステム管理室を設置し、専従の担当者が万全を期している。

⑤ 省エネ及び地球環境保全対策

自治体の施策等に協調し、使用済み用紙の 100%リサイクル化、ゴミの減量・分別・再資源化、エアコンの温度管理などに積極的に取り組んでいる。

⑥ その他

学外の専門家からコンサルティングを受け、耐震補強やアスベスト除去工事を行うなど校舎の安全性確保に努めている。

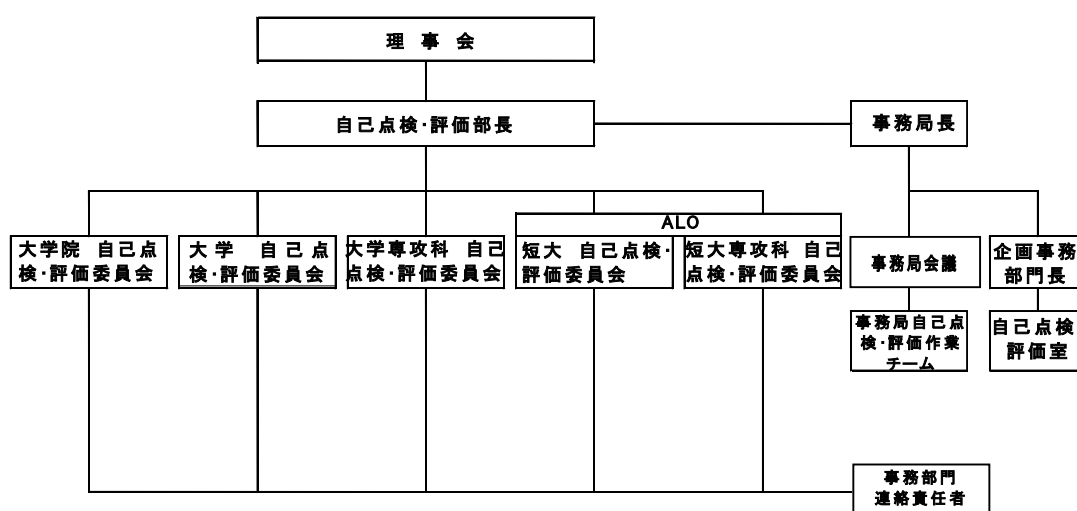
X 改革・改善

【自己点検・評価について】

(1)短期大学では自己点検・評価を、短期大学の運営のなかでどのように位置づけているか。また自己点検・評価を実施するための組織、規程等の整備状況を記述して下さい。また今後、自己点検・評価をどのように実施しようと考えているかについても記述して下さい。

「大阪音楽大学短期大学部学則」第2条において、自己点検・評価を行いその結果を公表することを定めている。これに基づき「学校法人大阪音楽大学自己点検・評価組織規程」を定めている。この規程に基づき本学と併設大学・同大学院との間に、全学の「自己点検・評価統括委員会」を設置し、本学の自己点検・評価活動は「短大自己点検・評価委員会」、「短大専攻科自己点検・評価委員会」が担うものとしている。

自己点検・評価組織図（略図）



自己点検・評価統括委員会(構成員 11名、任期 2年)

自己点検・評価部長・兼担当理事(議長)、大学副学長、短大副学長、短大 ALO、事務局長、大学委員長、大学専攻科委員長、大学院委員長、短大委員長、短大専攻科委員長、企画事務部門長

(2)過去3ヶ年(平成16年度～18年度)の自己点検・評価報告書の発行状況を記述して下さい。またその報告書の配付先の概要を記述して下さい。なお過去3ヶ年(平成16年度～18年度)にまとめられた自己点検・評価報告書を訪問調査の際にご準備下さい。

○「大阪音楽大学短期大学部の現状と課題 自己点検・評価報告書 2002－2004 年度」(大阪音楽大学短期大学部) 2006(平成18)年3月27日発行・公表
法人公式ホームページに公開中

○「自己点検・評価報告書 教育の現状と課題 2001－2004 年度」(大阪音楽大学短期大学部専攻科) 2006(平成18)年7月13日発行・公表
法人公式ホームページに公開中

両報告書の配布先は、文部科学省、日本短期大学協会、短期大学基準協会、その他関係諸機関等となっている。

【自己点検・評価の教職員の関与と活用について】

(1)平成18年度までに行った自己点検・評価に関わった教職員の範囲を記述して下さい。また今後、どのような教職員の関わり方が望ましいと考えているかを記述して下さい。

- 自己点検・評価統括委員会 構成員 11 名 任期 2 年 2006～2007（平成 18～19）年度
自己点検・評価部長・兼担当理事（議長）、大学副学長、短大副学長、短大 A L O、
事務局長、大学委員長、大学専攻科委員長、大学院委員長、短大委員長、短大専
攻科委員長、企画事務部門長
- 短期大学部自己点検・評価に係る体制
短大自己点検・評価委員会 5 名（委員長、委員 4 名）
短大専攻科自己点検・評価委員会 4 名（委員長、委員 3 名）
事務機構（事務局長、企画事務部門長、事務部門連絡責任者 10 名、自己点検・評価室
スタッフ 2 名）

今後の教職員の関わり方について、基本的には理事会・教授会・事務機構が、有機的に連携する現在の体制を継続することが望ましいと考えている。音楽科及び専攻科の自己点検・評価委員会と全専任教員の共同作業をより組織的に進めていきたい。

(2)平成 18 年度までに行った自己点検・評価結果の活用についてその実績を記述して下さい。また今後、自己点検・評価の結果をどのように活用しようと考えているかについても記述して下さい。

本学の自己点検は、建学の精神に基づく教育目標・教育研究・学生生活・社会的活動・管理・運営等の基本的事項について自己点検・評価を行い、客観的な評価、教育研究への還元、及び社会への説明責任等による自己点検・評価の充実を目指している。報告書は法人公式ホームページ上に公開中である。運営会議及び 2004（平成 16）年度に発足した「教育改革プロジェクト・チーム」は、自己点検・評価を検討した結果、2006（平成 18）年度には、教育課程の見直し・改善を実施すべく「ワーキンググループ」を発足させた。

【相互評価や外部評価について】

(1)平成18年度までに行った相互評価及び外部評価の概要を示し、評価結果の活用についてその実績を記述して下さい。

2006（平成 18）年度までに相互評価は行っていない。外部評価については今回 2007（平成 19）年度評価を（財）短期大学基準協会に申請する機会が初めてである。

(2)相互評価や外部評価を実施するための組織、規程等の整備状況を記述して下さい。また今後、相互評価や外部評価をどのように実施しようと考えているかについても記述して下さい。

相互評価を実施するための組織及び規程は設けていない。外部評価に関しては「学校法人大阪音楽大学自己点検・評価組織規程」において、自己点検・評価統括委員会が行うことを定めている。

これまで本学は併設大学との間で常に相互の対話を行ってきたこと、評議員会及び理事会において多様な有識者の意見が出され、反映してきたことを踏まえて、相互評価については先ず学内において議論を行いたい。今後相互評価を行う場合には、現行の組織及び規程の見直し等の整備を進めたい。

【第三者評価（認証評価）について】

(1) 第三者評価を実施するための学内組織の概要を記述して下さい。

A L O、短大自己点検・評価委員長、短大専攻科自己点検・評価委員長を中心にして、本学自己点検・評価を実施するための学内組織を構成する。短大自己点検・評価委員会及び短大専攻科自己点検・評価委員会が、自己点検・評価の集約を行うとともに、報告書原案の作成を行う。また、自己点検・評価部長、A L O、短大自己点検・評価委員長、短大専攻科自己点検・評価委員長、事務局長より構成される編集委員会を設置し報告書の成案を作成する。

(2) 第三者評価にあたって短期大学の決意を述べて下さい。理事長、学長、各部門の長及びALO(第三者評価連絡調整責任者)がそれぞれ記述されても結構です。

本来、自己点検・評価活動は自主的に行われるべき活動であり、報告書はその日常的活動結果を報告する公表物でなければならない。このことを考えれば、資料は日常的に蓄積され、その根拠資料を基に改革・改善へ向けた検討が各部署内において定期的に行われる必要がある。

第三者評価は、本学以外の識者からの貴重な意見を得る機会であり、あらためて気付く点もあると思われる。厳しい指摘もあるであろう。しかしながらそれら貴重な意見や指摘は、本学がより一層充実した音楽高等教育機関として発展するために必要不可欠であり、結果を真摯に受け止め、全学を挙げて必要な改革・改善を遂行していく所存である。

【特記事項について】

(1) この《X 改革・改善》の領域で示した評価項目や評価の観点の他に、例えば評価に関する教職員への研修の実施等、当該短期大学が改革・改善について努力していることがあれば記述して下さい。

特になし。

(2) 特別の事由や事情があり、評価項目や評価の観点が求めることが実現(達成)できないときはその事由や事情を記述して下さい。

特になし。

《将来計画の策定（自由記述）》の記述について

この「将来計画の策定」は自由記述です。したがって、必ずしも記述する必要はありません。しかし短期大学の現在を理解するためには、将来どのような方向に向かおうとしているのかを知ることも重要です。その意味で、短期大学の将来計画（中期・長期計画）がありましたら、差し支えのない範囲で記述して下さい。

学校法人大阪音楽大学は、2005（平成 17）年 7 月 27 日開催の理事会において「創立 100 周年（＝2015 年）展望」及び「法人の短期事業計画案策定に向けての展開方針」を決定した。2006（平成 18）年 3 月 15 日開催の理事会において、「法人の短期事業計画案 2006～2009（平成 18～21）年度」を定め、現在は、2007 年 5 月 29 日開催の理事会において決議された「法人の 2007～2010（平成 19～22）年度短期事業計画」を作成している。本学はこの事業計画に基づいて事業を展開している。参考までに「展望」を掲載する。

創立 100 周年（＝2015 年）展望

人的、財政的な法人環境の整備によって、“教育の質と特色”および“洗練された人的資本”を社会的評価獲得の源泉として教育水準を更に向上させ、時代が求める音楽人を輩出し、高い学生満足度の達成を実現している。